

怪談牡丹灯籠

怪談牡丹灯籠

三遊亭圓朝

青空文庫

一

寛宝三年の四月十一日、まだ東京を江戸と申しました頃、湯ゆ島天神の社にて聖徳太子の御祭礼を致しまして、その時大層参詣の人人が出て群集雜沓を極めました。こゝに本郷三丁目に藤村屋新兵衛といふ刀屋がございまして、その店先には良い代物が列べてある所を、通りかゝりました一人のお侍は、年頃二十二とも覚しく、色あくまでも白く、眉毛秀びで、目元きりゝつとして少し癧瘍持と見え、鬚の毛をぐうつと吊り上げて結わせ、立派なお羽織に結構なお袴を着け、雪駄をはいて前

に立ち、背後に浅葱の法被に梵天帯を締め、真鍮卷の木刀を差したる中間が附添い、此の藤新の店先へ立寄つて腰を掛け、列べてある刀を眺めて。

侍「亭主や、其処の黒糸だか紺糸だか知れんが、あの黒い色の刀柄に南蛮鉄の锷が附いた刀は誠に善さそうな品だな、ちよつとお見せ」

亭「へいへい、こりやお茶を差上げな、今日は天神の御祭礼で大層に人が出ましたから、定めし往来は埃で嚙お困りあそばしましたろう」

と刀の塵を払い、

亭「これは少々装飾が破れて居りまする」

侍「成程少し破れて居るな」

亭「へい中身は随分お用になります、へいお 差 料 になされてもお間に合います、お中身もお性も慥にお堅い品でございまして」

と云いながら、

亭「へい御覽遊ばしませ」

と差出すを、侍は手に取つて見ましたが、旧時まえにはよくお侍様が刀を買めす時は、刀屋の店先で引抜いて見て入らつしやいましたが、あれは危あぶないことで、若しお侍が氣でも違いまして抜身ぬきみを振ふりまわされたら、本当に危険けんのんではありますか。今此のお侍も本当に刀を鑑みるお方ですから、先ず中身の反り工合ぐあいから焼曇おちの有り

無しより、差表差裏、鉢尖何や彼や吟味致しまするは、
 流石にお旗下の殿様の事ゆえ、通常の者とは違います。
 侍「とんだ良さそうな物、拙者の鑑定する処では備前物の
 ように思われるが何うじやな」

亭「へい良いお鑑定で入つしやいまするな、恐入りました、仰せ
 の通り私共仲間の者も天正助定であろうとの評判でござ
 いますが、惜しい事には何分無銘にて残念でございます」

侍「御亭主やこれはどの位するな」

亭「へい、有難う存じます、お掛値は申上げませんが、只今も申
 します通り銘さえござりますれば多分の価値もございますが、無
 銘の所で金拾枚でござります」

侍「なに拾両とか、些ちつと高いようだな、七枚半には負まからんかえ」
 亭「どう致しまして何分それでは損が参りましてへい、なかく
 もちましてへい」

と頗りに侍と亭主と刀の値段の掛けひきをいたして居りますと、
 背後の方で通り掛りの醉漢が、此の侍の中間を捕えて、
 「やい何をしやアがる」

と云いながらひよろくと踉よろけてハタと臀餅しりもちを搗つき、漸ようやく起
 き上あがつて額ひたいで睨にらみ、いきなり拳骨げんこつを振ふるい丁ちようく々と打たれて、
 中間は酒の科とがと堪かんにん忍しのぐして逆らわず、大地に手を突き首こうべを下おげて、
 頻りに詫わびても、酔漢よっぱらいは耳にも懸けず猛り狂たけつて、尚も中間
 をなぐり居おるを、侍はト見れば家来の藤助だから驚きまして、酔

漢に對い会釈をなし、

侍「何を家来めが無調法を致しましたか存じませんが、当人に成り代り私がお詫申上げます、何卒御勘弁を」

醉「なに此奴は其の方の家来だと、怪しからん無礼な奴、武士の供をするなら主人の側に小さくなつて居るが当然、然るに何だ天水桶から三尺も往来へ出しやばり、通行の妨げをして拙者を衝き当らせたから、止むを得ず打擲いたした」

侍「何も弁えぬものでござりますれば偏に御勘弁を、手前成り代つてお詫を申上げます」

酔「今この所で手前がよろけた処をトーンと衝き当つたから、犬でもあるかと思えば此の下郎めが居て、地べたへ膝を突かせ、見

なさる通りこれ此の様に衣類を泥だらけにいたした、無礼な奴だから打擲致したが如何致した、拙者せつしゃの存分に致すから此処へお出しなさい』

侍「此の通り何も訳の解わからん者、犬同様のものでござりますから、何卒御勘弁下されませ」

醉「こりや面白い、初めて承受けたまわった、侍が犬の供を召連れて歩くと
いう法はあるまい、犬同様のものなら手前申もうしう受けて帰り、番木
籠かんでも喰やわして遣ならう、何程詫びても料簡は成りません、これ
家來の無調法を主人が詫わぶるならば、大地だいじへ両手を突き、重々じゅう／＼
恐れ入つたと首こうべを地づちに叩き着けて詫わびをすること然るべきに、何だ
片手に刀の鯉口こいぐちを切つていながら詫わびをする杯などとは侍の法にある

まい、何だ手前は拙者を斬る氣か」

侍「いや是は手前が此の刀屋で買取ろうと存じまして只今中身を

鑿みて居ました処へ此の騒ぎに取敢えず罷出ましたので」

醉「エーイそれは買うとも買わんとも貴方の御勝手じや」

と罵るを侍は頻りにその醉狂を宥めて居ると、往来の人々

は

「そりや喧嘩だ危いぞ

「なに喧嘩だとえ」

「おゝサ対手は侍だ、それは危険だな」

と云うを又一人が

「なんでげすねえ」

「左様さ、刀を買うとか買わないとかの間違だそうです、彼の酔
ぱらつている侍が初め刀に価ねを附けたが、高くて買われないで居
る処ところへ、此方こちらの若い侍が又その刀に価を附けた処から 酔よつぱらい
怒おこり出し、己おれの買おうとしたものを己に無沙汰ぶさたで価を附けたとか
何とかの間違いらしい」

と云えれば又一人が、

「なにサ左様そとうじやアありませんよ、あれは犬の間違いだアね、己
の家の犬に番木籠まちんを喰くわせたから、その代りの犬を渡せ、また番
木籠を喰くわせて殺ころそうとかいうのですが、犬の間違いは昔からよ
くありますよ、白井權八しらい ごんぱちなども矢やつぱり張ぱり犬の喧嘩けんかからあんな騒動
に成つたのですからねえ」

と云えば又傍そばに居る人が

「ナニサそんな訳じやアない、あの二人は叔父甥おじおいの間柄で、あの真赤まっかに酔よっぱら払つて居るのは叔父さんで、若い綺麗な人が甥だそうだ、甥が叔父に小遣錢こづかいせんを呉れないと云う処からの喧嘩けんかだ」

と云えば、又側にいる人は

「ナーニあれは 巾きん着切ちやくきりだ」

などと往来の人々は口に任せて種々いろくの評判を致している中に、

一人の男が申しますは

「あの 酔漢よっぱらいは 丸山本妙寺まるやまほんみょうじ 中屋敷に住む人で、元は小出様こいでの御家来であつたが、身持みもちが悪く、酒色しゅしよくに耽り、折々おりくは抜ぬき刀つばぬきなどして人を威おどかし乱暴を働いて市中しちゆうを横行おうぎようし、或あ

時は料理屋へ上り込み、十分酒肴に腹を肥らし勘定は本妙寺中屋敷へ取りに来いと、横柄に喰倒し飲倒して歩く黒川孝藏という悪侍ですから、年の若い方の人は見込まれて結局酒でも買わせられるのでしようよ』

『左様ですか、並大抵のものなら斬つてしまいますが、あの若い方はどうも病身のようだから斬れまいねえ』

「ナニあれは剣術を知らないのだろう、侍が剣術を知らなければ腰抜けだ』

などとさゝやく言葉がちらりく若い侍の耳に入るから、グツと込み上げ、癇癖に障り、満面朱を注いだる如くになり、額に青筋を顯わし、きつと詰め寄り、

侍「是程までにお詫びを申しても御勘弁なさりませぬか」
 酔「くどい、見れば立派なお侍、御直参か何れの御藩中かは
 知らないが尾羽打枯おはうちからした浪人と侮あなどり失礼至極、愈々勘弁がな
 らなければどうする」

と云いさま、ガアツと痰たんを彼かれの若侍の顔に唾はき付けました故、
 流石さすがに勘弁強い若侍も、今は早や怒氣一度に面おもてに顕あらわれ、

侍「汝おの下わてに出れば附つけ上あがり、ますく募つる罵詈暴行ぱりぼうこう、武士たるものゝ面めんじょう上じょうに痰を唾はき付けるとは不届ふとゞきな奴、勘弁が出来なければ斯こうする」

といいながら今刀屋で見ていた備前物の刀柄に手が掛るが早い
 か、スラリと引抜ひきぬき、醉よつぱらい漢かの鼻の先へぴかりと出したから、

見物は驚き慌て、弱そうな男だからまだ引抜はしまいと思つたに、
 ぴかくといつたから、ほら抜いたと木の葉の風に遇つたよう
 四方八方にばらくと散乱し、町々の木戸を閉じ、路地を締め切
 り、商人あきんどは皆戸を締める騒ぎにて町まちなか中はひつそりとなりまし
 たが、藤新の亭主一人は逃場にげばを失い、つくねんとして店頭みせさきに坐
 つて居りました。さて黒川孝藏は醉払よっぱらつては居りますれども、
 生酔なまえい本性ほんじょう違わずに、彼の若侍の剣幕けんまくに恐れをなし、よ
 ろめきながら二十歩ばかり逃げ出すを、侍はおのれ卑怯ひきょうなり、
 口程でもない奴、武士が相手に背後うしろを見せるとは天下の耻辱にな
 る奴、還せかえくと、雪駄せつたばき穿うにて跡を追い掛ければ、孝藏は最早
 かなわじと思いまして、踉よろめく足を踏みしめて、一刀とうのやれ柄づかに手

を掛けで此方こなたを振り向く処を、若侍は得たりと踏込みざま、えい
 と一聲ひとこえ肩先を深く。ツツリと切込む、斬られて孝藏はアツと叫
 び片膝を突く処をのしかゝり、エイと左の肩より胸元へ切付けま
 したから、斜はずに三つに切られて何だか龜井戸かめいどの葛餅くずもちのようにな
 つてしましました。若侍は直すぐと立派に止めを刺して、血刀ちがたなを振
 いながら藤新の店頭みせさきへ立たちかえ帰りましたが、本より斬殺きりころす料簡
 でございましたから、些ちつとも動する氣色もなく、我が下郎に向い、
 侍「これ藤助、その天水桶てんすいおけの水を此の刀にかけろ」

と言いつければ、最前さいぜんより慄ふるえて居りました藤助は、

藤「へいとんでもない事になりました、若し此の事から大殿様の
 お名前でも出ますようの事がございましては相済みません、元は

皆な私から始まつた事、どう致して宜しゆうございましょう」

と半分は死人の顔。

侍「いや左様^{さよう}に心配するには及ばぬ、市中を騒がす乱暴人、切捨^{きりす}てゝも苦しくない奴だ、心配するな」

と下郎を慰めながら泰然として、呆氣^{あつけ}に取られたる藤新の亭主を呼び、

侍「こりや御亭主や、此の刀はこれ程切れようとも思いませんだつたが、なかく^{ふる}斬れますな、余程能く^よ斬れる」

といえば亭主は慄えながら、

亭「いや貴方様^{あなたさま}のお手が冴えているからでござります」

侍「いや／＼全く刃物がよい、どうじやな、七両二分に負けても

宜よ
かろうな

と云えれば藤新は 係合かいりあい を恐れ、

「宜しゆうございます」

侍 「いやお前の店には決して迷惑は掛けません、兎に角此の事を
 直す
 ぐに自身番に届けなければならん、名刺なふだを書くから 一寸ちよつと 研すぢり
 箱ばこ を貸して呉れろ」

と云われても、亭主は己れの傍そばに硯箱いんばこのあるのも眼に入らず、

慄え声ふるごえにて、

「小僧や硯箱いんばこを持つて來い」

と呼べど、家内かないの者は先きの騒ぎに何れへか逃げてしまい、一
 人も居りませんから、寂然ひつそりとして返事がなければ、

侍「御亭主、お前は流石に御渡世柄だけあつて此の店を一寸も動かず、自若としてござるは感心な者だな」
 亭「いえナニお誉めで恐入ります、先程から早腰が抜けて立ないので」

侍「硯箱はお前の側わきにあるじやアないか」

と云われてようく心付き、硯箱を彼の侍の前に差出すると、侍は硯箱の蓋ふたを推開おしひらきて筆を取り、すらくと名前を 飯島平太郎いいじまへいたろうと書きおわり、自身番に届け置き、牛込のお邸やしきへお帰りに成りまして、此の始末を、御親父飯島平左衛門様にお話を申上げましたれば、平左衛門様は宜く斬つたと仰せありて、それから直ちにお頭かしらたる小林權太夫こばやしごんだゆう殿へお届けに及びましたが、させるお咎とが

めもなく切り徳切られ損となりました。

二

さて飯島平太郎様は、お年二十二の時に悪者を斬殺して毫も動ぜぬ剛気の胆力でございましたれば、お年を取るに隨い、益々智慧が進みましたが、その後御親父様には亡くなられ、平太郎様には御家督を御相続あそばし、御親父様の御名跡をお嗣ぎ遊ばし、平左衛門と改名され、水道端の三宅様と申上げまするお旗下から奥様をお迎えになりまして、程なく御出生のお女子をお露様と申し上げ、頗る御器量美なれば、御両親は掌たによし

中の璧と愛で慈しみ、後にお子供が出来ませず、一粒種の事なれば猶さら撫育される中、隙ゆく月日に関守なく、今年は早や嬢様は十六の春を迎えられ、お家もいよ／＼御繁昌でございましたが、盈つれば虧くる世のならい、奥様には不図した事が元となり、遂に帰らぬ旅路に赴かれましたところ、此の奥様のお附の人に、お國と申す女中がございまして、器量人並に勝れ、殊に起居周旋に如才なれば、殿様にも独寝の閨淋しいところから早晚此のお國にお手がつき、お國は到頭お妾となり済しましたが、奥様のない家のお妾なればお羽振もずんと宜しい。然るにお嬢様は此のお國を憎く思い、互にすれ／＼になり、國々と呼び附けますと、お國は又お嬢様に呼捨にされるを厭に思い、

お嬢様の事を悪ざまに殿様に彼かれこれ是つけくちと告つげくち口くちをするので、嬢様と國との間な何んとなく落着かず、されば飯島様もこれを面倒な事に思いまして、柳島やなぎしまへん辺あに或寮あるを買い、嬢様にお米よねと申す女中を附けて、此の寮に別居させて置きましたが、そも飯島様のあやまりにて、是よりお家のわるくなる初めでございました。さて其の年も暮れ、明れば嬢様は十七歳にお成りあそばしました。こゝに予て飯島様へお出入でいりのお医者に山本志丈やまもとしじょうと申す者がござります。此の人一体は古方家こほうかではありますけれど、実はお帮間医者たいこいしゃのさじお喋しゃべりで、諸人助けのために匙さじを手に取らないという人物でございますれば、大概のお医者なれば、一寸紙入ちよつとかみいれの中にもお丸がんや薬くわか散こぐすり薬はいでも這入はいっていますが、此の志丈の紙入の中には手

品の種や百眼などが入れてある位なものでござります。さて此の医者の知己で、根津の清水谷に田畠や貸長屋を持ち、その上りで生計を立てゝいる浪人の、萩原新三郎と申します者が有りまして、生れつき美男で、年は二十一歳なれどもまだ妻をも娶らず、自身で暮す鰥に似ず、極内氣でございますから、外出も致さず閉籠り、鬱々と書見のみして居ります處へ、或るひ日志丈が尋ねて参り、

志「今日は天氣も宜しければ亀井戸の臥竜梅へ出掛け、その帰るさに僕の知己飯島平左衛門の別荘へ立寄りましよう、いえサ君は一体内氣で入らつしやるから婦女子にお心掛けなさいませんが、男子に取つては婦女子位楽しみなものはないので、今申した飯

島の別荘には婦人ばかりで、それはく余程別嬪な嬢様に親切な忠義の女中と只二人ぎりですから、冗談でも申して来ましよう、本当に嬢様の別嬪を見るだけでも結構なくらいで、梅もよろしいが動きもしない口もきゝません、されども婦人は口もきくしサ動きもします、僕などは助平の性すけべいたちだから余程女の方が宜しい、マア兎も角も來たまえ』

と誘い出しまして、二人打連れ臥竜梅へまいり、その帰り路に飯島の別荘へ立寄り、

志「御免下さい、誠にしばらく」

という声聞き附け、

米「何方さま、おや、よく入つしやいました」

志「是はお米さん、其の後は遂にない存外の御無沙汰をいたしました、嬢様にはお変りもなく、それはくゝ頂上々々、牛込から此処へお引^{ひきうつ}移りになりましたからは、何分にも遠方ゆえ、存じながら御無沙汰に成りまして誠に相済みません」

米「まア貴^{あなた}方が久しくお見えなさいませんから何うなすつたかと思つて、毎度お噂を申して居りました、今日は何^{どどちら}方へ」

志「今日は臥龍梅へ梅見に出かけましたが、梅見れば方図^{ほうず}がないという譬^{たとえ}の通り、未だ慊^またらず、御庭^{ごてい}中の梅花^{ばいか}を拝見いたしました

く参りました」

米「それは宜^よく入らつしやいました、まア何卒^{どうぞこちら}此方^{はい}へお入りあそばせ」

と庭の切戸を^{きりど}_{ひら}開きくれゝば、

「然らば御免」^{しか}

と庭口へ通ると、お米は如才なく、

米「まあ一服召上りませ、今日は能く入らつしゃつて下さいまし
た、平常は私と嬢様ばかりですから、淋しくつて困つて居るところ、誠に有難うございます」

志「結構なお住いでげすな……さて萩原氏、今日君のお名吟は
恐れ入りましたな、何とか申したな、えゝと「煙草には燧火のむ
まし梅の中」^{なか}とは感服々々、僕などのような横着者^{おうちやくもの}は出る句
も矢張り横着で「梅ほめて紛らかしけり門違^{まぎ}い」かね、君のよ
うな書見ばかりして鬱々^{うつく}としてはいけませんよ、先刻の残^{さつき}ざんし

酒さけが此處こゝにあるから一杯あがれよ……何んですね、厭いやです……それでは獨りで頂戴いたします」

と瓢箪ひょうたんを取り出す所へお米出いきだで來り、

米「どうも誠にしばらく」

志「今日は嬢様に拝顔はいがんを得たく参りました、此處こゝに居るは僕が極ごくの親友です、今日はお土産みやげも何なんにも持參致しません、エヘ、有難うござります、是は恐れ入ります、お菓子を、羊羹ようかん結構、萩原君召し上れよ」

とお米が茶へ湯をさしに行つたあとを見送り、

「こゝの家うちは女二人ぎりで、菓子などは方々から貰つても、喰い切れずに積上げて置くものだから、皆黴かびを生はやかして捨てるくらい

のものですから、喰つてやるのが却つて親切ですから召上れよ、
實に此の家うちのお嬢様は天下に無い美人です、今に出て入いらつしやる
から御覽なさい』

とお喋りをしている処ところへ向うの四畳半の小座敷から、飯島のお嬢さまお露が人珍らしいから、障子の隙間より此方を覗いて見ると、志丈の傍に坐つているのは例の美男萩原新三郎にて、男ぶりといい人品といい、花の顔月の眉、女子にして見まほしき優男だから、ゾツと身に染み何うした風の吹廻しであんな綺麗な殿御どのごが此處こゝへ来たのかと思うと、カツと逆上のぼせて耳み、た朶たぼが火の如くカツと真紅まっかになり、何となく間が悪くなりましたから、はたと障子をしめきり、裡うちへ入つたが、障子の内では男の顔が見られ

ないから、又そつと障子を明けて庭の梅の花を眺める態ぶりをしながら、ちよいしくと萩原の顔を見て又恥かしくなり、障子の内へ這はい入るかと思えば又出て来る、出たり引込んだり引込んだり出たり、もじくしているのを志丈は見つけ、

志「萩原君、君を嬢様が先刻から熟しき々／＼と見ておりますよ、梅の花を見る態ぶりをしていても、眼の球は全て此方こちらを見ているよ、今日は頓とんと君に蹴られたね」

と言ひながらお嬢様の方を見て

「アレ又引込んだ、アラ又出た、引込んだり出たり出たり引込んでり、怡まるで鶉うの水みずのみ呑くく」と噪さわぎどよめいでいる処ところへ下女のお米出きたりで來り

「嬢様から一献申し上げますが何もございません、眞の田舎料理でございますが御緩りと召上り相変らず貴方の御冗談を伺いたいと仰しやいます」

と酒肴を出だせば、

志「何うも恐入りましたな、へい是はお吸物誠に有難うございます、先刻から冷酒は持參致しておりますが、お燭酒は又格別、有難うございます、何卒嬢様にも入つしやるよう今日は梅じやアない実はお嬢様を、いやなに」

米「ホ、只今左様申し上げましたが、お連れのお方は御存じがないのですから間が悪いと仰しやいますから、それならお止し遊ばせと申し上げた処が、それでも往つて見たいと仰しやいますところ

の

志「いや、此は僕の真の知己にて、竹馬の友と申しても宜しい位なもので、御遠慮には及びませぬ、何卒ちよつと嬢様にお目にかかりたくつて参りました」

と云えば、お米はやがて嬢様を伴い来る。嬢様のお露様は恥かしげにお米の後に坐つて、口の中にて

「志丈さん入っしゃいまし」

と云つたぎりで、お米が此方へ来れば此方へ來り、彼方へ行けば彼方へ行き、始終女中の後にばかりくつついて居る。

志「存じながら御無沙汰に相成りまして、何時も御無事で、此の人は僕の知己ちかづきにて萩原新三郎と申します独身者ひとりものでございます

が、お近づきの為め一寸ちよつとお盆さかづきを頂戴いたさせましよう、おや何だかこれでは御婚礼の三々九度たれま さかづきのようでござります」

と少しも間断なく取巻きますと、嬢様は恥かしいが又嬉しく、萩原新三郎を横目にじろく見ない振ぶりをしながら見て居ります。と氣があれば目も口ほどに物をいうと云う譬たとえの通り、新三郎もお嬢様の艶容やさすがたに見惚みとれ、魂も天外に飛ぶ計りです。そうこうする中に夕景になり、灯火あかりがちらく点く時刻となりましたけれども、新三郎は一向に帰ろうと云わないから。

志「大層に長座ちようざを致しました、さお暇いとまを致しましよう」

米「何ですねえ志丈さん、貴方あなたはお連れさまありますからまあ宜よいじやアありませんか、お泊りなさいな」

新「僕は宜しゆうござります、泊つて参つても宜しゆうござります」

志「それじやア僕一人憎まれ者になるのだ、併し又斯様な時は憎まれるのが却つて親切になるかも知れない、今日はまず是迄としておさらば！」

新「鳥渡便所を拝借致しどうござります」

米「さア此方へ入つしやいませ」

と先に立つて案内を致し、廊下伝いに参り

「此処が嬢様のお室でございますから、まあお這入り遊ばして一服召上つて入つしやいまし」

新三郎は

「有難うござります」

と云いながら用場へ這入りました。

米「お嬢様え、彼のお方が、出て入つしやつたらばお水を掛けて
お上げ遊ばせ、お手拭は此処にござります」

と新しい手拭を嬢様に渡し置き、お米は此方こちらへ帰りながら、お

嬢様があゝいうお方に水を掛けて上げたならば嘸さざお嬉しかろう、
彼のお方は余程御意に適つた様子。と独ひとりごと言をいいながら元
の座敷へ参りましたが、忠義も度を外すと却かえつて不忠に陥おちて、
お米は決して主人に猥みだらな事をさせる積りではないが、何時も嬢
様は別にお樂みもなく、鬱ふきいでばかり入つしやるから、斯こういう
冗談でもしたら少しほお氣晴しになるだろうと思い、主人のため

を思つてしたので。さて萩原は便所から出て参りますと、嬢様は恥かしいのが一杯で只茫然としてお水を掛けましようとも何とも云わず、湯桶を両手に支えているを、新三郎は見て取り、新「是は恐れ入ります、憚りさま」

と両手を差伸べれば、お嬢様は恥かしいのが一杯なれば、目も眩み、見当違いのところへ水を掛けておりますから、新三郎の手も彼方此方と追かけて漸う手を洗い、嬢様が手拭をと差出してモジ／＼している間、新三郎も此のお嬢は眞に美しいものと思ひ詰めながら、ずっと手を出し手拭を取ろうとすると、まだもじ／＼していく放さないから、新三郎も手拭の上からこわ／＼ながらその手をじつと握りましたが、此の手を握るのは誠に愛情の深

いものでござります。お嬢様は手を握られ真赤に成つて、又その手を握り返している。此方は山本志丈が新三郎が便所へ行き、余り手間取るを訝り

志「新三郎君は何処へ行かれました、さア帰りましょう」

と急き立てればお米は瞞かし、

米「貴方何んですねえ、おや貴方のお頭がぴかく光つてしまりましたよ」

ましたよ」

志「なにさそれは灯火で見るから光るのですわね、萩原氏々々」と呼立てれば、

米「何んですねえ、宜うござりますよう、貴方はお嬢様のお氣質も御存じではありませんか、お堅いから仔細はありませんよ」

と云つて居ります所へ新三郎が漸よう出て来ましたから、

志「君何方にいました、いざ帰りましよう、左様なればお暇申します」

ます、今日は種々御馳走に相成りました、有難うございます」

米「左様なら、今日はまア誠にお草

そうちくさま左様なら」

と志丈新三郎の両人は打連れ立ちて帰りましたが、帰る時にお

嬢様が新三郎に

「貴方また来て下さらなければ私は死んでしまいますよ」

と無量の情を含んで言われた言葉が、新三郎の耳に残り、暫し

も忘れる暇はありませなんだ。

さても飯島様のお邸の方にては、お妾お國が腹一杯の我儘を
 働く間、今度抱え入れた草履取りの孝助は、年頃二十一二にて
 色白の綺麗な男ぶりで、今日しも三月二十二日殿様平左衛門様に
 はお非番でいらっしゃれば、庭先へ出て、彼方此方を眺めおられ
 る時、此の新参の孝助を見掛け。

平「これ／＼手前は孝助と申すか」

孝「へい殿様には御機嫌宜しゆう、私は孝助と申しまする新参者
 でござります」

平「其の方は新参者でも蔭日向なくよく働くといつて大分評判
 がよく、皆の受けがよいぞ、年頃は二十一二と見えるが、人品と

いい男ぶりといい草履取には惜しいものだな」

孝「殿様には此の間あいだじゅう 中 御不快でございましたそうで、お案じ申上げましたが、さしたる事もございませんか」

平「おゝよく尋ねて呉れた、別にさしたる事もないが、して手前は今まで何方いづかたへか奉公をした事があつたか」

孝「へい只今まで方々奉公も致しました、先ず一番先に四谷よツやの金物商なものやへ参りましたが一年程居りまして駆出かけだしました、それから新橋しんばしの鍛冶屋かじやへ参り、三月程過ぎて駆出し、又仲通なかどお通りの絵草えぞ紙屋うしやへ参りましたが、十日で駆出しました」

平「其の方のようにそう厭あきては奉公は出来ないぞ」

孝「いえ私が倦わたくしきつぽいのではございませんが、私はどうぞして

武家奉公が致したいと思い、其の訳を叔父に頼みましても、叔父は武家奉公は面倒だから町家へ往けと申しまして彼方此方奉公にやりますから、私も面当に駆出してやりました」

平「其の方は窮屈な武家奉公をしたいというのは如何な訳じや」
孝「へい、私は武家奉公を致しお剣術を覚えたいのでへい」

平「はて剣術が好きとな」

孝「へい 番町の栗橋様が御当家様は、真影流の御名
人と承わりました故、何うぞして御両家の内へ御奉公に上りた
いと思いましていました処、漸々の思いで御当家様へお召抱
えに相成り、念が届いて有難うござります、どうぞお殿様のお暇
の節には、少々ずつにてもお稽古が願われようかと存じまして参

りました、御当家様に若様でも入つしやいます事ならば、若様の
 お守もりをしながら皆様がお稽古を遊ばすのをお側で拝見致していま
 しても、型ぐらいは覚えられましようと存じましたに、若様はい
 らっしやらず、お嬢様には柳島の御別荘にいらっしやいまして、
 お年はお十七とのこと、これが若様なれば余程宜しゆうござい
 ますに、お武家様にお嬢様は糞くそつたれでござりますなア」

平「はゝゝ、遠慮のない奴、これは大きにさようだ、武家では女
 は實に糞つたれだのう」

孝「うつかりと飛んでもない事を申上げ、お気に障さわりましたら御
 勘弁をねがいます、どうぞ只今もお願ひ申上げます通りお暇の
 節にはお剣術を願われますまいか」

平「此の程は役が替つてから稽古場もなく、誠に多端ではあるが、暇の節に随分教えてもやろう、其の方の叔父は何商売じやの」
 孝「へい彼は本当の叔父ではございません、親父の店受で、ちよつと間に合わせの叔父でございます」

平「何かえ母親は幾歳になるか」

孝「母親は私の四歳の時に私を置去りに致しまして、越後の国へ往つてしましましたそうです」

平「左様か、大分不人情の女だの」

孝「いえ、それと申しますのも親父の不身持に愛想を尽かしての事でございます」

平「親父はまだ存生か」

と問われて、孝助は

「へい」

と云いながら悄々として申しますには、

「親父も亡くなりました、私には兄弟も親類もございませんゆえ、
 誰たれあつて育てる者もないところから、店受たなうけの安兵衛やすべえさんに引取
 られ、四歳の時から養育を受けまして、只今では叔父分となり、
 斯様かように御当家様へ御奉公に参りました、どうぞ何時いつまでもお目掛けられて下さいませ」

と云いさしてハラくと落涙らくるいを致しますから、飯島平左衛門
 様も目をしばたゝき、

平「感心な奴だ、手前ぐらいな年頃には親の忌日きにちさえ知らずに暮

らすものだに、親はと聞かれて涙を流すとは親孝行な奴じやて、
親父は此の頃亡くなつたのか

孝「へい、親父の亡くなりましたは私の四歳の時でございます」
平「それでは両親の顔も知るまいのう」

孝「へい、ちつとも存じませんが、私の十一歳の時に始めて店わたくしよつ
受けの叔父から母おふくろ親の事や親父の事も聞きました」

平「親父はどうして亡くなつたか」

孝「へい、斬きりこころ殺たなうされて」

と云いさしてわつとばかりに泣き沈む。

平「それは又如何の間違いで、とんでもない事であつたのう」

孝「左様でござります、只今より十八年以前、本郷三丁目の藤村

屋新兵衛と申しまする刀屋の前で斬られました」

平「それは何月幾日いくかの事だの」

孝「へい、四月十一日だと申すことでござります」

平「シテ手前の親父はなんと申す者だ」

孝「元は小出様の御家来にて、お馬廻うまわりの役を勤め、食禄しょくろく

百五十石を頂戴致して居りました黒川孝藏と申しました」

と云われて飯島平左衛門はギックリと胸にこたえ、悔りし、指折り数うれば十八年以前聊いさか間違いから手に掛けたは此の孝助の実父で有つたか、己おれを実父の仇あだと知らず奉公に来たかと思えば何とやら心悪く思いましたが、素知らぬ顔して、

平「それは嘸さざ殘念に思うで有ろうな」

孝「へい親父の仇討かたきうちが致しどうございますが、何を申しますにも相手は立派なお侍様でございますから、どう致しても剣術を知りませんでは親の仇討は出来ませんゆえ、十一歳の時から今日まで剣術を覚えたないと心掛けて居りましたが、漸々ようやくのことでの御当家様にまいりまして、誠に嬉しゆうござります、是からはお剣術を教えて戴き、覚えました上は、それこそ死にもの狂いに成つて親の敵かたきを討ちますから、どうぞ剣術を教えて下さいませ」

平「孝心な者じや、教えてやるが手前は親の敵かたきを討つというが、敵の面体めんたいを知らんて居て、相手は立派な剣術けんじゅつけい遣つかいで、もし今己おれが手前の敵だと云つてみすく鼻の先へ敵が出たら其の時は手前どうするか」

孝「困りますな、みすく鼻の先へ敵かたきが出れば仕方がございませんから、立派な侍でも何なんでもかまいません、飛とびついて喉笛のどぶえでも喰い取つてやります」

平「気性きじょうな奴だ、心配いたすな、若もし敵かたきの知れた其の時は、此の飯島が助太刀すけだちをして敵を屹度討きつとたせてやるから、心丈夫に身を厭いとい、随分大切に奉公しろうをしろ」

孝「殿様本当にあなた様が助太刀をして下さいますか、有難う存じます、殿様がお助太刀をして下さいますれば、敵かたきの十人位は出て参りましても大丈夫です、あゝ有難うございます、有難うございます」

平「己おれが助太刀をしてやるのをそれ程までに嬉しいか可愛いかわいそうな

奴だ」

と飯島平左衛門は孝心に感じ、機おりを見て自ら孝助みづかの敵かたきと名告なり、討たれてやろうと常に心に掛けて居りました。

四

さて萩原新三郎は山本志丈と一緒に臥竜梅へ梅見に連れられ、その帰るさに彼かの飯島の別荘に立寄り、不図ふと彼の嬢様の姿を思い詰め、互いに只手を手てぬぐい拭ぬぐいの上から握り合つたばかりで、実に枕を並べて寝たよりも猶深く思い合いました。昔のものは皆こういう事に固うございました。ところが当節のお方はちよつと洒落半しゃれ

分に

「君ちよつと来たまえ、雑魚寝ざこねで」

と、男がいえば、女の方で

「お戯ふざけでないよ」

又男の方でも

「そう君のよう云つては困るねえ、否なら否だと判然はつきり云い給
え、否なら又外ほかを聞いて見よう」

と明あきだな店か何かを捜す気に成つてゐる位なものでございますが、
萩原新三郎はあのお露いやどのと更に猥いやらしい事は致しませんでした
が、実に枕をも並べて一つ寝でも致したごとく思い詰めましたが、
新三郎は人が良いのですから一人で逢いに行くことが出来ませ

ん、逢いに参つて若し万一飯島の家来にでも見付けられてはと思えば行く事もならず、志丈が来れば是非お礼かた／＼ゆ旁々かた／＼ゆ行きたいものだと思つておりますが、志丈は一向に参りません。志丈も中々さるものゆえ、あの時萩原とお嬢との様子が訝しいから、若し万一の事があつて、事の顕あらわれた日には大変、坊主首ぼうずを斬られなければならん、これは危険けんのん、君子は危あやうきに近寄らずというから行かぬ方がよいと、二月三月四月と過ぎても一向に志丈が訪ねて来ませんから、新三郎はひとりくよくお嬢のことばかり思い詰めて、食事もろくく進みませんで居りますと、或日のこと孫ま店ごだなに夫婦暮しで住む伴藏ともぞうと申す者が訪ねて参り。

伴「旦那様、此の頃は貴方様は何うなさいました、ろくく御ご

膳も上りませんで、今日はお昼食もあがりませんな」

新「あゝ食べないよ」

伴「上らなくつちやアいけませんよ、今の若さに一膳半ぐらいの御膳あがが上れんとは、私などは親おやわん椀わんで山盛りにして五六杯も喰わなくつちやアちつとも物を食べたような気持が致しやせん、あなた様はちつとも外出そとでをなさいませんな、此の二月でしたつけナ、山本さんと御一緒に梅見にお出掛けに成つて、何か洒落しゃれをおつしやいましたつけナ、ちつと御保養をなさいませんと本当に毒ですよ」

新「伴藏貴様はあの釣つりが好きだつけな」

伴「へい釣は好きのなんのツて、本当にお飯まんまより好きでございま

す

新 「左様か、そうならば一緒に釣に出掛けようかのう」

伴 「あなたは慥か釣はお嫌いではありませんか」

新 「何だか急にむかくと釣が好きになつたよ」

伴 「へい、むかくとお好きに成つて、そして何方へ釣にいらつしやるお積りで」

新 「そうサ、柳島の横川で大層釣れるというから彼処へ往こうか」

伴 「横川というのは彼の中川へ出る処ですかえ、そうしてあんな処で何が釣れますえ」

新 「大きな鰈が釣れるとよ」

伴 「馬鹿な事を仰しやい、川で鰈が釣れますものかね、たか／＼い

＼鰯か※ぐらいのものでございましょう、兎も角もいらつしやる
ならばお供をいたしましょう』

と弁当の用意を致し、酒を吸筒へ詰込みまして、神田の昌平橋の船宿から漁夫りょうしを雇い乗出のりだしましたれど、新三郎は釣はしたくはないが、唯飯島の別荘のお嬢の様子を垣の外からなりとも見ましようとの心組こころぐみでございますから、新三郎は持つて来た吸筒の酒にグツスリと酔つて、船の中で寝込んでしまいましたが、伴藏は一人で日の暮くれるまで釣を致して居ましたが、新三郎が寝たようだから、

伴「旦那えへ、お風をひきますよ、五月頃は兎角冷えますから、
旦那えへ、是は余りお酒を勧めすぎたかな」

新三郎はふと見ると横川のようだから。

新 「伴藏こゝは何処だ」

伴 「へい此処は横川です」

と云われて傍かたえの岸辺を見ますと、二重の建仁寺けんにんじの垣に潜くゞり門がありましたが、是は確に飯島の別荘と思い、

新 「伴藏や一寸此処へ着けて呉れ、一寸行つて来る所があるか

ら」

伴 「こんな所へ着けて何方どちらへ入らつしやるのですえ、私も御一緒わツチに参りましよう」

新 「お前は其処に待つていなよ」

伴 「だつてそのための伴藏ではございませんか、お供を致しまし

よう

新「野暮やぼだのう、色にはなまじ連れは邪魔よよ」

伴「イヨお洒落しゃれでげすね、宜ようがすねえ」

という途端に岸に船を着けましたから、新三郎は飯島の門の処へまいり、ブル／＼慄ふるえながらそつと家の様子を覗のぞき、門が少し明いてるようだから押して見ると明いたから、ずっと中へ這入りはいり、予て勝手を知つている事故ゆえ、だん／＼と庭伝いに参り、泉せん水縁すいべりに赤松の生えてある処から生垣いけがきに附いて廻れば、こゝは四畳半にて嬢様のお部屋でございました。お露も同じ思いで、新三郎に別れてから其の事ばかり思い詰め、三月から煩わざわつて居ります所へ、新三郎は折戸おりどの所へ参り、そつとうちの様子を覗のぞき込みますと、

うちでは嬢様は新三郎の事ばかり思い続けて、誰を見ましても新三郎のように見える処へ、本当の新三郎が来た事ゆえ、ハツと思ひ

「貴方あなたは新三郎さまか」

と云えば、

新「静かにくく、其の後ごは大層に御無沙汰を致しました、鳥渡ちよつと

お礼あがに上あがるんでございましたが、山本志丈があれぎり参りません
ものですから、私わたくし一人では何分間なにぶんが悪くツて上りませんだつた」

露「よくまあ入いらつしやいました」

ともう耻しいことも何も忘れてしまい、無理に新三郎の手を取つてお上あがり遊ばせと蚊帳かやの中へ引きずり込みました。お露は只も

う嬉しいのが込み上げて物が云われず、新三郎の膝に両手を突いたなりで、嬉し涙を新三郎の膝にホロリと零しました。これが本当の嬉し涙です。他人の所へ悔みに行つて零す空涙とは違います。新三郎ももう是までだ、知れても構わんと心得、蚊帳の中で互に嬉しき枕をかわしました。

露「新三郎さま、是は私の母さまから譲られました大事な香箱でござります、どうか私の形見と思召しお預り下さい」

と差出すを手に取つて見ますと、秋野に虫の象眼入の結構な品で、お露は此の蓋を新三郎に渡し、自分は其の身の方を取つて互に語り合う所へ、隔ての襖をサラリと引き明けて出て來ましたは、おつゆの親御飯島平左衛門様でございます。兩人は此の体を

見てハツとばかりに悔り致しましたが、逃げることもならず、唯うろくして居る所へ、平左衛門は雪洞をズツと差つけ、声を怒らし。

平「コレ露これへ出ろ、又貴様は何者だ」

新「へい、手前は萩原新三郎と申す粗忽の浪士でござります、誠に相済みません事を致しました」

平「露、手前はヤレ國がどうのこうの云うの、親父おやじがやかましいの、どうか閑静な所へ行きたいのと、さま／＼の事を云うから、此の別荘に置けば、斯様かようなる男を引きずり込み、親の目を掠めて不義を働きたい為めに閑地ひきこへ引込んだのであろう、これ苟めにも天下御直参ごじきさんの娘が、男を入れるという事がパツと世間に流布るふ

致せば、飯島は家事不取締かじふとりしまりだと云われ家名を汚かめいけがし、第一御先祖へ対して相済まん、不孝不義の不届ものめが、手打にするから左様心得ろ」

新しばら「暫くお待ち下さい、其のお腹立はらだちは重じゅう々/御尤ごもつともでござりますが、お嬢様わたくしが私わたくしを引きずり込み不義を遊ばしたのではなく、手前が此の二月始めて罷出まかりいでまして、お嬢様そのを唆かしたので、全く手前の罪でお嬢様には少しもお科とがはございません、どうぞ嬢様はお助けなすつて私を」

露とつさあたくし「いゝえ、お父様とうしゃ私が悪いのでござります、どうぞ私をお斬り遊ばして、新三郎様さんしろうをばお助け下さいまし」

と互たがいに死を争いながら平左衛門の側へ摺寄りますと、平左衛門

は剛刀をスラリと引抜き、

「誰かれと容赦はない、不義は同罪、娘から先へ斬る、觀念しろ」

と云いきま片手なぐりにヤツと下した腕の冴え、島田の首がコロリと前へ落ちました時、萩原新三郎はアツとばかりに驚いて前へのめる処を、頬より腮へ掛けてズンと切られ、ウーンと云つて倒れると。

伴「旦那え／＼大層麗うなされて いますね、恐おそろしい声をして 恂びつくりしました、風邪を引くといけませんよ」

と云われて新三郎はやつと目を覚し、ハアと溜ためいき息をついて居るから。

伴「何うなさいましたか」

新「伴藏や己の首が落ちては居ないか」

と問われて、

伴「そうですねえ、船舷ふなべりで煙管きせるを叩くと能よく雁首がんくびが川の中へ落つこちて困るもんですねえ」

新「そうじやアない、己の首が落ちはしないかという事よ、何処どこにも疵きずが付いてはいなか」

伴「何を御冗談おつを仰おつしやる、疵きずも何も有りは致しません」

と云う。新三郎はお露に何うにもして逢いたいと思い続けているものだから、其の事を夢に見てビツシヨリ汗をかき、辻占つじうらが悪いから早く帰ろうと思い

「伴藏早く帰ろう」

と船を急がして帰りまして、船が着いたから上あがろうとすると。

伴「旦那こゝにこんな物が落ちて居ります」

と差出すさしあだを新三郎が手に取上げとりあて見ますれば、飯島の娘と夢のうちに取交とりかわした、秋野に虫の模様の付いた香箱の蓋ばかりだから、ハツとばかりに奇異きたいの想おもいを致し、何うして此の蓋が我手わがてにある事かと惱り致しました。

五

話替かわつて、飯島平左衛門は凜々りりしい智者ちえしゃにて諸芸に達し、と

りわけ剣術は真影流の極意を極めました名人にて、お齢四十ぐら
 い、人並に勝れたお方なれども、妾の國というが心得違ひの奴
 にて、内々隣家の次男源次郎を引込み楽しんで居りました。
 お國は人目を憚り庭口の開き戸を開け置き、此處より源次郎を忍
 ばせる趣向で、殿様のお泊番の時には此處から忍んで来る
 のだが、奥向きの切盛は万事妾の國がする事ゆえ、誰も此の様
 子を知る者は絶えてありません。今日しも七月二十一日殿様はお
 泊番の事ゆえ、源次郎を忍ばせようとの下心で、庭下駄を彼か
 の開き戸の側に並べ置き、

國「今日は熱くつて堪らないから、風を入れないでは寝られない、
 雨戸を少しずかして置いてお呉れよ」

と云附け置きました。さて源次郎は皆寝静まつたる様子を窺い、そつと跣足^{はだし}で庭石を伝わり、雨戸の明いた所から這^は_{あが}上り、お國の寝間に忍び寄れば、

國 「源次郎さま大層に遅いじやアありませんか、私は何うなすつたかと思いましたよ、余まりですねえ」

源 「私も早く来たいのだけれども、兄上もお姉^{あねえさま}様もお母^{はゝさま}様もお休みにならず、奉公人までが皆熱いくと渋^{しぶ}団扇^{うちわ}を持つて、

あおぎ立てゝ涼んでいて仕方がないから、今まで我慢して、ようくの思いで忍んで来たのだが、人に知れやアしないかねえ」

國 「大丈夫知れツこはありませんよ、殿様があなたを御聾^{ごひいき}員^{ゆう}に遊ばすから知れやアしませんよ、あなたの御勘當^{ごかんどう}が許りてから此

の家へ度々お出になれるようになつたのも、皆私が側で殿様へ旨く取なし、あなたをよく思はせたのですよ、殿様はなか／＼凜々しいお方ですから、貴方と私との間が少しでも変な様子があれば気取られますのだが、些ちつとも知れませんよ」

源「實に伯父さまは一通りならざる智者だから、私は本当に怖いよ、私も放蕩を働き、大塚の親類へ預けられていたのを、当ちら家の伯父さんのお蔭で家へ帰れるように成つた、其の恩人の寵愛なさるお前と斯うやつてしているのが知れては實に済まないよ」

國「あゝいう事を仰しやる、あなたは本当に情がありませんよ、私は貴方のためなら死んでも決して厭いませんよ、何ですねえ、そんな事ばかり仰しやつて、私の傍そばへ来ない算段ばかり遊ばすの

ですものを、アノ源さま、こちらの家うちでも此の間お嬢様がお逝れになつて、今は外ほかに御家督ごかどくがありませんから、是非とも御夫婦養子をせねばなりません、それに就ついてはお隣の源次郎様をと内ないへ々殿様にお勧め申しましたら、殿様が源次郎はまだ若くりょうけて了りようけ簡かんが定まらんからいかんと仰しやいましたよ」

源「そうだろう、恩人の愛妻あいしちうの所へ忍び来るような訳だから、どうせ了簡かんが定まりやアしないや」

國「私は殿様の側に何時いつまでも附いていて、殿様が長生ながいきをなすつて、貴方あなたは外ほかへ御養子にでも入らつしやれば、お目にかかる事は出来ません、其の上綺麗な奥様おくじょうでもお持ちなさろうものなら、國のくの字も仰しやる氣遣きづかいはありませんよ、それですから貴方

が本当に信実しんじつがおあり遊ばすならば、私の願ねがいかなを叶えて、内の殿うち様を殺して下さいましな」

源「情じょうがあるから出来ないよ、私の為めには恩人の伯父わたくしさんだもの、何どうしてそんな事が出来るものかね」

國「こうなる上からは、もう恩も義理もありはしませんやね」

源「それでも伯父さんは牛込ない名代なだいの真影流の達人だから、手前如きものが二十人ぐらい掛つても敵かなう訳のものではないよ、其の上私は剣術わたくしが極ごくへた下手へいただもの」

國「そりやア貴方あなたはお剣術はお下手へいたさね」

源「そんなにオヘータと力を入れて云うには及ばない、それだから何どうもいけないよ」

國「貴方は剣術はお下へた手へただが、よく殿様と一緒に釣つりにいらつしや
いましょう、アノ来月四日はたしか中川へ釣にいらつしやるお約
束つとがありましよう、其の時殿様を船から川の中へ突落つきおとして殺し
ておしまいなさいよ」

源「成程伯父さんは水練すいれんを御存じないが、矢張り船頭がいるか
らいけないよ」

國「船頭を斬つてお仕舞い遊ばせな、なんぼ貴方が剣術がお下手
でも、船頭ぐらいは斬れましょう」

源「それは斬れますとも」

國「殿様が落ちたというので、貴方は立腹して、早く探させては
いけませんよ、いろくりくつ理窟ふたとぎをながくと二時ばかりも言つて

いてそれから船頭に探させ、死骸を船に揚げてから不届な奴だ
 といつて船頭を斬つてお仕舞いなさい、それから帰り路に船宿
 に寄つて、船頭が龜相で殿様を川へ落し、殿様は死去されたれば、
 手前は言訳がないから船頭は其の場で手打に致したが、船頭ばかりでは相濟まんぞ、亭主其の方も斬つて仕舞うのだが、内分
 で済ませて遣わすにより、此の事は決して口外致すと仰しやれ
 ば、船宿の亭主も自分の命にかゝる事ですから口外する気遣い
 はありません、それから貴方はお邸へお帰りになつて、知らん顔
 でいて、お兄様に隣家では家督がないから早く養子に遣つてくれくと仰しやれば、此方は別に御親類もないからお頭に話を
 致し、貴方を御養子のお届けを致しますまでは、殿様は御病氣の

届けを致して置いて、貴方の家督相続が済みましてから、殿様の死去のお届を致せば、貴方は此家の御養子様、そうすると私は何時までも貴方の側に粘り附いて動きません、此方の家は貴方のお家より、余程大尽へばですから、召物めしものでもお腰のものでも結構なのが沢山ありますよ」

源「これは旨い趣向だ、考えたね」

國「私は三日三晩寝ずに考えましたよ」

源「是は至極宜しい、どうも宜しい」

と源次郎は慾張よくぱりと助平すけべいとが合併して乗氣のりきに成り、兩人がひそく語り合つてゐるを、忠義無類の孝助という草履取が、御門の男部屋に紙帳しちょうを吊つて寝て見たが、何分にも熱くつて寝付か

れないものだから、渋団扇しぶうちわを持つて、

「どうも今年の様に熱い事はありやアしない」

と云いながら、お庭をぶら／＼歩いていると、板垣の三尺いたべい
の開きがバタリ／＼と風にあおられているのを見て、

孝「締りをして置いたのに何うして開いたのだろう、おや庭下駄ていげつ
が並べてあるぞ、誰だれが来たな、隣家の次男めがお國さんと様子が
訝おかしいから、ことによつたら密通くっついているのかも知れん」

と抜足ぬきあししてそつと此方こなたへまいり、沓脱石くつぬぎいしへ手を支えて座敷

の様子を窺うかうと、自分が命を捨てゝも奉公をいたそうと思つてい
る殿様を殺すという相談に、孝助は大いに怒り、歳はまだ二十一
でございますが、負けない気性だから、怒りの余り思わず知らず

ガツと鼻を鳴らす。

源 「お國さん誰か来たようだよ」

國 「貴方あなたは本当に臆おくび病ようで入らつしやるよ、誰たれも参りは致しません」

と耳を立てゝ聞けば人の居る様子ですから、

國 「誰だれだえ、其處そこに居るのは」

孝 「へい孝助でございます」

國 「本当にまア呆あきれますよ、夜よ夜よ中なか奥おく向むきの庭口はいへ這入はいり込みんで済みますかえ」

孝 「熱くツてく仕様がございませんから涼みに参りました」

國 「今晚は殿様はお泊とまり番ばんだよ」

孝「毎月二十一日のお泊番は知っています」

國「殿様のお泊番を知りながらなぜ門番をしない、御門番は御門をさえ堅く守つて居れば宜いのに、熱いからといって女計りいる庭先へ来てすみますか」

孝「へい御門番だからといつて御門計りを守つては居りませんへい、庭も奥も守ります、へい方々ほう／＼を守るのが役でございます、御門番だからと申して奥へ盗賊どろぼうが這入り、殿様とチヤンく切きりあ合つているに門ばかり見てはいられません」

國「新参者のくせに、殿様のお気に入りだから、此の節では増長して大層お羽振はぶりが宜いよ、奥向を守るのは私の役だ、部屋へ帰つて寝てお仕舞い」

孝「そうですか、貴方が奥向のお守りをして、斯様に三尺戸を開けて置いて宜しゆうござりますか、庭口の戸が開いていると犬が這入つて来ます、何でも犬畜生の恩も義理も知らん奴が、殿様の大切にして入らつしやるものをむしゃく喰つてはりますから、私は夜通し此處に張番をしてはります、此所に下駄が脱いでありますから、何でも人間が這入つたに違いはありません」

國「そうサ、先刻お隣の源さまが入らつしやつたのサ」

孝「へえ、源さまが何御用で入らつしやいました」

國「何の御用でも宜いじやアないか、草履取の身の上でお前は御門さえ守つていればよいのだよ」

孝「毎月二十一日は殿様お泊番の事は、お隣の御次男様もよく

御存じでいらっしゃいますに、殿様のお留守の処へお出いでに成つて、
御用が足りるとはこりやア変でござりますな」

國「何が変だえ、殿様に御用があるのでない」

孝「殿様に御用ではなく、あなたに内ないしょう証の御用でしよう」

國「おや／＼お前はそんな事を言つて私を疑ぐるね」

孝「何も疑ぐりはしませんのに、疑ぐると思うのが余程よつほどおかしい、夜夜中女ばかりの処へ男が這入り込むのは何うも訝おかしいと思つても宜かろうと思ひます」

國「お前はまアとんでもない事を云つて、お隣の源さまにすまないよ、あんま余りじやアないか、お前だつて私の心を知つてゐるじやアないか」

と、両人の争つて居るのを聞いていた源次郎は、人の妾でも奪とうという位な奴だからなかく抜目ぬけめはありません。そして其の頃は若殿と草履取とはお羽振が雲泥うんでいの違いであります、源次郎はずつと出て来て、

源「これ／＼孝助何を申す、是へ出ろ」

孝「へい何か御用で」

源「手前今承れば、何かお國殿おれと己われと何か事情わけでもありそうにいうが、己も養子ゆに行く出世前の大切な身体だ、尤も一旦もつと放ほうとう蕩とうとうをして勘當かんどうをされ、大塚の親類共へ預けられたから、左様思うも無理もないようだが、左様な事を云い掛けられては捨置すておきにならんぞ」

孝「御大切の身の上を御存じなれば何故夜夜中女一人の処へおいでなされました、あなた様が御自分に疵をお付けなさる様なものでござります、貴方あなただツて男女なんによ七歳にして席おなじを同おなじゆうせず、瓜田かでんに履くつを容れず、李下りかに冠かんむりを正さず位の事はわきま弁えておりましよう」

源「黙れ左様な無礼な事を申して、若し用もがあつたらどう致す、イヤサ御主人がお留守でも用の足りる仔細しきいがあつたら何うする積りだ」

孝「殿様がお留守で御用の足りる筈はずはありません、へい若しありましたら御存分になさいまし」

源「然しからば是を見い」

と投げ出す片紙の書面。孝助は手に取り上げて読み下すに、
 一筆申入候過日御約束致置候中川漁船行の儀は来月四
 日と致度就ては釣道具大半破損致し居候間夜分にても
 御閑の節御入来之上右釣道具御繕い直し被下候様奉
 願上候。

源次郎殿

飯島平左衛門

と孝助がよく見れば全く主人の手蹟だから、これはと思うと。

源「どうだ手前は無筆ではあるまい、夜分にてもよいから来て釣道具を直して呉れるとの頼みの状だ、今夜は熱くて寝られないか

ら、釣道具を直しに参つた、然るを手前から疑念を掛けられ、悪あくみよう名^{はなは}を附けられ、甚だ迷惑致す、貴様は如何致す積りか」孝^{いかゞ}「左様な御無理を仰しやつては誠に困ります、此の書付^{かきつけ}さえなければ喧嘩^{けんか}は私が勝だけれども、書付^{まけ}が出たから私の方が負に成つたのですが、何方が悪いかとくと貴方^{あなた}の胸に聞いて御覽遊ばせ、私は御当家様の家来でございます、無闇に斬つては済みますまい」

源^{うぬ}「汝^{うぬ}の様な汚れた奴^{けがやつこ}を斬るかえ、打殺^{ぶちころ}してしまうわ、何か棒^{ぼう}はありませんか」

國^{こゝ}「此処にあります」

とお國が重籐^{しげとう}の弓^{おれ}の折^{とりだ}を取り出し、源次郎に渡す。

孝「貴方様、左様な御無理な事をして、私のような虚弱い身体に疵きずでも出来ましては御奉公が勤まりません」

源「えい手前疑ぐるならば表向きに云えよ、何を証拠に左様なことを申す、其のくらいならなぜお國殿と枕を並べてある処ところへ踏み込まん、拙者せつしゃは御主人から頼まれたから参つたのだ、憎い奴め」と云いながらはたと打つ。

孝「痛いたうございます、貴方左様な事を仰しやつても、篤とくと胸に聞いて御覽遊ばせ、虛弱ひよわい草履取をお打ちなすツて」

源「黙れ」

といいざまヒュウうくと続け打ちに十二三も打ちのめせば、孝助はヒイうくと叫びながら、ころころくと転げり、さ恨うらめしげ

に源次郎の顔を睨む所を、トーンと孝助の月代際さかやきざわを打割うちわつたゆえ黒血くろちがタラくと流れる。

源「ぶち殺してもいゝ奴だが、命だけは助けてくれる、向後左様の事を言うと助けては置かぬぞ、お國わたくしどの私はもう御当家へは参りません」

國「アレ入らつしやらないと猶疑なおぐられますよ」

と云うを聞き入れず、源次郎は是を機会しあいに跣足はだしにて根府川ねぶかわ石いしの飛とびいし石いしを伝いて帰りました。

國「お前が悪いから打ぶたれたのだよ、お隣の御二男様に飛んでもない事を云つて済まないよ、お前こゝにいられちやア迷惑だから出て行つてお呉れ」

と云いながら、痛みに苦しむ孝助の腰をトンと突いて、庭へ突き落すはずみに、根府川石に又痛く膝を打ち、アツと云つて倒れると、お國は雨戸をピツシャリ締めて奥へ入る。後に孝助くやしき声を震わせ、

「畜生奴ちくしょうめく、犬畜生奴、自分達の悪い事を余所よそにして私を酷ひどい目に逢わせる、殿様がお帰りになれば申上げて仕舞おうか、いやくも若し此の事を表向きに殿様に申上げれば、屹度きつとあの兩人と突合つきあわせに成ると、向うには証拠の手紙があり、此方は聞いたばかりの事だからどう云うても証拠になるまい、殊ことには向うは二男の勢い、此方は悲しいかな草履取の軽い身分だから、お隣づからとなりの義理でも私はお暇いとまになるに相違ない、私がいなければ殿様は殺

されるに違いない、これはいつその事源次郎お國の両人を槍で突き殺して、自分は腹を切つてしまおう」

と、忠義無二の孝助が覚悟を定めましたが、さて此のあとは何ど
うなりますか。

六

萩原新三郎は、独りクヨ／＼として飯島のお嬢の事ばかり思い詰めています処へところへ、折しも六月二十三日の事にて、山本志丈が訪ねて参りました。

志「其の後は存外の御無沙汰を致しました、ちよつと伺うべきで

ございましたが、如何にも麻布辺からの事故、おツくうでもあり且追々お熱く成つて來たゆえ、藪医やぶいでも相応に病家びょうかもあり、何や彼かやで意外の御無沙汰、貴方あなたは何うもお顔の色が宜よくない、なにお加減がわるいと、それは／＼

新「何分にも加減がわるく、四月の中旬頃なかばごろからどつと寝て居ります、飯もろくくたべられない位で困ります、お前さんもあれぎり来ないのは余り酷あんまひどいじやアありませんか、私も飯島さんの処わたくしへ、ちょっと菓子折かしおりの一つも持つてお礼ゆに行きたいと思つていてるのに、君が来ないから私は行きそくなつているのです」

志「さて、あの飯島のお嬢も、可愛かわいそうに亡くなりましたよ」
新「えゝお嬢が亡くなりましたとえ」

志「あの時僕が君を連れて行つたのが過りで、向うのお嬢がぞつこん君に惚れ込んだ様子だ、あの時何か小座敷で訳があつたに違いないが、深い事でもなかろうが、もし其の事が向うの親父さまにでも知れた日には、志丈が手引した憎い奴め、斬つて仕舞う、坊主首を打ち落す、といわれては僕も困るから、実はあれぎり参りもせんでいたところ、不図此の間飯島のお邸へまいり、平左衛門様にお目にかかると、娘は歿かり、女中のお米も引き続き亡くなつたと申されましたから、段々様子を聞きますと、全く君に焦れ死こがじにをしたという事です、本当に君は罪造りですよ、男も余りよく生れると罪だねえ、死んだものは仕方あんまがありませんからお念仏でも唱えてお上げなさい、左様なら」

新「あれさ志丈さん、あゝ往つて仕舞つた、お嬢が死んだなら寺
ぐらいは教えてくれゝばいゝに、聞こうと思つているうちに行つ
て仕舞つた、いけないねえ、併しお嬢は全く己おれに惚れ込んで己を
思つて死んだのか」

と思うとカツと逆上のほせて来て、根が人がよいから猶々なおく氣が鬱々う
々として病氣が重くなり、それからはお嬢の俗名ぞくみようを書いて仏
壇に備え、毎日々々念佛三昧まいで暮しましたが、今日しも盆の十三
日なれば精靈棚しょうりょうとうだなの支度したくなどを致してしまい、縁側へちよつ
と敷物を敷き、蚊遣かやりを薰くゆらして、新三郎は白地の浴衣ゆかたを着、深
草形さがたの団扇うちわを片手に蚊を払いながら、冴え渡る十三日の月を眺
めていますと、カラコンくと珍らしく下駄の音をさせて生垣いけがき

の外を通るものがあるから、不図見れば、先きへ立つたのは年頃三十位の大丸髻おおまるまげの人柄のよい年増としまにて、其の頃流行はやつた縮緬ちりめん細工ざいくの牡丹ぼたん芍薬しゃくやくなどの花の附いた灯籠とうろうを提さげ、其の後から十七八とも思われる娘が、髪は文金ぶんきんの高髻たかまげに結あとい、着物は秋草色染きくさいいろぞめの振袖ふりそでに、緋縮緬ひぢりめんの長襦袢ながじゆばんに繻子しゆすの帯をしどけなく締め、上方風かみがたふうの塗柄ぬりえの団扇うちわを持つて、ぱたり／＼と通る姿を、月影に透すかし見るに、何うも飯島の娘お露のようだから、新三郎は伸び上あがり、首を差し延べて向うを見ると、向うの女も立止まり、

女「まあ不思議じやアございませんか、萩原さま」

と云われて新三郎もそれと気が付き、

新 「おや、お米さん、まアどうして」

米 「誠に思いがけない、貴_{あなたさま}方様はお亡くなり遊ばしたという事でしたに」

新 「へえ、ナニあなたの方でお亡くなり遊ばしたと承わりました
が」

米 「厭_{いや}ですよ、縁起の悪い事ばかり仰しやつて、誰が左様な事を
申しましたえ」

新 「まあおはいりなさい、其処_{そこ}の折戸_{おりど}のところを明けて
と云うから両人内へ這入れば、

新 「誠に御無沙汰を致しました、先日山本志丈が来まして、あな
た方御両人ともお亡くなりなすつたと申しました」

米「おやまア彼奴あいつが、私わたくしの方へ來ても貴方がお亡くなり遊ばした
 といいましたが、私の考かんえでは、貴方様はお人ひとがよいものだから
 旨だまく瞞だましたのです、お嬢わらしき様はお邸いえに入らつしやつても貴方の事計ばかり
 り思つて入らつしやるものだから、つい口くちに出て迂闊うつかりと、貴方
 の事を仰おさなしやるのが、ちらくちらくと御親父ごしんぶ様のお耳みみにもはいり、又
 内うちにはお國くにという悪い妾めしやくがいるものですから邪魔じゃまを入れて、志丈
 に死死んだと云いわせ、互たがいに諦めさせようと、國くにの畜生ちくせいがした事ことに違
 いはありませんよ、貴方がお亡おもくなり遊あそばしたという事をお聞き
 遊あそばして、お嬢わらしき様はおいとしいこと、剃髮ていはつして尼あまに成なつてしま
 うと仰おさなしやりますゆえ、そんな事を成なすつては大變おほぶんですから、心
 でさえ尼あまに成なつた氣きで入らつしやれば宜よろしいと申上げて置おきまし

たが、それでは志丈にそんな事をいわせ、互に諦めさせて置いて、お嬢さまに婿むこを取れと御親父おやぢさまから仰しやるのを、お嬢様は、婿は取りませんからどうかお宅うちには夫婦養子をしてくださいまし、そして他ほかへ縁付いやくのも否いやだと強情をお張り遊ばしたものですから、お宅が大層に揉めて、親御おやごさまがそんなら約束おこでもした男があつてそんな事を云うのだろうと、怒おこつても、一人のお嬢様で斬る事も出来ませんから、太い奴だ、そういう訳なら柳島にも置く事が出来ない、放逐ほうちくするというので、只今では私とお嬢様と兩人お邸やしきを出まして、谷中やなかの三崎さんさきへ参り、だいなしの家いえに這入はいつて居りまして、私が手内職などをして、どうか斯こうか暮しを付けていますが、お嬢様は毎日々々お念佛ざんまい三昧で入らつしやいますよ、

今日は盆の事ですから、方々お参りにまいりまして、早く帰る処でございます」

新「なんの事です、そうでございますか、私も嘘でも何でもありません、此の通りお嬢さまの俗名を書いて毎日念仏しておりますので」

米「それ程に思つて下さるは誠に有難うございます、本当にお嬢様は仮令御勘当に成つても、斬られてもいゝから貴方のお情を受けたいと仰しやつて入らつしやるのですよ、そしてお嬢様は今晚此方へお泊め申しても宜しゆうござりますかえ」

新「私の孫店に住んで居る、白翁堂勇齋という人相見が、万事私の世話を喧嘩ましい奴だから、それに知れないよう裏

からそつとお這入り遊ばせ」

と云う言葉に隨い、兩人共に其の晩泊り、夜の明けぬ内に帰り、是より雨の夜も風の夜も毎晩来ては夜の明けぬ内に帰る事十三日より十九日まで七日の間重なりましたから、兩人が仲は漆の如く膠の如くになりまして新三郎も現を抜かして居りましたが、こゝに萩原の孫店に住む伴藏といふものが、聞いていると、毎晩萩原の家にて夜夜中女の話声がするゆえ、伴藏は変に思いましたて、旦那は人がよいものだから悪い女に掛り、騙されては困ると、密と抜け出て、萩原の家の戸の側へ行つて家の様子を見ると、座敷に蚊帳を吊り、床の上に比翼※を敷き、新三郎とお露と並んで坐つてゐるさまは眞の夫婦のようで、今は耻かしいのも何も打

忘ちわすれてお互なれいに馴なれ々々しく、

露アノ新三郎様わたくしも、私が若し親に勘当されましたらば、米と兩人うちをお宅うちへ置いて下さいますかえ」

新ひきと「引取りますとも、貴方あなたが勘當されゝば私は仕合しあわせですが、一

人娘ひとめのわらわですから御勘當なさる氣遣きづかいはありません、却かえつて後あとで生木なまきを割さかれるような事がなければ宜いいと思つて私は苦勞くろうでなりませんよ」

露わたくし「私は貴方より外ほかに夫おつとはないと存じておりますから、仮令此たとい

事がお父とうつさまに知てられて手打てうちに成りましても、貴方の事は思い切れません、お見捨てなさるときゝませんよ」

と膝もたに凭むつれ掛りて睦よつましく話ほをするは、余よつほど惚ほれている様子

だから。

伴「これは妙な女だ、あそばせ言葉で、どんな女かよく見てやろ
う」

と差し覗いてハツとばかりに驚き、
「化物だ！」

と云いながら 真青まつさおになつて夢中で逃出し、白翁堂勇齋の処へ
往こうと思つて駆出かけだしました。

七

飯島家にては忠義の孝助が、お國と源次郎の 奸策わるだくみの一伍いちぶし

一什いっしを立たて聞き致ししまして、孝助は自分の部屋へ帰り、もう是ま
でと思おもい詰つめ、姦夫かんぶ姦婦かんぶを殺すより外に手段ほかはないと忠心てだて一途はず
思おもい込み、それに就ついては仮令たとい己おれは死んでも此のこのお邸やしきを出でまい、殿様
様ごに御別条べつじょうのないよう仕しようと、是から加減やしきが悪いとて引ひきこ
籠もつており、翌よく朝ちようになりますと殿様はお帰かりになり、残暑そなえ
の強い時分ときでありますから、お國は殿様の側で出来たてのお供見ひきこ
たように、団扇うちわであおぎながら、

國「殿様御機嫌よろ宜むしゆう、私はもう殿様にお暑さのあたお中なかりでもな
ければよいと毎日心配ばかりしています」

飯「留守たれへ誰だれも参りは致いたさなかつたか」

國「あの相あいかわ川かわさまが一寸ちよつとお目通りが致いたしたいと仰おほしやつて、

お待ち申して居ります

飯「ほウ相川新五兵衛しんごべえが、又医者でも頼みに参つたのかも知れん、いつもながら粗忽そくつかしい爺さんだよ、まア此方こちらへ通せ」

と云つていると相川は

「ハイ御免下さい」

と遠慮もなく案内も乞わず、ズカ／＼奥へ通り、

相「殿様お帰りあそばせ、御機嫌さま、誠に存外の御無沙汰を致しました、何時も相変らず御番ごばんづか疲れもなく、日々御苦勞さまにぞんじます、厳しい残暑でござります」

飯「誠に熱い事で、おとくさまの御病気は如何でござるな」
相「娘の病氣もいろ／＼と心配も致しましたが、何分にも渉はが／＼

「早く参りませんで、それに就いて誠にどうも……アヽ熱い、お國さま先達せんだつては誠に御馳走様に相成りまして有難う、まだお礼もろく申上げませんで、へえ、アヽ熱い、誠に熱い、どうも熱い」

「まあ少し落着けば風が這入つて随分涼しくなります」

相「折入つて殿様にお願いの事がございまして、
罷出ました、何ど
うかお聞済を願います」

「はてナ、どういう事で」

相「お國様やなにかには少々お話が出来兼ますから、どうか御^{ごきん}_{できかね}近習の方々を皆遠ざけて戴きとう存じます」

「左様か宣^{よろ}しい、皆あちらへ参り、此方^{こちら}へ参らん様にするが宜

しい、シテ何ういうことどで」

相「さて殿様、今日態々出ましたは折入つて殿様にお願い申したいは娘の病氣の事に就つて出ましたが、御存じの通り彼かれの病氣も永い事で、私も種々と心配いたしましたけれども、病の様子が判然はつきりと解りませんでしたが、ようくナ昨晩当人が私の病は実は是々これの訳だと申しましたから、なぜ早く云わん、けしからん奴だ、不孝ものであると小言は申しましたが、彼かれは七歳の時母に別れ今年十八まで男の手に丹誠して育てましたにより、あの通りの初心な奴うぶで何もかも知らん奴だから、そこが親馬鹿たとえの譬さげすの通りですが、殿様訳をお話し申してもお笑い下さるな、お蔑さげすみ下さるな」

飯「どういう御病氣で」

相「手前一人の娘でござりますから、早くナ婿むこでも貰い、樂隱居け
がしたいと思い、日頃信心氣けのない私わたくしなれども、娘の病氣を治そ
うと思い、夏とは云いながら此の老人が水をあびて 神かみ 仏ほとけへ祈
るくらいな訳で、ところが昨夜娘のいには、私の病氣は実は是これ
々れくといいましたが、其の事は乳母おんばにも云われないくらいな訳で
すが、其処そこが親馬鹿たとえの譬さげの通り、お蔑さげすみ下さるな」

飯「どういう御病氣ですな」

相わたくし「私もだんくと心配をいたして、どうか治してやりたいと心
得、いろいろ医者にも掛けましたが、知れない訳で、是ばかりは
神にも仏にも仕ようがないので、なぜ早く云わんと申しました」

飯 「どういう訳で」

相 「誠に申しにくい訳で、お笑い成さるな」

飯 「何だかさつぱりと訳が解りませんね」

相 「実は殿様が日頃お誉めなさる此方の孝助殿、あれは忠義な者で、以前は然るべき侍の胤たねでござろう、今は零落おちぶれて草履取をしていくても、志は親孝行のものだ、可愛いものだと殿様がお誉めなされ、あれには兄弟も親族もない者だから、行々ゆくくは己おれが里さとかた方に成つて他ほかへ養子にやり、相應な侍にしてやろうと仰しやいますから、私も折々おりくは宅うちの家来善藏ぜんぞうなどに、飯島様の孝助殿を見習えと叱り付けますものだから、台所のおさんまでが孝助さんは男おとこ振ぶり もよし人柄もよし、優しいと誉め、乳母おんばまでが彼かれこれ是と

誉めはやすものだから、娘も、殿様お笑い下さるな、私は汗の出
 るほど恥ります、実は疾くより娘があの孝助殿を見染め、恋
 煩いをして居ります、誠に面目ない、それをサ婆アにもいわ
 ないで、漸く昨夜になつて申しましたから、なぜ早く云わん、一
 合取つても武士の娘という事が淨瑠璃本にもあるではないか、
 侍の娘が男を見染めて恋煩いをするなどとは不孝ものめ、仮令一
 人の娘でも手打にする処だが、併し紺看板に真鍮巻の木刀
 を差した見る影もない者に惚れたというのは、孝助殿の男振の好
 いのに惚れたか、又は姿の好いのに惚れ込んだかと難じてやりま
 した、そうすると娘がお父さま実は孝助殿の男振にも姿にも惚れ
 たのではございません、外に唯一つの見所がありますからと斯

ういいますから、何処に見所があると聞きますと、あのお忠義が見所でございます、主へ忠義のお方は、親にも孝行でございます
 ようねえ、といいましたから、それは親に孝なるものは主へ忠義、
 主へ忠なるものは親へは必ず孝なるものだとあります、娘が私
 の家はお高は僅か百俵二人扶持（にんふち）ですから、他家から御養子をして
 お父さまが御隠居をなさいましても、もし其の御養子が心の良く
 ない人でも來た其の時は、此方の高（こぢら）が少（すくな）いから、私の肩身が狭
 く、遂（つい）にはそれがために私までが、俱にお父さまを不孝にするよ
 うに成つては済みません、私も只今まで御恩を受けましたにより
 何うか不孝をしたくない、就きましては仮令草履取（たとい）でも家来でも
 志の正しい人を養子にして、夫婦諸共親に孝行を尽（つく）したいと思ひ

まして、孝助殿を見染め、寝ても覚めても諦められず、遂に病となりまして誠に相済みません、と涙を流して申しますから、私も至極尤もの様にも聞えますから、兎に角お願いに出て、殿様から孝助殿を申受けて来ようと云つて参りましたが、どうかあの孝助殿を手前の養子に下さるように願います」

飯「それはまア有難いこと、差上げたいね」

相「ナニ下さる、あゝ有難かつた」

飯「だが一応當人へ申もうしき聞きけましよう、喜よび悦うれぶ事で、孝助が得心の上で確しかと御返事を申上げましよう」

相「孝助殿は宜よろしい、貴方あなたさえ諾うんと仰しやつて下さればそれで宜しい」

飯 「私が養子に参るのではありませんから、そうはいかない」

相 「孝助殿はいやと云う気遣いは決してありません、唯殿様から孝助行つてやれとお声掛けを願います、あれは忠義ものだから、殿様のお言葉は背そむきません、私も当年五十五歳で、娘は十八になりましたから早く養子をして身体を固めてやりたい、殿様どうか願います」

飯 「宜しい、差上げましょう、御胡乱ごうろんに思おぼしめ召すならば 金打きんちよう

でも致さぞそうかね」

相 「そのお言葉ばかりで沢山、有難うございます、早速娘に申し聞けましたら、喜悦さぞぶ事でしよう、これがね殿様が孝助に一応申し聞けて返事をするなどと仰しやると、又娘が心配して、仮令殿たとい」

様が下さる氣でも孝助殿が何うだかなど、申しましようが、そう
 はつきり事が定れば、娘は嬉しがつて飯の五六杯位も食べられ、
 一足飛^{そくとび}に病氣も全快致しましよう、善は急げの譬^{たとえ}で、明日^{みょうにち}
 御番^{ごばん}帰りに結納^{ゆいのう}の取りかわせを致しどう存じますから、どう
 か孝助殿をお供に連れてお出で下さい、娘にも一寸逢わせたい」

飯「まあ一献^{いつこん}差上げるから」

と云つても相川は大喜びで、汗をダク^くく流し、早く娘に此の
 事を聞かせとうございますから、今日はお暇^{いとま}を申しましようと云
 いながら、帰ろうとして、

「アイタ、柱に頭をぶつけた」

飯「そ、つかしいから誰^{たれ}か見て上げな」

飯島平左衛門も心嬉しく、鼻高たか々／＼と、

飯「孝助を呼べ」

國「孝助は不快で引いて居ります」

飯「不快でも宜しい、一寸ちよつと呼んでまいれ」

國「お竹どんく、孝助を一寸呼んでおくれ、殿様が御用があり
ますと」

竹「孝助どんく、殿様が召しますよ」

孝「へいく只今あが上きずります」

と云つたが、額の疵きずがあるから出られません。けれども忠義の人ゆえ、殿様の御用と聞いて額の疵きずも打うちわす忘わすれて出て参りました。

飯「孝助此處こゝへ来いく、皆あちらへ参れ、誰たれもまいる事はなら

んぞ

孝 「大分だいぶお熱ねつうございます、殿さまは毎日の御番疲れもありは致すまいかと心配をいたして居ります」

飯 「其そ方は加減そくみんがわるいと云つて引籠ひきこもつてゐるそうだが、どうじやナ、手前に少し話したいことがあつて呼んだのだ、外ほかの事でもないが、水道端すいどうばたの相川におとくという今年十八になる娘むすめがあるナ、器量きりょうも人並ひとよしに勝れ殊すぐに孝行こうぎょうもので、あれが手前の忠義ちゆうぎの志に感服かんぱくしたと見えて、手前を思い詰め、煩わずらつてゐるくらいな訳で、是非手前を養子�にしたいとの頼みだから行つてやれ」と孝助の顔ほほを見ると、額ひたいに傷きずがあるから、

孝「へい／＼」

飯「喧嘩けんかでもしたか、不埒ふらちな奴だ、出世前の大事の身体、殊に面め体身體に疵きずを受けているではないか、私の遺恨わたくしいこんで身体に疵きずを付けるなどとは不忠者め、是が一人ひとりまえ前の侍なれば再び門またを跨やしきいで邸邸へ歸る事は出来ぬぞ」

孝「喧嘩を致したのではありません、お使い先で宮邊様の長家ながやし下あたを通りますと、屋根から瓦かわらが落ちて額あたに中り、斯様かように怪我けがを致しました、悪い瓦めざわでござります、お目障りめざわに成つて誠に恐おそれいります」

飯「屋根瓦の傷ではない様だ、まあどうでもいいが、併し必ず喧嘩けんかなどをして疵きずを受けてはならんぞ、手前は真まつすぐ直すくな気性だが、

向うが曲つて来れば真直まよに行く事は出来まい、それだから其處そこを避けて通るようにすると広い所へ出られるものだ、何でも堪忍かんにんをしなければいけんぞ、堪忍の忍にんの字は刃やいばの下に心を書く、一つ動けばむねを斬なるごとく何でも我慢がまんが肝かんじん心こころだぞよ、奉公するからは主君へ上げ置いた身体、主人へ上げると心得て忠義ちゆうぎを尽つくすのだ、決して軽かる拳はづみの事をするな、曲つた奴には逆さからうなよ」

という意見が一々胸に堪こたえて、孝助たすけは唯ただへいく有難うござりますと泣なぐく々、

孝「殿様來月四日に中川へ釣つりに入いらつしやると承わりましたが、此の間あいだお嬢様まわらわがお亡くなり遊ばして間まもない事でございますから、何どうか釣をお止め下さいますように、若もしもお怪我けががあつてはい

けませんから」

飯 「釣が悪ければやめようよ、決して心配するな、今云つた通り相川へ行つてやれよ」

孝 「何方へかお使に参りますのですか」

飯 「使じやアない、相川の娘が手前を見染めたから養子に行つて遣れ」

孝 「へえ成程、相川様へどなたが御養子になりますのです」

飯 「なアに手前が往くのだ」

孝 「私はいやでございます」

飯 「べらぼうな奴だ手前の身の出世になる事だ、是ほど結構な事はあるまい」

孝 わたくしいつ「私は何時までも殿様の側に生涯へばり附いております、ふつゝ

かながら片時へんじも殿さまのお側を放さずお置き下さい」

飯 「そんな事を云つては困るよ、己おれがもう請けをした、金打きんぢょうをしたから仕方がない」

孝 「金打をなすツてもいけません」

飯 「それじゃア己が相川に済まんから腹を切らんければならん」

孝 「腹を切つても構いません」

飯 「主人の言葉そむを背くならば永ながいとま暇いとまを出すぞ」

孝 「お暇に成つては何にもならん、そういう訳でござりますなれば、ちよつと一言ひとことぐらい斯こう云う訳だと私にお話し下さつても

宜よろしいのに」

飯 「それは己が悪かつた、此の通り板の間へ手を突いて謝るから行つてやれ」

孝 「そう仰しやるなら仕方がありますんから取極めだけして置いて、身体は十年が間参りますまい」

飯 「そんな事が出来るものか、翌日結納を取交わす積りだ、向うでも来月初旬に婚礼を致す積りだ」

との事を聞いて孝助の考えまするに、己が養子にゆけば、お國と源次郎と両人で殿様を殺すに違ひないから、今夜にも両人を槍で突殺し、其の場で己も腹搔切つて死のうか、そうすれば是が御主人様の顔の見納め、と思えば 顔色 も青くなり、主人の顔を見て涙を流せば、

飯「解らん奴だな、相川へ参るのはそんなに厭か、相川はつい鼻の先の水道端だから毎日でも往来の出来る所、何も気遣う事はない、手前は気強いやうでもよく泣くなア、男子たるべきものがそんな意氣地がない魂ではいかんぞ」

孝「殿様わたくし私は御当家様へ三月五日に御奉公に参りましたが、外に

兄弟も親もない奴だと仰しやつて目を掛けて下さる、其の御恩の程は私は死んでも忘れは致しませんが、殿様はお酒を召上ると正体なく御寝なさる、又召上らなければ御寝なられません故、少し上あがつて下さい、余りよく御寝なると、どんな英雄でも、随分悪者の為に如何なる目に逢うかも知れません、殿様決して御油断はありません、私はそれが心配でなりません、それから藤田様から参

りましたお薬は、どうか隔日いちにちおきに召上つて下さい」

飯「なんだナ、遠国えんごくへでも行くような事を云つて、そんな事は

云わんでもいゝわ」

八

萩原の家うちで女の声がするから、伴藏のぞが覗いて恊りし、ぞつと足元から総毛立そうけだまして、物をも云わず勇齋の所へ駆込かけこもうとしましたが、怖いから先まづ自分の家うちへ帰り、小さくなつて寝てしまい、夜の明けるのを待よ兼て白翁堂の宅うちへやつて参り、

伴「先生々々」

勇 「誰だのウ」

伴 「伴藏でござえやす」

勇 「なんだのウ」

伴 「先生一寸こゝを明けて下さい」

勇 「大層早く起きたのウ、お前には珍らしい早起だ、待て！」

今明けてやる

と掛け鎖を外し明けてやる。

伴 「大層真暗ですねえ」

勇 「まだ夜が明けきらねえからだ、それに己は行灯を消して寝るからな」

伴 「先生静かにおしなせえ」

勇 「手前てめえが慌あわてゝいるのだ、なんだ何しに来た」

伴 「先生萩原さまは大変ですよ」

勇 「何どうかしたか」

伴 「何なんうかしたかの何なんのという騒さわぎじやございやせん、私も先生も斯こうやつて萩原様の地うち面内なに孫まご店だなを借りて、お互すまいに住すつており、其の内でも私は尚お萩原様の家來同様に畠たけをうなつたり庭わづちを掃ぬぐいたり、使い早間はやまもして、嘔かゝは洒あすき洗濯きよをしておるから、店た賃なもとらずに偶たまには小遣こづかいを貰うつたり、衣物きものの古いのを貰うつたりする恩のある其の大切な萩原様が大変な訳だ、毎晩女が泊とりに来ます」

勇 「若くつて独身ひとりもの者しゃでいるから、随分女も泊とりに来るだろう、

併し其の女は人の悪いようなものではないか

伴「なに、そんな訳ではありません、私が今日用が有つて他へ行つて、夜中に帰つてくると、萩原様の家で女の声がするから一寸覗きました」

勇「わるい事をするな」

伴「するとね、蚊帳がこう吊つてあつて、其の中に萩原様と綺麗な女がいて、其の女が見捨てゝくださるなどいうと、生涯見捨てはしない、仮令親に勘当されても引取つて女房にするから決して心配するなど萩原様がいうと、女が私は親に殺されてもお前さん

の側は放れませんと、互いに話しをしていると」

伴「どころがねえ、其の女が唯ただの女じやアないのだ」
勇「悪党か」

伴「なに、そんな訳じやアない、骨と皮ばかりの瘦やせせた女で、髪は島田に結つて鬢びんの毛が顔に下り、真青まっさおな顔で、裾すそがなくつて腰から上ばかりで、骨と皮ばかりの手で萩原様の首つたまへかじりつくと、萩原様は嬉しそうな顔をしていると其の側に丸髷まるまげの女がいて、此奴こいっつも瘦やせて骨と皮ばかりで、ズツと立たちあが上こぢらつて此方へくると、矢張やつぱり裾が見えないで、腰から上ばかり、恰まるで絵に描いた幽靈の通り、それを私が見たから怖くて歯の根も合わず、家へ逃げ帰けえつて今まで黙つていたんだが、何ういう訳で萩原様があんな幽靈に見込まれたんだか、さっぱり訳が分りやせん」

勇「伴藏本当か」

伴「ほんとうか嘘かと云つて馬鹿くしい、なんで嘘を云います
ものか、嘘だと思うならお前さん今夜行つて御覧なせえ」

勇「己アいやだ、ハテナ昔から幽霊と逢引するなぞという事はない事だが、尤も支那の小説にそういう事があるけれども、そんな事はあるべきものではない、伴藏嘘ではないか」

伴「だから嘘なら行つて御覧なせえ」

勇「もう夜も明けたから幽霊なら居る気遣いはない」

伴「そんなら先生、幽霊と一緒に寝れば萩原様は死にましよう」

勇「それは必ず死ぬ、人は生きている内は陽気盛んにして正しく清く、死ねば陰気盛んにして邪に穢れるものだ、それゆえ幽霊とよこしまが

共に偕老同穴の契を結べば、仮令百歳の長寿を保つ命も其のために精血を減らし、必ず死ぬるものだ」

伴「先生、人の死ぬ前には死相が出ると聞いていますが、お前さん一寸行つて萩原様を見たら知れましよう」

勇「手前も萩原は恩人だろう、己も新三郎の親萩原新左衛門殿の代から懇意にして、親御の死ぬ時に新三郎殿の事をも頼まれたから心配しなければならない、此の事は決して世間の人々に云うなよ」

伴「えゝゝゝ、嶋にも云わない位な訳ですから、何で世間へ云いましょう」

勇「屹度云うなよ、黙つておれ」

其の内に夜もすつかり明け放れましたから、親切な白翁堂は藜

の杖をついて、伴藏と一緒にポク／＼出懸けて、萩原の内へまいり、

「萩原氏々々」うじ

新 「何方様でござります」どなた

勇 「隣の白翁堂です」

新 「お早い事、年寄は早起だ」はやおき

なぞと云いながら戸を引明けひきあ

「お早う入らつしやいました、何か御用ですか」

勇 「貴方の人相を見ようと思つてきました」あなた

新 「朝っぱらから何でござります、一つ地面内うちにおりますから何い

時つでも見られましょに」

勇 「そうでない、お日さまのお上りになろうとする所で見るのが宜いので、貴方とは親御おやごの時分から別懇べつこんにした事だから」と懷ふとこころより天眼鏡てんがんきょうを取出して、萩原を見て。

新 「なんですねえ」

勇 「萩原氏、貴方は二十日はつかを待たずして必ず死ぬ相そうがありますよ」

新 「へえ私が死にますか」

勇 「必ず死ぬ、なかく不思議な事もあるもので、どうも仕方がない」

新 「へえそれは困つた事で、それだが先生、人の死ぬ時はその前に死相の出るという事は予ねて承わつて居り、殊に貴方は人相見ことあなたの名人と聞いておりますし、又昔から陰德いんとくを施ほどこして寿命を全く

した話も聞いていますが、先生どうか死なゝい工夫はありますま
いか」

勇「其の工夫は別にないが、毎晩貴方の所へ来る女を遠ざけるよ
り外に仕方ほかがありません」

新「いゝえ、女なんぞは来やアしません」

勇「そりやアいけない、昨夜のぞ覗いて見たものがあるのだが、あれ
は一体何者です」

新「あなた、あれは御心配をなさいまする者ではございません」

勇「是程心配になる者はありません」

新「ナニあれは牛込の飯島という旗はたもと下の娘で、訛あつてこの節
は谷中の三崎村へ、米という女中と二人で暮しているも、皆みな私みわたくし

ゆえに苦労するので、死んだと思っていたのに此の間囮はず出逢い、其の後は度々逢引するので、私はあれを行くくは女房に貰う積りでござります」

勇「飛んでもない事をいう、毎晩来る女は幽霊だがお前知らないのだ、死んだと思つたなら猶更幽霊に違ひない、其のマア女が糸のように痩せた骨と皮ばかりの手で、お前さんの首ツたまへかじり付くそうだ、そうしてお前さんは其の三崎村にいる女の家へ行つた事があるか」

といわれて行つた事はない、逢引したのは今晩で七日目ですが。というものの、白翁堂の話に萩原も少し氣味が悪くなつたゆえ顔がんしょくを変え。

新「先生、そんなら是から三崎へ行つて調べて来ましょう」

と家を立出で、三崎へ参りて、女暮しで斯ういう者はないかと

段々尋ねましたが、一向に知れませんから、尋ねあぐんで帰りに、
新幡隨院を通り抜けようとすると、お堂の後に新墓があり

まして、それに大きな角塔婆が有つて、その前に牡丹の花の綺麗な灯籠が雨ざらしに成つてありますて、此の灯籠は毎晩お米が点けて来た灯籠に違ひないから、新三郎はいよく訝しくなり、
お寺の台所へ廻り、

新「少々伺いとう存じます、あすこの御堂の後に新らしい牡丹の花の灯籠を手向けてあるのは、あれは何方のお墓でありますか」

僧「あれは牛込の旗下飯島平左衛門様の娘で、先達て亡くなり

まして、全体法住寺ほうじゅうじへ葬むる筈はずのところ、当院は末寺まつじじゃから此方こちらへ葬むつたので

新「あの側に並べてある墓は」

僧「あれはその娘のお附つきの女中めのわらわで是も引続き看病疲れで死去しどいたしたから、一緒に葬られたので」

新「そうですか、それでは全く幽靈ゆうれいで」

僧「なにを」

新「なんでも宜しゆうございます、左様ようなら」

と云いながら悔りびつくして家うちに駆け戻り此の趣おもむきを白翁堂に話すと、

勇「それはまさ妙な訳で、驚いた事だ、なんたる因果な事か、惚ほれられるものに事を替えて幽靈に惚れられるとは」

新「何うもなさけない訳でござります、今晚もまたまいりましょ
うか」

勇「それは分らねえな、約束でもしたかえ」

新「へえ、あしたの晩屹度きつと来るに、約束をしましたから、今晚何ど

うか先生泊つて下さい」

勇「真平御免まっぴらごめんだ」

新「占いでどうか来ないようになりますまいか」

勇「占いでは幽靈の所置しょちは出来ないが、あの新幡隨院の和尚は中
々に豪えらい人で、念佛修業の行者で私も懇意だから手紙をつけるゆ
え、和尚の所へ行つて頼んで御覽」

と手紙を書いて萩原に渡す。萩原はその手紙を持つてやつてま

いり、
ど

「何うぞ此の書面を 良石 和尚様へ上げて下さいまし」

と、差出すと、良石和尚は白翁堂とは別ならぬ間柄ゆえ、手紙を見て直に萩原を居間へ通せば、和尚は木綿の座蒲団に白衣を着て、其の上に茶色の衣を着て、当年五十一歳の名僧、寂寞じやくまくとしてちゃんと坐り、中々に道徳いや高く、念佛三昧という有様ありさまで、新三郎は自然に頭が下る。

良「はい、お前が萩原新三郎さんか」

新「へえ粗忽そつの浪士萩原新三郎と申します、白翁堂の書面の通り、何の因果か死靈に悩まされ 難渢なんじゅうを致しますが、貴僧の御法を以て死靈を退散するようにお願い申します」

良「此方こちらへ来なさい、お前に死相が出たという書面だが、見てやるから此方へ来なさい、成程死ぬなア近々きんくに死ぬ」
新「何うかして死なゝいように願います」

良「お前さんの因縁は深い訳のある因縁じやが、それをいうても本当にはせまいが、何しろ口惜くて祟る幽靈ではなく、只恋しいく」と思う幽靈で、三世せも四世せも前から、ある女がお前をうて生きかわり死にかわり、容かたちは種いろく々に変えて附纏つきまとうて居るゆえ、遁のがれ難がたい悪因縁があり、どうしても遁れられないが、死靈除よけのため海音かいおん如來によらいという大切の守りを貸してやる、其の内に折角施餓鬼せがきをしてやろうが、其のお守まもりは金無垢きんむくじやに依つて人に見せると盗まれるよ、丈は四寸二分で目方も余程あるから、慾の

深い奴は潰しにしても余程の値だから盜むかも知れない、厨子ごと貸すにより胴卷に入れて置くか、身体に脊負うておきな、それから又こゝにある雨宝陀羅尼經というお經をやるから読誦しなさい、此の經は宝を雨ふらすと云うお經で、是を読誦すれば宝が雨のように降るので、慾張たようだが決してそうじやない、是を信心すれば海の音という如来さまが降つて来るというのじや、この經は妙月長者という人が、貧乏人に金を施して悪い病の流行る時に救つてやりたいと思つたが、宝がないから仏の力を以て金を貸してくれると云つた所が、釋迦がそれは誠に心懸の尊い事じやと云つて貸したのが即ちこのお經じや、又御札をやるから方々へ貼つて置いて、幽靈の入り所のないようにして、

そしてこのお経を読みなさい」

と親切の言葉に萩原は有がたく礼を述べて立帰たちかえり、白翁堂に其の事を話し、それから白翁堂も手伝つて其の御札を家の四方八方へ貼り、萩原は蚊帳かやを吊つて其の中へ入り、彼の陀羅尼經を読もうとしたが中々読めない。曩謨婆のうぼば帝ぎやば囉駄囉いばざらだら婆さぎやら捏具さぎやらにりぐ灑耶しゃや恒陀たゝぎやたや多野たにやたおんそろべい恒爾也陀たにやたおんそろべい唵素增閉ばんだらばち跋捺囉うわごと底ば。※※阿左あざ何なにだか外国人の譖語しおぶおかの様で訳がわからない。其の中上野の夜の八ツの鐘がボーンと忍ケ岡むこうおかの池に響き、向ケ岡の清水の流れる音がそよくと聞え、山に当る秋風の音ばかりで、陰々寂寞世間いんくせきばくがしんとすると、いつもに変らず根津ねづの清水の下から駒下駄こまげたの音高くカラソコロンくとするから、新三郎は心のうち

で、ソラ來たと小さくかたまり、額から腮へかけて膏汗を流し、一生懸命一心不乱に雨宝陀羅尼經を読誦して居ると、駒下駄の音が生垣の元でぱつたり止みましたから、新三郎は止せばいゝに念佛を唱えながら蚊帳を出て、そつと戸の節穴から覗いて見ると、いつもの通り牡丹の花の灯籠を下げて米が先へ立ち、後には髪を文金の高髻に結い上げ、秋草色染の振袖に燃えるような緋縮緬の長襦袢、其の綺麗なこと云うばかりもなく、綺麗ほど猶怖く、これが幽靈かと思えば、萩原は此の世からなる焦熱地獄に落ちたる苦しみです、萩原の家は四方八方にお札が貼つてあるので、二人の幽靈が憶して後へ下り、

米「嬢さまとも入れません、萩原さんはお心変りが遊ばしまし

て、昨晩のお言葉と違い、貴方あなたを入れないように戸締りがつきましたから、辻とじも入ることは出来ませんからお諦め遊ばしませ、心の變つた男は辻も入れる氣遣いはありません、心の腐つた男はお諦めあそばせ」

と慰むれば、

嬢「あれ程迄にお約束をしたのに、今夜に限り戸締りをするのは、男の心と秋の空、変り果てたる萩原様のお心なさけが情ない、米や、どうぞ萩原様に逢わせておくれ、逢わせてくれなければ私は帰らな
いよ」

と振袖を顔に当て、
潜さめ々と泣く様子は、美しくもあり又物もの
凄のすごいくもなるから、新三郎は何も云わず、只ただ南無阿弥陀仏、南

無阿弥陀仏。

米「お嬢様、あなたが是程までに慕うのに、萩原様にやアあんまりなお方ではございませんか、若しや裏口から這入はいもれないものでありますまい、入らっしゃい」

と手を取つて裏口へ廻つたが矢張やつぱり這入られません。

九

飯島の家うちでは妾めしやくのお國くにが、孝助を追出すか、しくじらするよう種々工夫こうらを凝こらし、この事ばかり寝ても覚めても考かんえていいる、悪い奴だ。殿様は翌日御番ごばんで出向でむきに成あった後あとへ、隣家となりの源次郎

がお早うと云いながらやつて来ましたから、お國はしらばつくれ
て、

國「おや、いらつしやいまし、引続きまして残暑が強く皆様御機
嫌よろしゅう、此方は風こちらがよく入りますからいらつしやいまし」

源次郎は小声になり、

「孝助は昨夜ゆうべの事を喋しゃべりはしないかえ」

國「いえサ、孝助が屹度告口きつとうげぐちをしますだらうと思いましたに、告
口をしませんで、殿様に屋根瓦が落ちて頭へ当り怪我をしたと云
つてね、其の時私は弓の折われで打たれたと云わなければよいと胸が
悸ときく動うごしましたが、あの事は何とも云いませんが、云わずにいる
だけ訝おかしいではありませんか」

と小声で云つて、態わざと大声で、

國「お熱い事この節のよう^に熱くつては仕方がりません」

又小声になり。

國「いえ、それに水道端の相川新五兵衛様の一人娘のお徳様が、
宅うちの草履取の孝助に恋煩いをして^{いる}とサ、まア本当に茶人ちやじんも
有つたものですねえ、馬鹿なお嬢様だよ、それからあの相川の爺
さんが汗をだくく流しながら、殿様に願つて孝助をくれろと頼
むと、殿様も聾ひいき肩の孝助だから上げましようと相談が出来まして、
相川は帰りましたのですよ、そうして、今日は相川で結納の取とりか
交せになるのですとさ」

源「それじゃア宜よろしい、孝助が往つて仕舞えば仔細しきはない」

國「いえサ、水道端の相川へ養子にやるのに、^{うち}宅の殿様がお里に成つて遣るのだからいけませんよ、そうすると、彼奴が此の家の息子の風ふうをしましよう、草履取でさえ随分ツンケンした奴だから、^{あいつ}そうなれば屹度きつとこの間の意趣いしゆを返すに違なんいはありません、何なんでも彼奴が一件たちぎきを立聞たきしたに違なんいから、貴方あなた何なんうかして孝助奴めを殺して下さい」

源「彼奴は剣術けんじゆが出来るから己おれには殺せないよ」

國「貴方は何故なぜ」^なそう剣術けんじゆがお下手あくせだろうねえ」

源「いゝや、それには旨い事ことがある、相川のお嬢うめには宅の相助あいすけという若党わがたんが大層に惚ほれて居るから、彼かれを旨く欺だまかし、孝助と喧嘩けんかをさせて置き、後あとで喧嘩けんか両成敗りょうせいばいだから、己おれらの方で相助あいすけを追い出

せば、伯父さんも義理で孝助を出すに違いないが、就いちやア明あ
した
日伯父様と一緒さんに帰つて来ては困るが、孝助が獨ひとりで先へ帰る訳には出来まいか」

國 「それは訳なく出来ますとも、わたくし私が殿様に用がありますから先へ帰して下さいましといえ巴、屹度きつと先へ帰して下さるに違ちがいはありませんから、大曲おおまがりあたりで待伏まちぶせて彼奴あいつをぽかくなぐお擲なげりなさい」

大声を出して、

國 「誠におそろく様で、左様なら」

源次郎は屋敷に帰ると直に男部屋へ参ると、相助は少し愚おろかも者ので、鼻歌でデロレンなどを唄つてゐる所へ源次郎が来て、

源「相助、大層精が出るのう」

相「オヤ御ごじなん二男様、誠に日々お熱い事でござります、當年は別してお熱いことで」

源「熱いのう、其そ方は感心な奴だと常々兄上も褒ほめていらっしゃる、主しゆよう用がなければ自用じようを足し、少しも身体に隙すきのない男だと仰しやつてはいる、それに手前は國に別段親族みよりもない事だから、当家が里になり、大した所ではないが相應な侍の家うちへ養子うちにやる積りだよ」

相「恐れ入ります、何なんともはや誠にどうも恐れ入りますなア、殿様と申し貴方あなたと申し、不束ふつゝかな私をそれ程までに、これははや口ではお礼が述べられましねえ、何ともヘイ分らなく有難うござい

ます、それだが武士に成るにやア私もいろいろはのいの字も知んねえ
もんだから誠に困るんで」

源「実は貴様も知つている水道端の相川のう、彼処^{あすこ}にお徳という
十八ばかりの娘があるだろう、貴様を彼処の養子に世話ををしてや
ろうと兄上が仰しやつた」

相「これははやモウどうも、本当にごぜえますか、はやどうも、
あのくれえなお嬢様は世間にはないと想います、頬辺^{ほうぺた}などはぼ
つとして尻などがちまくとして、あのくれえな美いお嬢様はた
んとはありましねえ」

源「向うは高が寡^{たかすけ}ないから、若党^{なん}でも何でもよいから、堅い者な
ればというのだから、手前なれば極^{ごく}よからうとあらまし相談が整

つた所が、隣の草履取の孝助めが胡麻をすつた為に、縁談が破談となつてしまつた、孝助が相川の男部屋へ行つてあの相助はいけない奴で、大酒飲おおざけのみで、酒を飲むと前後を失ない、主人の見さかいもなく頭をぶち、女郎は買い、博奕ばくちは打ち、其の上盜人根性があると云つたもんだから、相川も厭氣いやきになり、話が縛もつれて、今度は到頭とうとう孝助が相川の養子になる事に極きまり、今日結納の取交とりかわせだとよ、向うでは草履取でさえ欲しがるところだから、手前なれば真鑑しんぢゅうでも二本さす身だから、きつと宜よかつたに違いはない、孝助は憎い奴だ」

相「なんですが、孝助が養子になると、憎にい奴でござります、人の恋路こいじの邪魔わたくしをすればツて、私が盗人根性があつて、お負けに

御主人の頭を打すと、何時私が御主人の頭を打しました」

源「己に理窟を云つても仕方がない」

相「残念、腹が立ちますよ、憎こい孝助だ。只置きました」

源「喧嘩しろ！」

相「喧嘩しては叶いませんねえ、彼奴は剣術が免許だから剣術は逆も及びましねえ」

源「それじゃア田中の中間の喧嘩の龜藏という奴で、身体中疵だらけの奴がいるだろう、彼と藤田の時藏と両人に鼻薬をやつて頼み、貴様と三人で、明日孝助が相川の屋敷から一人で出て来る所を、大曲りで打殺しても構わないから、ぽかく^{なぐ}擲りにして川へ投りこめ」

相「殺すのは可愛かわいそ相さうだが、打にやしてやりてえなア、だが喧嘩けんかをした事が知れば何どうなりますか」

源「そうさ、喧嘩けんかをした事が知れば、己おれが兄上あにそう云いうと、兄上あは屹度きつと不届ふとゞきな奴やつ、相助いとまを暇ひまにしてしまふと仰おほしやつてお暇ひまに成なるだろうう」

相「お暇ひまに成なつては詰つまりましねえ、止よしましょうう」

源「だがのう、此方こちらで貴様ご様に暇ひまを出せば、隣となりでも義理ぎりだから孝助こうすけに暇ひまを出すに違ちいない、彼奴かれが暇ひまになれば相川あいかわでも孝助こうすけは里さとがないから養子やうしょに貰きう氣遣きづかいはない、其その内此方こちらでは手前てまへを先さへ呼よびかか返えして相川あいかわへ養子やうしょにやる積つもりだ」

相「誠まことににお前まへ様さま、御親切ごしんせつが恐おそれ入り奉まつりります」

というから、源次郎は懷中より金子若干きんすいくらかを取出し、

源「金子をやるから龜藏たちと一杯呑んでくれ」

相けんす「これははや金子まで、これ戴いてはすみましねえ、折角の思お
召ぼしめしだから頂戴いたして置きます」

これから相助は龜藏と時藏の所へ往き此の事を話すと、面白半分にやつつけろと、手筈てはずの相談とりきを取りました。さて飯島平左衛門はそんな事とは知らず、孝助を供につれ、御番からお帰りに成りました。

國「殿様今日は相川様の所へ孝助の結納でお出いでになりますそうですが、少しお居間の御用が有りますからお送り申したら、孝助は殿様よりお先へお歸し下さいまし、用が済み次第すぐ直に又お迎い

に遣わしましよう」

という飯島は

「よし／＼」

と孝助を連れて相川のうちへ参りましたが相川は極ごく小さい宅で、
孝「お頼み申します／＼」

相「ドーレ、これ善藏や玄関に取次が有るようだ、善藏居ないか、
何處どこへ行つたんだ」

婆「あなた、善藏はお使いにおやり遊ばしたではありませんか」

相「己おれが忘れた、牛込の飯島様がお出いでに成つたのかも知れない、
煙草盆へ火を入れてお茶の用意をして置きな、多分孝助殿も一緒に
に來たかも知れないから、お徳に其の事を云いな、これ／＼お前

よく支度をして置け、己が出迎いをしよう

と玄関まで出て参り、

相「これは殿様だいぶ大分だいぶお早くどうぞ直すぐにお上あがりを願います、へい誠に此の通り見苦しい所孝助殿も、御挨拶は後あとでします」

相川はいそくこちらと一人で喜び、コツツリと柱に頭を打付け、アイタヽ、兎に角こぢら此方こちらへと座敷へ通し、

「さて残暑お熱い事でござります、又昨日さくじつは上あがりまして御無理を願つたところ、早速にお聞済み下され有あがとう存じます」

飯「昨日はお草そうく々ごしゅを申しました、如何いかにもお急ぎなさいましたから御酒おおも上げませんで、大きにお草そうく々ごしゅ申上げました」

相「あれから帰りまして娘に申し聞けまして、殿様がお承知の上

孝助殿を聟^{むこ}にとる事に極つて、明日は殿様お立合の上で結納取^{あすとりか}
 交わせになると云いますと、娘は落涙^{らくるい}をして悦びました、と云
 うと浮氣の様ですが、そうではない、お父様^{とうさま}を大事に思うから
 とは云いながら、只今まで御苦労を掛けましたと申しますから、
 早く丈夫にならなければいけない孝助殿が来るからと申して、直^{すぐ}
 に薬を三服立付けて飲ませました、それからお粥^{かゆ}を二膳半食べま
 した、それから今日はナ娘がずっと氣分が癒^{なお}つて、お父様こんな
 に見苦しい形^{なり}でいては、孝助さまに愛想^{あいそう}を尽かされるといけま
 せんからというので、化粧をする、婆アもお鉄漿^{はぐろ}を附けるやら大
 変です、私も最早五十五歳ゆえ早く養子をして樂がしたいもので
 すから、誠に耻入つた次第でございますが、早速^{さつそく}のお聞済み、^{きゝず}

誠に有難う存じます」

飯 「あれから孝助に話しましたところ、当人も大層に悦び、^{わたくし}私の
様な不束者^{ふつつかもの}をそれ程までに思召^{おぼしめ}し下さるとは冥加至極^{みょうがしじごく}と申
してナ、大概^{あらかた}当人も得心いたした様子でな」

相 「いやもう、あの人は忠義だから否^{いや}でも殿様の仰しやる事なら
唯^{はい}と云つて言う事を聞きます、あの位な忠義な人はない、旗^{はたもと}下
八万騎の多い中にも恐らくはあの位な者は一人もありますまい、
娘がそれを見込みましたのだ、善藏はまだ帰らないか、これ婆ア」
婆 「なんでござります」

相 「殿様に御挨拶をしないか」

婆 「御挨拶をしようと思つても、貴方^{あなた}がせかくしている者だか

ら御挨拶する間^まもありはしません、殿様、御機嫌様^{さま}^{いら}よう入つしやいました」

飯^{ばあ}「これは婆^{ばあ}やア、お徳様が長い間^ま御病氣の所、早速の御全快誠にお目でたい、お前も心配したろう」

婆^{かげさま}「お蔭^{わたくし}様で、私はお嬢様のお少^{ちい}さい時分からお側にいて、お氣性も知つて居りますのに何とも仰しやらず、漸^{やつ}と此の間分つたので殿様に御苦労をかけました、誠に有がとうございます」

相^こ「善藏はまだ帰らないか、長いなア、お菓子を持つて来い、殿様御案内の通り手狭でございますから、何かちよつと尾頭附^{おかしらつき}で一献^{こん}差上げたいが、まあお聞き下さい、此の通り手狭ですからお座敷を別にする事も出来ませんから、孝助殿も此処へ一緒にいた

し、今日は無礼講で御家来てなく、どうか御同席で御酒を上げ

たい、孝助は私が出迎えます」

飯「なに私が呼びましょう」

相「ナアニあれば私の大事な智で、死水を取つてもらう大事な

養子だから」

と立上がり、玄関まで出迎え、

相「孝助殿誠に宜く、いつもお健に御奉公、今日はナ無礼講で、

殿様の側で御酒、イヤなに酒は呑めないから御膳を一寸上げた
い」

孝「是は相川様御機嫌よろしゆう、承ればお嬢様は御不快の御様子、少しほお宜しゆうござりますか」

相「何を云うのだお前の女房をお嬢様だのお宜しいもないものだ」
 飯「そんな事を云うと孝助が間を悪るがります、孝助折角の思
 召めこうむし、御免を蒙こうむつて此方こちらへ來い」

相「成程立派な男で、中々フウ、へえ、さて昨日は殿様に御無理
 を願い早速お聞済み下さいましたが、高たかは寡すくなし娘は不束ふつつかなり、
 舅じゅうとは知つての通りの粗忽者そこのもの、實に何なんと云つて取る所はないだろ
 うが、娘がお前でなければならぬと煩わざわらう迄に思い詰めたとい
 う、浮氣なようだが然そうではない、あれが七歳なつの時母が死んで、
 それから十八まで私が育はつた者だから、あれも一人の親だと大事
 に思い、お前の心がけのよい、優しく忠義な所を見て思い詰め病
 となつた程だ、どうかあんな奴でも見捨てずに可愛かわいがつてやつて

おくれ、私は直にチヨコくと隠居して、隅の方へ引込んでしま
うから、時々少々ずつ小遣こづかいをくれゝばいゝ、それから外に何も
お前に譲る物はないが、藤四郎吉光とうしろうよしみつの脇差わきざしが有る、拵えは野や
暮ぼだが、それだけは私の家うちに付いた物だからお前に譲る積りだ、
出世はお前の器量にある」

飯「そういうと孝助が困るよ、孝助も誠に有難い事だが、少し仔
細のぞみがあつて、今年一ぱい私の側で奉公したいと云うのが当人の望
だから、どうか当年一ぱいは私の手元に置いて、来年の二月に婚
礼をする事に致したい、尤も結納だけは今日致して置きます」

相「へい来年の二月では今月が七月だから、七八九十一十二正しょう
二と今から八ヶ月間あいだがあるが、八ヶ月では質物しつものでも流れて仕舞

うから、余り長いなア」

飯「それは深い訳が有つての事で」

相「成程、あゝ感服だ」

飯「お分りに成りましたか」

相「それだから孝助に娘の惚れるのも尤もだ、娘より私が先へ惚れた、それは斯うでしよう、今年一ぱい貴方あなたのお側で剣術を習い、免許でも取るような腕に成る積りだろう、是れは然うなくてはならない、孝助殿の思うにはなんぼ自分が怜憐りきょうでも器量きりょうがあるにした処が、少なくも禄ろくのある所へ養子みやげにくるのだから土産みやげがなくてはおかしいと云うので、免許か目録の書かきつけ付を握つて来る気どう、それに違いない、あゝ感服、自分を卑下ひげした所が偉いねえ」

孝「殿様、私は一寸お屋敷へ帰つて参ります」

相「行くのは御主用だから仕方がないが、何もないが一寸御膳を上げます少し待つてお呉れ、善藏まだか、長いのう、だが孝助殿、又直に帰つて来るだろうが主用だから来られないかも知れないから、一寸奥の六畳へ行つて徳に逢つてやつておくれ、徳が今日はお白粉しろいを粧つけて待つていたのだから、お前に逢わないと粧むだけたお白粉が徒になつてしまふ」

飯「そう仰しやると孝助が間まをわるがります」

相「兎に角アレサどうか一寸逢わせて」

飯「孝助あゝ仰しやるものだから一寸お嬢様にお目通りして参れ、まだ此方こちらへ来ない間うちは、手前は飯島の家来孝助だ、相川のお嬢様

の所へ御病気見舞ゆに行くのだ、何をうじくしている、お嬢様の

御病気うかぎを伺うかがつて参まつれ』

といわれ孝助は間を悪がつてへいへいと云つていると、

婆こぢら「此方こちらへどうぞ、御案内いあんないを致むかします」

とお徳の部屋へ連れて来る。

孝こう「これはお嬢様長らく御不快の処ところ、御様子は如何様いかゞさまでござい

ますか、お見舞を申し上げます」

婆「孝助様どうかお目を掛けられて下さいまし、お嬢様孝助様が入らつしやいましたよ、アレマア真赤まつかに成つて、今まで貴方あなたが御苦勞ごろうをなすつたお方じやアありませんか、孝助様がお出いでに成つたらお怨うらみを云うと仰しやつたに、唯真赤ただに成つてお尻しりで御挨拶あいさつな

すつてはいけません」

孝「お暇いとまを申します」

と挨拶をして主人の所へ参り、

孝「一旦御用を達たして、早く済みましたら又上あがります」

相「困つたねえ、暗くなつたが何が有るかえ」

孝「何がとは」

相「何サ提ちようちん灯とうがあるかえ」

孝「提灯は持つて居ります」

相「何が無いと困るがあるかえ、何サ蠟燭ろうそくがあるかえ、何有る
とえ、そんなら宜しい」

孝助は暇いとまごい乞よろをして相川の邸やしきを立たち出で、大曲りの方を通れば、

前に申した三人が待伏まちぶせをして居るのだが、孝助の運が強かつたと見え、隆慶橋りゆうけいばしを渡り、軽子坂かるこざかから邸やしきへ帰つて來た。

孝「只今帰りました」

というからお國は驚いた。なんでも今頃は孝助が大曲り辺で、三人の中間ちゅうげんに真鍮卷しんちゅうまきの木刀で打たれて殺されたろうと思つてゐる所へ、平常ふだんの通りで帰つて來たから、

國「おや／＼どうして帰つたえ」

孝「貴方様あなたさまがお居間の御用があるから帰れと仰しやつたから帰つて参りました」

國「何處どこから何うお帰りだ」

孝「水道端を出て隆慶橋を渡り、軽子坂あがを上つて帰つて來ました」

國「そうかえ、わたくしや又今日は相川様でお前を引留めて帰る事が出来まいと思つたから、御用は済ませて仕舞つたから、お前は直に殿様のお迎いに行つておくれ、そして若しお前がお迎いに行かないう間にお帰りになるかも知れないよ、お前外の道を行つて、途中でお目に懸らないといけない、殿様は何時でも大曲りの方をお通りになるから、あつちの方から行けば途中で殿様にお目に懸るかも知れない、直に行つておくれ」

孝「へい、そんなら帰らなければよかつた」

と再び屋敷を立出で、大曲りへかゝると、中間三人は手に／＼真鍮卷の木刀を捻くり待ちあぐんでいたのも道理、来ようと思う方から来ないで、後の方から花菱の提灯を提げて

来るのを見付け、慥たしかに孝助と思い、相助はズツと進んで、

相「やい待て」

孝「誰だ、相助じやねえか」

相「おゝ相助だ、貴様と喧嘩しようと思つて待つっていたのだ」

孝「何をいうのだ、唐突だしぬけに、貴様と喧嘩する事は何もねえ」

相「汝おのれ相川様へ胡麻ごまアすりやアがつて、己おれの養子ねぎやになる邪魔ぬすつとをした、そればかりでなくおれの事を盜ぬすつと人根性ひとねいせいがあると云やアがつたろう、どう云う訳で胡麻ごまを摺すつて、手前てめえがあのところお嬢様お嬢様の処ところへ養子ねぎやに行こうとする、憎にッこい奴ほか、外ほかの事とは違う、盜人根性ぬすびねいせいがあると云つたから喧嘩けんかするから覚悟あくごしろ」

と争つて居る横合よこあいから、龜藏かめざが真鍮卷まきの木刀きとうを持って、いき

なり孝助の持つてゐる提灯を叩き落す、提灯は地に落ちて燃え上る。

龜 「手前てまえは新参者の癖に、殿様のお気に入りを鼻に懸け、大手を振つて歩きやアがる、一體貴様は気に入らねえ奴だ、この畜生め」

と云いながら孝助の胸ぐらを取る。孝助は此奴等は徒党ととうしたのではないかと、透して向うを見ると、溝の縁に今一人踞んで居るから、孝助は予ねて殿様が教えて下さるには、敵手あいての大勢の時は慌あわてると怪我をする、寝て働くがいゝと思い、胸ぐらを取られながら、龜藏の油断を見て前まえ袋ぶくろに手がかゝるが早いか、孝助は自分の体からだを仰あおむ向けにして寝ながら、右の足を上げて龜藏の辜きんたま丸

のあたりを蹴返せば、龜藏は逆筋斗さかとんぼうを打つて溝の縁へ投げ付けられるを、左の方から時藏相助が打つてかかるを、孝助はヒラリと体からだを引外し、腰に差たる真鍮卷の木刀で相助の尻の辺あたりをドンと打つ。相助打たれて気が逆上せのぼあが上がるほど痛く、眼も眩み足もすわらず、ヒヨロ／＼と遁出し溝へ駆け込む。時藏も打たれて同じく溝へ落ちたのを見て、

孝「やい、何をしやアがるのだ、サア何奴どいつでも此奴こいつでも來い飯島の家来には死んだ者は一疋ひきも居ねえぞ、お印しるしものの提灯を燃やしてしまつて、殿様に申訳もうしわけがないぞ」

飯「まあ／＼もう宜しい、心配するな」

孝「ヘイ、これは殿様どうしてこゝへ、私がこんなに喧嘩わたくしをした

のを御覽遊ばして、又私が失錯るのですかなア」

飯「相川の方も用事が済んだから立^{たちかえ}帰^{おれ}つて来たところ、此の騒^{しきじ}ぎ、憎い奴^やと思い、見ていて手前が負けそうなら己^{おれ}が出て加勢をしようと思っていたが、貴様の力で追い散らして先ず宜かつた、焼落^{やけお}ちた提灯^{ぢとう}を持つて供をして参れ」

と主従連立^{つれだ}つて屋敷へお帰りに成ると、お國は二度恊^{びつく}りしたが、素知らぬ顔で此の晩は済んでしまい、翌朝^{よあさ}になると隣の源次郎がすま^{すま}済してやつてまいり、

源「伯父様お早うございます」

飯「いや、大分^{だいぶ}早いのう」

源「伯父様、昨晩大曲りで御当家の孝助と私^{わたくしども}共^{とも}の相助と喧嘩

を致し、相助はさん／＼に打たれ、ほう／＼の体で逃げ帰りましたが、兄上が大層に怒り、怪しからん奴だ、年甲斐もないと申して直に暇すくいとまを出しました、就いては喧嘩両成敗の譬たとえの通り、御当家の孝助も定めてお暇になりましたよう、家来の身分として私の遺恨こんもつを以て喧嘩などをするとは以ての外ほかの事ですから、兄の名みょうだ代しろで一寸念の為めにお届にまいりました」

飯 「それは宜しい、昨晩ゆうべのは孝助は悪くはないのだ、孝助が私のお供をして提灯を持つて大曲りへ掛ると、田中の龜藏、藤田の時藏お宅うちの相助の三人が突然いきなりに孝助に打つてかかり、供前ともまえを妨さまたぐのみならず、提灯を打落うちおちとし、印しるしもの物もやを燃もやしましたから、憎い奴、手打にしようと思つたが、隣づからの中間ちゅうあいを切るでも

ないと我慢をしているうちに、孝助が怒つて木刀で打散らしたの
 だから、昨夕ゆうべのは孝助は少しも悪くはない、若し孝助に遺恨があ
 るならばなぜ飯島に届けん、供ともさき先あたりまえを妨げ怪よろけしからん事だ、相助
 の暇に成るは当然だ、彼は暇を出すのが宜しい、彼奴あいつを置いては宜しくありませんとお兄あにいさまに申し上げな、是から田中、藤
 田の両家へも廻文かいぶんを出して、時藏、龜藏も暇を出させる積りだ』
 と云い放し、孝助ばかり残る事になりましたから、源次郎も当
 てが外れ、挨拶も出来ない位な始末で、何ともいう事が出来ず邸やしき
 へ帰りました。

さて彼の伴藏は今年三十八歳、女房おみねは三十五歳、互に貧乏世帯を張るも萩原新三郎のお蔭にて、或時は畑を耘い、庭や表のはき掃除などをし、女房おみねは萩原の宅へ参り煮焚洒ぎ洗濯やお菜ごしらえお給仕などをしておりますゆえ、萩原も伴藏夫婦には孫店を貸しては置けど、店賃なしで住まわせて、折りくは小遣いや浴衣などの古い物を遣り、家来同様使つていてた。伴藏は懶惰ものにて内職もせず、おみねは独りで内職をいたし、毎晩八ツ九ツまで夜延をいたしていましたが、或晚の事絞りだらけの蚊帳を吊り、この絞りの蚊帳というは蚊帳に穴が明いているのですから、処々観世縫で括つてあるので、其の

蚊帳を吊り、伴藏は寝^ね_ごを敷き、独りで寝ていて、足をばたくやつており、蚊帳の外では女房が頻りに夜延をしていますと、八ツの鐘がボンと聞え、世間はしんと致し、折々清水の水音が高く聞え、何となく物^{もの}_{すこ}凄く、秋の夜風の草葉にあたり、陰々^{いんく}寂^{せき}寞^{ぼく}と世間が一体にしんと致しましたから、此の時は小声で話をいたしても宜く^よ聞えるもので、蚊帳の中^{うち}で伴藏が、頻りに誰かとこそく話をしているに、女房は気がつき、行^{あん}灯^{どう}の下^{した}影^{かげ}から、そつと蚊帳の中^{うち}を差^{さし}覗^{のぞ}くと、伴藏が起^{おき}上^{あが}り、ちやんと坐り、両手を膝についていて、蚊帳の外には誰^{だれ}か来て話をしている様子は、何だかはつきり分りませんが、何うも女の声のようだから訝^{おか}しい事だと、嫉妬^{やきもち}の虫がグツと胸へ込み上げたが、年若と

は違ひ、もう三十五にもなる事ゆえ、表向に恪氣もしかねる
 ゆえ、余りな人だと思つてゐるうちに、女は帰つた様子ゆえ何と
 も云わざ黙つていたが、翌晩も又来てこそく話を致し、斯うい
 う事が丁度三晩の間続きましたので、女房ももう我慢が出来ませ
 ん、ちと鼻が尖とんがらかツて来て、鼻息が荒くなりました。

伴「おみね、もう寝ねえな」

みね「あゝ馬鹿々々しいやね、八ツ九ツまで夜延をしてさ」

伴「ぐずくいわないで早く寝ねえな」

みね「えい、人が寝ないで稼いでいるのに、馬鹿々々しいからサ」

伴「蚊帳の中へいいんねえな」

おみねは腹立はらたちまぎれにズツと蚊帳をまくつて中へ入れば。

伴 「そんな這入りようがあるものか、なんてえ這入りようだ、突立つて這入ツちやア蚊が這入つて仕ようがねえ」

みね 「伴藏さん、毎晩お前の所へ来る女はあれはなんだえ」

伴 「何でもいゝよ」

みね 「何だかお云いなねえ」

伴 「何でもいゝよ」

みね 「お前はよからうが私や詰らないよ、本当にお前の為に寝ないで 醉酔あくせくと稼いでいる女房の前も構わズ、女なんぞを引きずり込まれては、私のような者でも余りだ、あれは斯こういう訳だと明かして云つてお呉れてもいゝじやないか」

伴 「そんな訳じやねえよ、己おれも云おう／＼と思つてゐるんだが、

云うとお前めえが怖がるから云わねえんだ」

みね「なんだえ怖がると、大方先の阿魔女あまつちよが何かお前に怖もてまえこわ
云やアがつたんだろう、お前かゝあが鳴かゝあがあるから女房に持つ事が出来
ないと云つたら、そんなら打捨うつちやつて置かないとか何とかいうの
だろう、理不尽りふじんに阿魔女あまつちよが女房はもののいる所へどかく入へいつて来て
話なんぞをしやアがつて、もし刃物三昧ざんまいでもする了りょうけん簡なら
私はたゞは置かないよ」

伴「そんな者じやアないよ、話をしても手前てめえ怖がるな、毎晩来る
女は萩原様に極惚ごくれて通かよつて来るお嬢様とお附つきの女中まえだ」

みね「萩原様は萩原様の働きがあつてなさる事だが、お前まえはこん
な貧乏世帯びんぼうじよたいを張つていながら、そんな浮氣をして済むかえ、

それじゃアお前が其のお附の女中とくつついたんだろう」

伴「そんな訳じやないよ、実は一昨日の晩おれがうとくしていると、清水の方から牡丹の花の灯籠を提げた年増が先へ立ち、お嬢様の手を引いてずっと己の宅へ入つて来た所が、なか／＼人柄のいゝお人だから、己のような者の宅へこんな人が来る筈はないがと思つていると、其の女が己の前へ手をついて、伴藏さんとはお前さまでござりますかというから、私が伴藏でござえやすと云つたら、あなたは萩原様の御家来かと聞くから、まあ／＼家來同様な訳でござえますというと、萩原様はあんまりなお方でござります、お嬢様が萩原様に恋焦れて、今夜いらつしやいと慥にお約束を遊ばしたのに、今はお嬢様をお嫌いなすつて、入れないよ

うになさいますとは余りなお方でございます、裏の小さい窓に御札が貼つてあるので、どうしても這入ることが出来ませんから、お情に其の御札を剥してくださいましというから、明日屹度剥して置きましょう、明晩屹度お願い申しますと云つてずっと帰つた、それから昨日は終日畠耘いをしていたが、つい忘れていると、其の翌晩又来て、何故剥して下さいませんというから、違えねえ、ツイ忘れやした、屹度明日の晩剥がして置きやしようと云つてそれから今朝畠へ出た序に萩原様の裏手へ廻つて見ると、裏の小窓に小さいお経の書いてある札が貼つてあるが、何してもこんな小さい所から這入ることは人間には出来る物ではねえが、
予て聞いていたお嬢様が死んで、萩原様の所へ幽靈になつて逢い

に来るのがこれに相違ねえ、それじやア 一晩 ふたばん 来たのは幽靈だツ

たかと思うと、ぞつと身の毛がよだつ程怖くなつた」

みね「あゝ、いやだよ、おふざけでないよ」

伴「今夜はよもや来やアしめえと思つてゐる所へ又來たア、今夜
はおれが幽靈だと知つてゐるから怖くツて口もきげず、膏 あぶらあせ 汗

を流して固まつていて、おさえつけられるように苦しかつた、そ

うすると未だ剥してお呉くんなさいませんねえ、何うしても剥して

おくんなさいませんと、あなたまでお怨うらみ申しますと、恐かねえ

顔をしたから、明日 あした は屹度剥しますと云つて帰けしたんだ、それだ

のに手前に兎や角う嫉妬やきもち をやかれちやア詰らねえよ、己 おれ は幽靈

に怨みを受ける覚えはねえが、札を剥せば萩原様が喰くいころ殺される

か取^{とりころ}殺^さされるに違^{ちげ}えねえから、己はこゝを越してしまおうと思
うよ」

みね「嘘をおつきよ、何^{なん}ぼ何^{なん}でも人を馬鹿にする、そんな事があ
るものかね」

伴^{うたぐ}「疑^{あした}るなら明日の晩手前^{てめえ}が出て挨拶^{あいさつ}をしろ、己は^{おれ}真^{まつ}平^{びら}だ、戸
棚^{へい}に入^つって隠^{かく}れていらア」

みね「そんなら本当かえ」

伴「本当も嘘もあるものか、だから手前^{てめえ}が出なよ」

みね「だッて帰る時には駒下駄の音がしたじやアないか」

伴^{おれ}「そ^うだ^が、大層綺麗な女で、綺麗程尚^{なお}怖いもんだ、明日の晩
己^{おれ}と一緒に出な」

みね「ほんとうなら大変だ、^{わたし}私やいやだよう」

伴「そのお嬢様が振袖^{ふりそで}を着て髪を島田に結上げ、極人柄のいゝ女中^{ていねい}が丁寧^{ていねい}に、己^{おれ}のような者に両手をついて、瘦^{やせ}ツコ^{こけた}何だか淋しい顔で、伴藏さんあなた……」

みね「あゝ怖い」

伴「あゝ怖^{びつく}りした、おれは手前^{てめえ}の声で驚いた」

みね「伴藏さん、ちよいといいやだよう、それじゃア斯^こうしておやりな、私達^{あした}が萩原様のお蔭^{かげ}で何うやらこうやら口を糊^すして居るのだから、明日の晩幽靈が来たらば、おまえが一生懸命になつて斯うおいいな、まことに御尤もではございますが、あなたは萩原様にお恨^{うらみ}がございましようとも、^{わたくしども}私共夫婦は萩原様のお蔭で斯

うやつて いるので、萩原様に もしも 万まへ一いの事ことが ありましては 私共夫婦の
 暮し方かたが 立ちませんから、どうか 暮し方かたの付く ように お金おんせんを 百両ひゃくりょう
 持つて 来て 下さいまし、そうすれば 岐度きど剥はがしましようと お云いいよ、
 怖いだろうが お前まへは 酒さけを 飲めば 気丈夫きじょうじょうになるというから、わたしが 夜よ
なべ延のべをして お酒さけを 五合ごあつばかり 買つて おくから、醉おひるつた 紛まぎれに そう云い
 つたら 何どうだろうう

伴「馬鹿ばか云いえ、幽靈ゆうれいに 金かながあるものか」

みね「だからいゝやね、金かなを よこさなければ お札おふくろを 剥はがさないやね、
 それで 金かなも よこさないで お札おふくろを 剥はがさなけりやア 取殺とりころすというよ
 うな訳わけの 分らわからない 幽靈ゆうれいは 無むいよ、それにお前まへには 恨うらみのある 訳わけでも
 なしき、斯このういえば 義理ぎりがあるから 心配こころはない、もしお金かなを持つ

て来れば剥してやつてもいいじゃアないか」

伴「成程、あの位訳のわかる幽靈だから、そう云つたら得心して
帰るかも知れねえ、殊によると百両持つて来るものだよ」

みね「持つて来たらお札を剥しておやりな、お前考えて御覽、百
両あればお前と私は一生困りやアしないよ」

伴「成程、こいつは旨え、屹度持つて来るよ、こいつは一番やツ
つけよう」

と慾というものは怖しいもので、明る日は日の暮れるのを待つ
ていました。そうこうする内に日も暮れましたれば、女房は私や
見ないよと云いながら戸棚へ入るという騒ぎで、彼是しているう
ち夜も段々と更けたり、もう八ツになると思うから、伴藏は茶

碗酒でぐいぐい引つかけ、酔つた紛れで掛合う積りでいると、其の内八ツの鐘がボーンと不忍の池に響いて聞えるに、女房は熱いのに戸棚へ入り、檻樓を被つて小さく成つている。伴藏は蚊帳の中にしやに構えて待つてゐるうち、清水のもとからカラソコロン／＼と駒下駄の音高く、常に変らず牡丹の花の灯籠を提げて、朦朧として生垣の外まで来たなと思うと、伴藏はぞつと肩から水をかけられる程怖氣立こわけだち、三合呑んだ酒もむだになつてしまい、ぶる／＼慄えながらいると、蚊帳の側へ来て、伴藏さん／＼というから、

伴「へい／＼お出でなさいまし」

女「毎晩参りまして、御迷惑の事をお願い申して誠に恐れ入ります

すが、未だ今夜も御札が剥がれて居りませんので這入る事が出来
ず、お嬢様がお憤かり遊ばし、私が誠に困りますから、どうぞ二
人のものを不便と思召してあのお札を剥して下さいまし」

伴藏はガタ／＼慄えながら、

伴「御尤さまでございますけれども、私共夫婦の者は、

萩原様のお蔭様で漸く其の日を送つてゐる者でございますから、
萩原様のお体にもしもの事がございましては、私共夫婦のものが
あとで暮し方に困りますから、どうぞ後で暮しに困らないように百
両の金を持つて来て下さいましたらば直ぐに剥しましよう」

と云うたびに冷たい汗を流し、やつとの思いで云いきりますと、
兩人は顔を見合せて、暫く首を垂れて考えて居ましたが。

米 「お嬢様、それ御覧じませ、此のお方にお恨はないのに御迷惑をかけて済まないではありますんか、萩原様はお心変りが遊ばしたのだから、貴方がお慕いなさるのはお冗でござります、何うぞふツつりお諦めあそばして下さい」

露 「米や、^{わたし}私や何うしても諦める事は出来ないから、百目^{ひやくめ}の金子^{うらみ}を伴藏さんに上げて御札を剥がして戴き、何うぞ萩原様のお側へやつておくれヨウ！」

といいながら、振袖^{ふりそで}を顔に押しあて 潜^{さめ}々[〃]と泣く様子^きが実際に物凄い有様^{ありさま}です。

米 「あなた、そう仰しやいますが何うして私が百目^{ひやくめ}の金子^{うらみ}を持つておろう道理はございませんが、それ程までに御意遊ばしますか

ら、どうか才覚をして、明晩持つてまいりましようが、伴藏さん、
 まだ御札の外に萩原さまの懐に入れていらつしやるお守は、海
 音如来様という有難い御守ですから、それが有つては矢張
 お側へまいる事が出来ませんから、何うか其の御守も昼の内にあ
 なたの御工夫でお盗み遊ばして、外へお取扱を願いたいもので
 ございますが、出来ましようか」

伴「へい／＼御守を盗みましようが、百両は何うぞ屹度持つて來
 てお呉んなせえ」

米「嬢様それでは明晩までお待ち遊ばせ」

露「米や又今夜も萩原様にお目にかかるいで帰るのかえ」
 と泣きながらお米に手を引かれてスウーと出て行きました。

十一

二十四日は飯島様はお泊り番で、お國は只寝ても覚めても考えには、どうがなして宮野邊みやのべの次男源次郎と一つになりたい、就ついては来月の四日に、殿様と源次郎と中川へ釣つりに行く約束がある故、源次郎に殿様を川の中へ突落つきおとさせ、殺してしまえば、源次郎は飯島の家の養子になるまでの工夫は付いたものゝ、此の密談を孝助に立聞たちぎかれましたから、どうがな工夫をして孝助に暇いとまを出すか、殿様のお手打てうちにでもさせる工夫はないかと、いろいろと考え、終しまいには疲れてとろくまどろ仮寝まどろむかと思うと、ふと目が覚めて、

と見れば、二間隔けんかくつて いる襖ふすまがスウーとあきます。以前は屋敷方がたにては暑中でも簾障子すだれしようじはなかつたもので、縁側はやはり障子あ中は襖で立て切つてありますのが、サラ／＼と開いたかと思うと、スラリ／＼と忍び足で歩いて参り、又次のお居間の襖をスラリ／＼と開けるから、お國はハテナ誰かまだ起きて居るかと思つていると、地袋じぶくろの戸がガタ／＼と音がしたかと思うと、錠じょうを明ける音がガチ／＼と聞えましたから、ハテナと思う内スウーツトンと襖をしめ、ピシヤリ／＼と裾すそを引くような塩梅あんばいで台所の方へ出て行きますから、ハテ変な事だと思い、お國は気丈な女でありますから起上り、雪洞ほんぼりを点つけ行つて見ると、誰もいないから、地袋の方を見ると戸が明け放してあつて、お納戸縮緬なんどちりめんの胴巻が

外の方へ流れ出して居たのに驚いて調べて見ると、殿様のお手文
 庫の錠前を捻切り、胴巻の中に有つた百目の金子が紛失いたし
 たに、さては盜賊かと思うと後が怖氣立つて憶するもので、お
 國も一時驚いたが、忽ち一計を考え出し、此の胴巻の金子の紛失
 したるを幸に、之を証拠として、孝助を盜賊に落し、殿様にた
 きつけて、お手打にさせるか暇ひまを出すか、どの道かに仕ようと、
 其の胴巻を袂たもとに入れ置き、臥床ふしどに帰つて寝てしまい、翌日になつ
 ても知らぬ顔をしており、孝助には弁当を持たせて殿様のお迎い
 に出してやり、其の後へ源助といふ若党が筈ほうきを提げてお庭の掃
 除に出てまいりました。

國「源助どん」

源「へい／＼お早うござります、いつも御機嫌よろしゅう、此の
節は 日^{につちゅう}中^{じゆう}は大層いきれて凌ぎ兼ねます、今年のよう^{きび}な酷^{ひど}しい
事はございません、何うも暑中より酷しいようでござります」

國「源助どん、お茶がはいつたから一杯飲みな」

源「へい有難うござります、お屋敷様は高^{たかだい}台でござりますから、
余程風通しもよくて、へい御門は何うも悉く熱うござりまする、
へい、これは何うも有難うござりまする、私は御酒をいたゞきま
せんからお茶は誠に結構で、時々お茶を戴きまするのは何よりの
樂みでござりまする」

國「源助どん、お前は八ヶ年前^{ぜん}御当家へ来て中々正直者だが、孝
助は三月の五日に当家へ御奉公に来たが、孝助は殿様の御意^{ぎよい}に入^いい

りを鼻にかけて、此の節は增長して 我儘わがまゝになつたから、お前も
一つ部屋にいて、時々は腹の立つ事もあるだろうねえ」

源「いえくど何う致しまして、あの孝助ぐらいな善く出来た人間
はございません、其の上殿様思いで、殿様の事と云うと 気違の
ようになつて働きます、年はまだ廿一だそうですが、中々届いた
ものでござります、そして誠に親切な事は私も感心致しました、
先達さきだつて私の病氣の時も孝助が夜よツびて寝ないで看病をしてくれま
して、朝も眠ねむがらずに早くから起きて殿様のお供を致し、あの
位な情合じょうあいのある男はないと私は實に感心をしております」

國「それだからお前は孝助に詔ばかされているのだよ、孝助はお前の
事を殿様にどんなに胡麻をするだろう」

源「へエー胡麻をりますか」

國「お前は知らないのかえ、此の間孝助が殿様に云付けるのを聞いていたら、源助は何うも意地が悪くて奉公どがしにくく、一つ部屋にいるものだから、源助が新参ものと侮り、種々に苛めいじわたくしに何も教えて呉れませんで仕損しつじるようばかり致し、お茶がはいつて旨おいしい物を戴いても、源助が一人で食べて仕舞つて私にはくられません、本当に意地の悪い男だから、殿様もお腹をお立ち遊ばして、源助は年甲斐もない憎い奴だ、今に暇いとまを出そうと思つていると仰しやつたよ」

源「へい、これは何うも、孝助は途方ほどもない事を云つたもので、これは何うも、私は孝助にそんな事をいわれる覚えはございませ

ん、おいしい物を沢山に戴いた時は、孝助殿お前は若いから腹が減るだろうと云つて、皆な孝助にやつて食べさせる位にしているのに何たる事でしよう」

國 「そればかりじやアないよ孝助は殿様の物を掠ねるから、お前孝助と一緒にいると今に掛り合いだよ」

源 「へい何か盗りましたか」

國 「へいたツて、お前は何も知らないから今に掛り合いになるよ、慥かに殿様の物を取つた事を私は知つてゐるよ、私は先刻から女部屋のものまで検めてゐる位だから、お前はちよつと孝助の文庫をこゝへ持つて来ておくれ」

源 「掛け合いで成つては困ります」

國 「夫は私が宜いように殿様に申上げて置いたから、そつと孝助の文庫を持つて来な」

といわれて、源助はもとより人が好いからお國に奸策あるとは知らず、部屋へ参りて孝助の文庫を持つて参つてお國の前へ差出すると、お國は文庫の蓋を明け、中を檢める振をしてそつと彼のお納戸縮緬の胴巻を袂から取出して中へズッと差込んで置いて。

國 「呆れたよ、殿様の大事な品がこゝに入つているんだもの、今に殿様がお帰りの上で目張りこで皆の物を検めなければ、私の預りの品が失なつたのだから、私が済まないよ、屹度詮議を致します」

源「へい、人は見かけによらないものでござりますねえ」

國「此の文庫を見た事を黙つておいでよ」

源「へい宜しゆうござります」

と文庫を持つて立^{たちかえ}帰り、元の棚へ上げて置きました。すると八ツ時、今の三時半頃殿様がお帰りになりましたから、玄関まで皆々お出迎いをいたし、殿様は奥へ通りお褥^{しどね}の上にお坐りなされたから、いつもならば出来立てのお供^{そな}えのようにお國が側から団扇^{うちわ}で扇^{あお}ぎ立て、ちやほやいうのだが、いつもと違つて鬱^{ふさ}いでいる故、

飯「お國^{だいぶ}大分すまん顔をしてるが、気分でも悪いのか、何うした」

國「殿様 もうしわけ 申訳 もうしわけ のない事が出来ました、昨晩お留守に盜賊が
 はいり、金子が百目紛失いたしました、あのお納戸縮緬の胴巻
 に入れて置いたのを胴巻ぐるみ紛失いたしました、何でも昨晩の
 様子で見ると、台所口の障子が明いたようで、外は締りは嚴重に
 してあつて、誰も居りませんから、よく検めますと、お居間の地
 袋の中にあるお文庫の錠前が捻切ねじきつてありました、それから驚いて
 毘沙門様に願掛けをしたり、占うらないしゃ者に見て貰うと、これは
 内々うちくの者が取つたに違ひないと申しましたから、皆みんなの文庫や葛籠がら
 を検めようと思つて居ります」

飯「そんな事をするには及ばない、内々の者に、百両の金を取る
 程の器量のある者は一人もいない、他から這入つた賊ぞくであろう」

國 「それでも御門の締りは嚴重に付けておりますし、只台所口が明いて居たのですから、内々の者を一ト通り詮議をいたします、……アノお竹どん、おきみどん、皆此方へ来ておくれ」

竹 「とんだ事でございました」

きみ 「私はお居間などにはお掃除の外参つた事はございませんが、嘸御心配な事でございましょう、私なぞは昨晩の事はさっぱり存じませんでござります、誠に驚き入りました」

飯 「手前達を疑ぐる訳ではないが、おれが留守で、國が預り中の事ゆえ心配をいたしているものだから」

女中は

「恐れ入ります、どうぞお檢め下さいまし」
あらた

と銘々葛籠を縁側へ出す。

飯「たけの文庫には何いう物が入つてゐるか見たいナ成程たま
かな女だ、一昨年遣わした手拭てぬぐいがチャンとしてあるな、女とい
う者は小切こぎれの端でもチャンと置紙たどりへいれて置く位でなければいか
ん、おきみや、手前の文庫を一つ見てやるから此処へ出せ」

君「私のは何うぞ御免あそばして、殿様が直に御覽あそばさない
で下さい」

飯「そうはいかん、竹のを検あらためて手前のばかり見ずにしては怨うら
ツこになる」

君「どうぞ御勘弁恐れ入ります」

飯「何も隠す事はない、成程、ハヽア大層まくらぞうし枕草紙まくらぞうしをためたな」

君「恐れ入ります、貯めたのではございません、親類内から到来をいたしたので」

飯「言訳をするな、着物が殖ると云うから宜いわ」

國「アノ男部屋の孝助と源助の文庫を検めて見とうございます、お竹どん一寸二人を呼んでおくれ」

竹「孝助どん、源助どん、殿様のお召でござりますよ」

源「へい／＼お竹どんなんだえ」

竹「お金が百両紛失して、内々の者へお疑いがかかり、今お調べの所だよ」

源「何處から這入つたろう、何しろ大変な事だ、何しろ行つて見よう」

と両人飯島の前へ出て来て、

源 「承わり^{びつく}恵り致しました、百両の金子^{きんす}が御紛失^{ごふんじつ}になりました
どうでござりますが、孝助^{わたくし}と私^{わたし}と御門を堅く守つて居りましたに、
何^どういう事でございましょう、嚙御心配^{さぞ}な事で」

飯 「なに國^{くに}が預り中で、大層心配をするから一寸^{ちよつ}検める^{あらた}のだ」
國 「孝助どん、源助どん、お氣の毒だがお前方二人は何^どうも疑ら
れますよ、葛籠^{つづら}をこゝへ持つてお出で」

源 「お檢め^{あらた}を願います」

國 「これ切りかえ」

源 「一切合切^{さいがつさいひとしよたいこれぎ}一世^{いせ}帶是^{たいこれ}切りでござります」

國 「おや／＼まあ、着物^{そで}を袖^{そで}置^だみにして入れて置くものではな

いよ、ちゃんと畳んでお置きな、これは何だえ、ナニ寝衣だとえ、
 相変らず無性ぶじょうをして丸めて置いて穢きたないねえ、此の紐ひもは何だえ、
 畏しらみ紐ひもだとえ、穢きたないねえ、孝助こうすけどんお前のをお出し、此の文庫
 切りか」

とはから段々ひろちやくいたしましたが、元より入れて置いた
 胴卷どゆえ有るに違たがない。お國はこれ見よがしに団扇うちわの柄えに引掛
 けて、すッと差上げ、

國「おい孝助こうすけどん此の胴卷どは何うしてお前の文庫の中に入つてい
 たのだ」

孝「おや／＼、さつぱり存じません、何う致したのでしよう
 國「おとぼけでないよ、百両のお金が此の胴卷どぐるみ紛失ふんじつした

から、御神鬪おみくじうらないの占うらないのと心配をしているのです、是なが失くなつては

何なうも私が殿様に済まないからお金を返しておくれよ」

孝わたくし「私は取つた覚えはありません、どんな事が有つても覚えはありません、へいへい何ないう訳で此の胴卷どうまきが入つていたか存じません、へえ」

國「源助どん、お前は一番古く此のお屋敷やしきにいるし、年かさも多い事だから、これは孝助こうすけどんばかりの仕業しわざではなかろう、お前と二人で心を合せてした事に違ちがいない、源助どんお前から先へ白状しらじょうしておしまい」

源「これは、私はわたくしどうも、これ孝助こうすけ々々、どうしたんだ、己おれが迷惑めいせきを受けるだろうじやないか、私は此のお屋敷やしきに八ヶ年も御奉公ごほうこう

をして、殿様から正直と云われて いるのに 年嵩としかさだものだから御ご
疑念ぎねんを受ける、孝助どうしたか「云わねえか」

孝 「私は覚えはないよ」

源 「覚えはないといつたつて、胴卷の出たのは何どうしたのだ」

孝 「何うして出たか私わたしや知らないよ、胴卷は自然ひとりでに出て來たの
だもの」

國 「自然ひとりでに出たと云つてすむかえ、胴卷の方から文庫の中へ駆か
込けこむやつがあるものか、そら／＼／＼しい、そんな優しい顔つきを
して本当に怖い人だよ、恩も義理も知らない犬畜生とはお前の事
だ、私が殿様にすまない」

と孝助の膝をグツと突く。

孝「何をなさいます、私は覚えはございません、どんな事が有つても覚えはございません」

國「源助どん、お前から先へ白状おしよ」

源「孝助、己が困る、己が智慧でも付けたようにお疑ぐりがかゝり、困るから早く白状しろよ」

孝「私や覚えはない、そんな無理な事を云つてもいけないよ、外の事と違つて、大いに、それた、家来が御主人様のお金を百両取つたなんぞと、そんな覚えはない」

源「覚えがないと計り云つても、それじやア胴巻の出た趣意が立たねえ、己まで御疑念がかゝり困るから、早く白状して殿様の御疑念を晴してくれろ」

とこづかれて、孝助は泣きながら、只殘念でござりますと云つてゐると、お國は先夜の意趣を晴すは此の時なり、今日こそ孝助が殿様にお手打になるか追出されるかと思えば、心地よく、わざと

「孝助どん云わないか」

と云いながら力に任せて孝助の膝をつねるから、孝助は身につとも覚えなき事なれど、証拠があれば云い解く術もなく、口惜涙なみだを流し、

孝 「痛いたうござります、どんなに突かれても抓つかられても、覚えのない事は云いようがありません」

國 「源助どん、お前から先へ云つてしまいな」

源「孝助云わねえか」

と云いながらドンと突飛ばす。

孝「何を突き飛ばすのだね」

源「いつまでも云わずにいやア己が迷惑する、云いなよ」

と又突飛ばす。孝助は両方から抓ねられ突飛ばされたりして、
残念で堪たまらない。

孝「突き飛ばしたつて覚えはない、お前もあんまりだ、一つ部屋
にいて己の気性も知つてゐるじやアないか、お庭の掃除をするに
も草花一本も折らないように氣を附け、釘一本落ちていても直に
拾つて来て、お前に見せるようにしてゐるじやアないか、己おらの
心も知つていながら、人を盜賊どろぼう
あんまひどと疑ぐるとは余り酷いじやアな

いか、そんなにキヤア／＼いうと殿様までが私を疑ぎります」

始終を聞いていた飯島は大声を上げて、

飯「黙れ孝助、主人の前も憚からず大声おおごえを発して怪しからぬ奴、
覚えがなければ何うして胴卷はだが貴様の文庫うちの中にはつたか、それ
を申せ、何うして胴卷があつた」

孝「何うして有りましたか、さっぱり存じません」

飯「只存ぜぬ知らんと云つて済むと思うかえ、不埒ふらちな奴だ、己おれが
是程目を懸けてやるにサ、其の恩義を打忘うちわすれ、金子を盗むとは
不届ふとゞきものめ、手前ばかりではよもあるまい、外ほかに同類があるだ
ろう、さア申訳もうしわけが立たんければ手打にしてしまうから左様心
得ろ」

と云いいはな放つ。源助は驚いて、

源「どうかお手打の處ところは御勘弁を願います、へい又何者にか騙さ
れましたか知れませんから、篤とくと源助が取調べ御挨拶を申上げま
する迄までお手打の處はお日延ひのべを願いとう存じます」

飯「黙れ源助、さような事を申すと手前まで疑念が懸るぞ、孝助
を構い立てすると手前も手打にするから左様心得ろ」

源「これ孝助、お詫わびを願わないか」

孝「私は何もお詫をするような不埒わたくしをした事はない、殿様にお手
打になるのは有難い事だ、家来が殿様のお手に掛つて死ぬのは当あたりまえ
然あの事だ、御奉公に来た時から、身体は元より命まで殿様に
差上げている氣だから、死ぬのは元より覚悟だけれど、是まで殿

様の御恩に成つた其の御恩を孝助が忘れたと仰しやつた殿様のお言葉、そればかりが冥途よみじの障りだ、併し是も無実の難で致し方がない、後あとで其の金を盗んだ奴が出て、あゝ孝助が盜んだのではない、孝助は無実の罪であつたという事が分るだろうから、今お手打に成つても構わない、さア殿様スツパリとお願ひ申します、お手打になさいまし」

と摩すり寄ると、

飯「今は日のあるうち血けを見せては穢けがれる恐れがあるから、夕景になつたら手打にするから、部屋へ参つて蟄ちつきよ居しておれ、これ源助、孝助を取逃とりにがさんように手前に預けたぞ」

源「孝助お詫を願え」

孝「お詫する事はない、お早くお手打を願います」

飯「孝助よく聞け、匹夫下郎ひつぱげるうという者は己おのれの悪い事を余所よそにして、主人うらを怨み、酷むごい分らんと我がを張みずつて自みずから舌なぞを噛かみ切り、或は首くびをくくつて死ぬ者ものがあるが、手前まへは武士士の胤たねだという事だから、よも左様な死にようは致すまいな、手打うでうちになるまで屹度きつと待まつていろ」

と云いわれて孝助は口惜くやしなみ涙みだの声こゑを慄ふるわせ、

孝「そんな死にようは致しません、早くお手打うでうちになすつて下さいまし」

源「これ孝助お詫びを願わないか」

孝「どうしても取つた覚えはない」

源「殿様は荒い言葉もお掛けなすつた事もなかつたが大枚だいまいの百両の金が紛失ふんじつしたので、金ずくだかごもつと御尤ごゆうもの事だ、お隣の宮野邊の御次男様にお頼み申し、お詫言わびごとを願つていたゞけ」

孝「隣の次男なんぞに、たとえ舌を喰つて死んでも詫言なぞは頼まねえ」

源「そんなら相川様へ願え、新五兵衛様へサ」

孝「何も失錯しきじりの廉かどがないものを、何も覚えがないのだから、あとで金の盜人ぬすみてが知れるに違ひない、天誠てあまことを照てらすというから、其の時殿様が御一言でも、あゝ孝助は可愛かわい相そうな事をしたと云つて下されば、そればつかりが私への好よい手向たむけだ、源助どん、お前にも長らく御厄介になつたから、相川様へ養子ゆに行くようになつたら、

小遣こづかいでも上げようと心懸けていたのも、今となつては水の泡、どうぞ私わたしがない後のちは、お前のまえが一人で二人ふたりまえ前の働きをして、殿様を大切に気を付け、忠義を尽つくして上げて下さい、そればかりがお願いだ、それに源助おんすけどんお前のまえは病身からだだから体だいじを大切に厭いとつて御奉公ごうこうをし、丈夫丈夫でいておくれ、私は身に覚えのない盜賊どろぼうにおとされたのが残念だ」

と声を放つて泣き伏しましたから、源助も同じく鼻くをすゝり、涙こぼをして眼こすを擦りながら、

源「わび事を頼めよ／＼」

孝「心配おしでないよ」

と孝助はいよく手打になる時は、隣の次男源次郎とお國と姦

通し、剩え来月の四日中川で殿様を殺そうという巧みの一伍一
什を委しく殿様の前へ並べ立て、そしてお手打になろうという
氣でありますから、少しも憶する色もなく、平常の通りで居る。
其の内に灯がちらりと点く時刻と成りますと、飯島の声で、

「孝助庭先へ廻れ」

という。此の後は何うなりますか、次回までお預り。

十二

伴藏の家では、幽靈と伴藏と物語をしているうち、女房おみね
は戸棚に隠れ、熱さを堪えて櫻樓を被り、ビツシヨリ汗をかき、

虫の息をころして居るうちに、お米は飯島の娘お露の手を引いて、姿は朦朧もうろうとして搔消す如く見えなく成りましたから、伴藏は戸

棚の戸をドン／＼叩き、

伴「おみね、もう出なよ」

みね「まだ居やアしないかえ」

伴「帰けつてしまつた、出ねえ／＼」

みね「何どうしたえ」

伴「何こうにも斯こうにも己おれが一生懸命に掛合つたから、飲んだ酒も醒さめて仕舞つた、己おらア全ぜん体酒ていさえのめば、侍さむれでもなんでも怖おつか

なくねえよう気に強くなるのだが、幽靈が側へ來たかと思うと、頭から水を打ちかけられるように成つて、すつかり酔よいも醒め、口

もきけなくなつた」

みね「私が戸棚で聞いていれば、何だかお前と幽靈と話をしている声が幽かに聞えて、本当に怖かつたよ」

伴「己おれは幽靈に百両の金を持つて来ておくんなせえ、私わづちども夫婦は萩原様のお蔭おかげで何うやら斯こそうやら暮しをつけて居ります者ですから、萩原様に万一もしもの事が有りましては私わたくしども共夫婦は暮し方に困りますから、百両のお金あしたを下さつたなら屹度きつとお札はがを剥はがしますようというと、幽靈は明日の晩お金を持つて来ますからお札を剥してくれろ、それ我又萩原様の首に掛けていらつしやる海音如來の御おまもり守ほかがあつては入る事が出来ないから、どうか工夫をして其のお守を盗み、外へ取捨てゝ下さいと云つたは、金無垢きんむくで丈たけは四寸

二分の如来様だそうだ、己も此の間お開帳の時ちよつと見たが、あの時坊さんが何か云つてたよ、抑も何とかいつたつけ、あれに違えねえ、何なんでも大変な作物さくものだそうだ、あれを盗むんだが、どうだえ」

かね「どうも旨いねえ、運が向いて来たんだよ、其の如来様はどうかへ売れるだろうねえ」

伴「何うして江戸ではむずかしいから、何所か知らない田舎へ持つて行つて売るのだなア、仮令漬しにしても大したものだ、百両や二百両は堅いものだ」

みね「そうかえ、まア二百両あれば、お前と私と二人ぐらいは一生樂に暮すことが出来るよ、それだからねえ、お前一生懸命でお

やりよ

伴「やるともさ、だが併し首にかけているのだから、容易に放すまい、何うしたら宜かろうナ」

みね「萩原様は此の頃お湯にも入らず、蚊帳かやを吊りきりでお経を読んでばかりいらつしやるものだから、汗臭つかいから行水をお遣いなさいと云つて勧めすすめて使わせて、私が萩原様の身体を洗つているうちにお前がそつとお盜みな」

伴「成程うめ旨えや、だが中々外へは出まいよ」

みね「そんなら座敷の三畳の畳を上げて、あそこで遣わせよう」と夫婦いろく相談をし、翌日湯を沸かし、伴藏は萩原の宅へ出掛け参り、

伴「旦那え、今日は湯を沸かしましたから行水をお遣いなせえ、
旦那をお初はつに遣わせようと思つて」

新「いや／＼行水はいけないよ、少し訳があつて行水は遣えない」
みね「旦那此の熱いのに行水を遣わないで毒ですよ、お寝衣ねめしも汗
でビツショリになつて居りますから、お天氣ですから宜うござい
ますが、降りでもすると仕方がありません、身体のお毒になりま
すからお遣いなさいよ」

新「行水は日暮方表わたくしで遣うもので、私は少し訳があつて表へ出る
事の出来ない身分だからいけないよ」

伴「それじゃアあすこの三畳の畳つけを上げてお遣えなせえ」
新「いけないよ、裸になる事だから、裸になる事は出来ないよ」

伴「隣の占者の白翁堂先生がよくいいますぜ、何でも穢くして置くから病気が起つたり幽霊や魔物などが這入るのだ、清らかにしてさえ置けば幽霊なぞは這入られねえ、じゞむさくして置くと内から病が出る、又穢くして置くと幽霊がへいつて来ますよ」

新「穢くして置くと幽霊が這入つて来るか」

伴「来る所どころじやアありません両人ふたりで手を引いて来ます」

新「それでは困る、内で行水を遣うから三畳の畳を上げてくんなり」というから、伴藏夫婦はしめたと思い、

伴「それ鹽たらいを持つて来て、手桶ておけへホレ湯を入れて來い」

などと手早く支度をした。萩原は着物を脱ぎ捨て、首に掛けているお守まもりを取りはずして伴藏に渡し、

新「これは勿体ないお守だから、神棚へ上げて置いてくんな
伴「へいへい、おみね、旦那の身体を洗つて上げな、よく丁寧にいゝか」

みね「旦那様此方の方をお向きなすつちやアいけませんよ、もつ
と襟を下の方へ延ばして、もつとズウツと屈んでいらつしやい」

と襟を洗う振をして伴藏の方を見せないようにしている暇に、

伴藏は彼の胴巻をこき、ズルくと出して見れば、黒塗光沢消
しのお厨子で、扉を開くと中はがたつくから黒い絹で包んであり、
中には丈四寸二分、金無垢の海音如来、そつと懷中へ抜取り、代
り物がなければいかぬと思い、予ねて用心に持つて來た同じよう
な重さの瓦の不動様を中へ押込み、元の儘にして神棚へ上げ置き、

伴「おみねや長いのう、余り長く洗つているとお逆^{のぼせ}上^{あんま}なさるから、宜い加減にしなよ」

新「もう上がる」

と身体を拭^ふき、浴衣^{ゆかた}を着、あゝ宜い心持^{こころもち}になつた。と着た浴衣は経帷子^{きようかたびら}、使つた行水は湯灌^{ゆかん}となる事とは、神ならぬ身の萩原新三郎は、誠に心持よく表を閉めさせ、宵^{よい}の内から蚊帳^{かや}を吊り、其の中で雨宝陀羅尼経^{しき}を頻りに読んで居ります。此方は伴藏夫婦は、持ちつけない品を持つたものだからほく／＼喜び、宅^{うち}へ帰りて、

みね「お前立派な物だねえ、中々高そうな物だよ」

伴「なに己^おらたちには何^{なん}だか訳が分らねえが、幽靈は此奴^{こいつ}がある

と這へい入られねえという程な魔除まよけのお守りだ

みね「ほんとうに運が向いて来たのだねえ」

伴「だがのう、此奴こいつがあると幽靈が今夜百両の金を持つて来ても、己おれの所へ這入へいる事が出来めえが、是にやア困つた」

みね「それじやアお前出掛け行つて、途中でお目に懸つてお出いでな」

伴「馬鹿ア云え、そんな事が出来るものか」

みね「どつかへ預けたら宜かろう」

伴「預けなんぞして、伴藏ともざぶの持物もちものには不似合だ、何ういう訳で

こんな物を持つていると聞かれた日にやア盗んだ事が露顕して、此こつち方がお仕置しおきに成つてしまわア、又質に置くことも出来ず、と云

つて、宅へ置いて、幽靈が札が剥がれたから萩原様の窓から這入つて、萩原様を喰殺すか取殺した跡をあらためた日にやア、お守が身体にないものだから、誰か盗んだに違えねえと詮議になると、疑りのかゝるは白翁堂か己だ、白翁堂は年寄の事で正直者だから、此方はのつけに疑ぐられ、家搜しでもされてこれが出ては大変だから何うしよう、これを羊羹箱か何かへ入れて畠へ埋めて置き、上へ印の竹を立てゝ置けば、家搜しをされても大丈夫だ、そこで一旦身を隠して、半年か一年も立つて、ほとぼりの冷めた時分帰つて来て掘出せば大丈夫知れる氣遣はねえ」

みね「旨い事ねえ、そんなら穴を深く掘つて埋めてお仕舞いよ」と、直に伴藏は羊羹箱の古いのに彼の像を入れ、畠へ持出し土

ちゆう
中へ深く埋めて、其の上へ目標の竹を立ておき立帰り、さア
これから百両の金の来るのを待つばかり、前祝いに一杯やろうと
夫婦差向いで互に打解け酌交し、最う今に八ツになる頃だか
らというので、女房は戸棚へ這入り、伴藏一人酒を飲んで待つて
いるうちに、八ツの鐘が忍ヶ岡に響いて聞えますと、一際世間が
しんと致し、水の流れも止り、草木も眠るというくらいで、壁に
すだく蟋蟀の声も幽かに哀を催おし、物凄く、清水の元からい
つもの通り駒下駄の音高くカラソコロン／＼と聞えましたから、
伴藏は来たなと思うと身の毛もぞつと縮まる程怖ろしく、かたま
つて、様子を窺つてみると、生垣の元へ見えたかと思うと、い
つの間にやら縁側の所へ来て、

「伴藏さん／＼

と云われると、伴藏は口が利けない、漸々の事で、

「へい／＼」

と云うと、

米 「毎晩^{あが}上りまして御迷惑の事を願い、誠に恐れ入りますが、未だ今晚も萩原様の裏窓のお札が剥れて居りませんから、どうかお剥しなすつて下さいまし、お嬢様が萩原様に逢いたいと私をお責め遊ばし、おむずかつて誠に困りりますから、どうぞ貴方様^{さま}、二人の者を不便に思召^{おぼしめ}しお札を剥して下さいまし」

伴 「剥します、へい剥しますが、百両の金を持って来て下すつたか」

米「百目の金子慥たしかに持參致しましたが、海音如來の御おまもり守もりをお取と
りりすて捨すてになりましたろうか」

伴「へい、あれは脇へ隠しました」

米「左様なれば百目の金子お受取り下さいませ」

とズツと差さしだ出すを、伴藏はよもや金ではあるまいと、手に取うけと上うえ

げて見れば、ズンとした小判の目方、持つた事もない百両の金を
見るより伴藏は怖い事も忘れてしまい、慄ふるえながら庭へ下おり立ち、

「御一緒にお出いでなせえ」

と二間梯子にけんばしごを持もちだ出し、萩原の裏窓したみの蔀ふみへ立て懸け、慄える足を
踏締めながらようく登り、手を差伸ばし、お札を剥むそうとして
も慄えるものだから思う様ように剥れませんから、力を入れて無理に

剥そうと思い、グツと手を引張る拍子に、梯子がガクリと揺れる
 に驚き、足を踏み外し、逆どんぼうを打つて畑の中へ転げ落ち、
 起上おきあがる力もなく、お札を片手に握つかんだまゝ声をふるわし、唯南
 無阿弥陀仏ムアミドと云つていると、幽靈は嬉しそうに兩人顔を見合
 せ、

米「嬢様、今晩は萩原様にお目にかゝつて、十分にお怨みを仰し
 ゃいませ、さア入いらっしやい」

と手を引き伴藏の方を見ると、伴藏はお札を掴つかんで倒れて居りますものだから、袖そでで顔を隠しながら、裏窓からズツと中うちへ這入
 りました。

十三

飯島平左衛門の家うちでは、お國が、今夜こそ予ねて源次郎と譲しめし合あわせた一大事を立たち聞きした邪魔者の孝助が、殿様のお手打てうちになるのだから、仕すましたりと思うところへ、飯島が奥から出てまいり、

飯「國、國、誠にとんだ事をした、譬たとえにも七ななたび搜して人を疑ぐれという通り、紛ふんじつ失した百両の金子が出たよ、金の入れ所は時々取違えなければならぬものだから、己おれが外ほかへ仕舞つて置いて忘れていたのだ、皆みんなに心配を掛けて誠に氣の毒だ、出たから悦んでくれる」

國 「おやまアお目出度めでとうござります」

と口には云えど、腹の内ちつでは些ちつとも目出たい事も何なんにもない。

どうして金きんが出たであろうと不審ふしんが晴れないで居りますと、
飯「女めのどもをみんな皆みなこゝへ呼んでくれ」

國 「お竹たけどん、おきみどん皆みなこゝへお出いで」

竹「只今承うけりますればお金かねが出ましたそうでおめでとう存こじます」

君「殿様誠におめでとうございます」

飯「孝助こうすけも源助げんすけもこゝへ呼んで來くい」

女「孝助こうすけどん源助げんすけどん、殿様とのさまがめしますよ」

源「へいへい、これ孝助こうすけお詫わびごと事を願ねがいな、お前まへは全く取とらない

ようだが、お前の文庫の中から胴巻が出たのがお前があやまり、詫ごとをしなよ」

孝「いゝよ、いよくお手打になるときは、殿様の前で私が列わたくしならべ立てる事がある、それを聞くとお前は喜ぶだろう」

源「なに嬉しい事があるものか、殿様が召すからマア行こう」と兩人連立つれだつてまいりますと、

飯「孝助、源助、此方こつちへ来てくれ」

源「殿様、只今部屋へ往つて段々孝助へ説得を致しましたが、どうも全く孝助は盜とらないようにござります、お腹はらだち立の段は重々ごもつとも御尤ごもつともでござりますが、お手打の儀は何卒なにとぞ廿三日までお日延ひのべの程を願いとう存じます」

飯「まあいゝ、孝助これへ来てくれ」

孝「はいお庭でお手打になりますか、※をこれへ敷きましようか、
血たが滴たれますから」

飯「縁側へ上あがれ」

孝「へい、これはお縁側でお手打、これは有あがたい、勿もつ体たいない
事ことで」

飯「そう云いつちやア困くるよ、さて源助孝助、誠に相濟あいだまん事ことであ
つたが、百両の金は実は己おれが仕舞しまい処どころを違えて置いたのが、用ようだ
筈んすから出だから喜うれんでくれ、家来けらだからあんあんなに疑うたぐつてもよ
いが、外ほかの者ものでもあつては己おれが言い詫わけのしようもない位くわいな詫わけで、
誠に申しわけがない」

孝「お金が出ましたか、さようなれば私は盜賊ではなく、お疑りは晴れましたか」

飯「そうよ、疑りはすっぱり晴れた、己が間違いであつたのだ」
 孝「えゝ有がとうござります、私は素よりお手打になるのは厭い
 ませんけれども、只全く私が取りませんのを取つたかと思われま
 するのが冥路の障りよみじさわでございましたが、御疑念が晴れましたなら
 お手打は厭いません、サゝお手打になされまし」

飯「己が悪かつた、これが家来だからゝが、若し朋友ほうゆうか何か
 であつた日にやア腹を切つても済まない所、家来だからといつて、
 無闇に疑りを掛けては済まない、飯島が板の間へ手を突いてこと
 ノノく詫びる、堪忍して呉れ」

孝「あゝ勿体ない、誠に嬉しゅうございました、源助どん」

源「誠にどうも」

飯「源助、手前は孝助を疑つて孝助を突いたから謝まれ^{あや}」

源「へい／＼孝助どん、誠に済みません」

飯「たけや何かも何か少し孝助を疑つたろう」

竹「ナニ疑りは致しませんが、孝助どんは平常^{ふだん}の気性にも似合ないことだと存じまして、些^{ちつ}どばかり」

飯「矢張り疑つたのだから謝まれ、きみも謝まれ」

竹「孝助どん、誠にお目出度^{めでどう}存じます、先程は誠に済みません」

飯「これ國、貴様は一番孝助を疑り、膝を突いたり何かしたから余計に謝まれ、己でさえ手について謝つたではないか、貴様は猶^な」

更丁寧に詫をしろ」

と云われてお國は、此度こそ孝助がお手打になる事と思い、心の中うちで仕済ましたりと思つてゐる処へ、金子が出て、孝助に謝まれと云うから残念で堪たまらないけれども、仕方ほどがないから、國「孝助どん誠に重々すまない事を致しました、何うか勘弁しておくんなさいましょ」

孝「なに宜しゆうござります、お金が出たから宜いが、若しお手打にでもなるなら、殿様の前でお為になる事を並べ立て死のうと思つて……」

と急込んで云いかけるを、飯島は、

飯「孝助何も云つて呉れるな己にめんじて何事もいうな」

孝「恐れ入ります、金子は出ましたが、彼の胴巻は何うして私の

あ
どうして
わたくし

文庫から出ましたろう」

飯「あれはホラいつか貴様が胴巻の古いのを一つ欲しいと云つた事があつたつけノウ、其の時おれが古いのを一つやつたじやないか」

孝「ナニさような事は」

飯「貴様がそれ欲しいと云つたじやないか」

孝「草履取の身の上で縮緬ちりめんのお胴巻を戴いたとて仕方がござい

ません」

飯「此奴物覚えの悪いやつだ」

孝「私より殿様は百両のお金をして舞い忘れる位ですから貴方の方あなた」

が物覚えがわるい」

飯「成程これはおれがわるかつた、何しろ目出度いから皆に蕎麦
でも喰わせてやれ」

と飯島は孝助の忠義の志しは予て見抜いてあるから、孝助が盜
み取るようなことはないと知つてゐる故、金子は全く紛失した
なれども、別に百両を封金に拵らえ、此の騒動を我が粗忽にして
びつたりと納まりがつきました。飯島は斯程までに孝助を愛する事ゆえ、孝助も主人の為めには死んでもよいと思ひ込んで居りました。斯くて其の月も過ぎて八月の三日となり、いよいよ明日はお休みゆえ、殿様と隣邸の次男源次郎と中川へ釣に行く約束の当日なれば、孝助は心配をいたし、今夜隣の源次郎が来て当家に

泊るに相違ないから、殿様に明 日 の釣をお止めなさるように御意見を申し上げ、もし何うしてもお聞入のない其の時は、今夜客間に寝ている源次郎めが中二階に寝ているお國の所へ廊下伝いに忍び行くに相違ないから、廊下で源次郎を槍玉にあげ、中二階へ踏込んでお國を突殺し、自分は其の場を去らず切腹すれば、何事もなく事済になるに違いない、これが殿様へ生涯の恩返し、併し何うかして 明 日 主人を漁りにやりたくないから、一応は御意見をして見ようと、

孝 「殿様明 日 は中川へ漁に入つしやいますか」

飯 「あゝ行くよ」

孝 「度々申上げるようですが、お嬢様がお亡くなりになり、未ま

だ間まもない事でござりまするから、お見合せなすつては如何いか」

飯おれ「己おのは外ほかに樂ほのみはなく釣つが極ごく好きで、番ばんがこむから、偶たまには好きな釣つぐらいはしなければならない、それを止とめてくれては困るな」

孝あなた「貴あなた方は泳およぎを御存おもじがないから水すいへん辺へんのお遊びは宜よろしくございません、それともたつて入いっしやいますならば孝助こうすけお供ともいたしましよう、何なんうか手前まへお供ともにお連れください」

飯「手前まへは釣つは嫌いやいじやないか、供ともはならんよ、能よく人の樂ゆきみを止とめる奴やつだ、止とめるな」

飯「じゃア今晚よやつて仕舞つかふいます、長々ながなが御厄介ご厄介になりました」

孝「え、なんでも宜しゆうござります、此方の事です、殿様私は
 三月二十一日に御当家へ御奉公に参りまして、新参者の私を、人
 が羨ましがる程お目を掛けてくださり、御恩義の程は死んでも忘
 れはいたしません、死ねば幽靈になつて殿様のお身体に附きまと
 い、凶事のない様に守りますが、全体貴方は御酒を召上れば前
 後も知らずお寝みになる、又召上がらねば少しもお寝みになる事
 が出来ません、御酒も随分気を散じますから少々は召上がつても
 宜しゆうございますが、多分に召上つてお酔いなすつては、仮令たとい
 どんなに御剣術が御名人でも、悪者がどんなことを致しますかも
 知れません、私はそれが案じられてなりません」

飯「さような事は云わんでも宜しい、あちらへ参れ」

孝「へえ」

と立上がり、廊下を二足三足行きにかかりましたが、是れがもう主人の顔の見納めかと思えば、足も先に進まず、又振返つて主人の顔を見てポロリと涙を流し、悄々として行きますから、振返るを見て飯島もハテナと思い、暫し腕拱き、小首かたげて考えて居りました。孝助は玄関に参り、欄間に懸つてある槍をはずし、手に取つて鞘を外して檢めるに、真赤に錆びて居りましたゆえ、庭へ下り、砥石を持來り、槍の身をゴシゴシ研ぎはじめていると、

飯「孝助々々」

孝「へい／＼」

飯 「何だ、何をする、どう致すのだ」

孝 「これは槍でござります」

飯 「槍を研いで何う致すのだえ」

孝 「余り真赤に鏽てありますから、なんば泰平の御代とは申しな

がら、狼藉ものでも入りますと、其の時のお役に立たないと思

い、身体が閑でございますから研ぎ始めたのでござります」

飯 「鏘槍で人が突けぬような事では役にたんぞ、仮令向うに

一寸幅の鉄板があろうとも、此方の腕さえ確なら普ツリツと

突き抜ける訳のものだ、鏘ていようが丸刃であろうが、さような

事に頓着はいらぬから研ぐには及ばん、又憎い奴を突殺す

時は鏘槍で突いた方が、先の奴が痛いから此方が却つていゝ心

持ち
だ

孝「成程こりやアそうですな」

と其の儘槍を元の處へ掛けて置く。飯島は奥へ這入り、其の晩源次郎がまいり酒宴さかもりが始まり、お國が長唄の地じで春雨はるさめかなにか三味線さみせんを搔きならし、当時の九時過まで興を添えて居りましたが、もうお引ひけにしましようと客間へ蚊帳を一杯に吊つて源次郎を寝かし、お國は中二階へ寝てしましました。お國は誰が泊つても中二階へ寝なければ源次郎の来た時不都合だから、何時いつでもお客様されあればこゝへ寝ます。夜も段々と更け渡ると、孝助は手拭てぬぐいを眉深まぶかに頬冠ほおかむりをし、紺看板こんかんばんに梵天帶ぼんてんおびを締め、槍を小脇に搔込んで庭口へ忍び込み、雨戸ふたとこを少々ずつ一所明けて置いて、

花壇の中へ身を潜め隠し縁の下へ槍を突込んで様子を窺つてゐる。
 その中に八ツの鐘がボーンと鳴り響く。此の鐘は目白の鐘だから
 少々早めです。するとさらりくと障子を明け、抜足をして廊
 下を忍び来る者は、寝衣姿なれば、慥に源次郎に相違ないと、
 孝助は首を差延べ様子を窺うに、行灯の明りがぼんやりと障子
 に映るのみにて薄暗く、はつきりそれとは見分けられねど、段々
 中二階の方へ行くから、孝助はいよく源次郎に違ひなしとやり
 過し、戸の隙間から脇腹を狙つて、物をも云わず、力に任せて繰く
 出す槍先は過たず、ツリツと脾腹へ掛けて突き徹す。突かれて
 男はよろめきながら左手を延して槍先を引きさまグツと突き返
 す。突かれて孝助たじくと石へ躡き尻もちをつく。男は槍の穂

先を掴み、縁側より下へヒヨロくと降り、沓脱石に腰を掛け、
「孝助外庭へ出ろ！」

と云われて孝助、オヤ、と言つて見ると、悔りしたは源次郎と思ひの外、大恩受けたる主人の肋骨へ槍を突掛けた事なれば、アツとばかりに呆れはて、唯キヨトキヨトとして逆上あがつてしまい、呆気に取られて涙も出さずにいる。

飯「孝助こちらへ来い」

と氣丈な殿様なれば袂たもとにて疵きず口を確かと押えてはいるものゝ、血は溢あふれてぼたりくと流れ出す。飯島は血に染しみてる槍を杖として、飛石とびいしづた伝いにヒヨロくと建仁寺垣の外なる花壇の脇の所へ孝助を連れて来る。孝助は腰が抜けてしまつて、歩けないで這

つて來た。

孝「へい／＼間違でござります」

飯「孝助己の上締おれ うわじめを取つて疵口を縛れ、早く縛れ」

と云われても、孝助は手がブル／＼とふるえて思うまゝに締らないから、飯島自ら疵口をグツと堅く締め上げ、猶手をもつて其の上を抑え、根府川ねぶかわの飛石の上へペタ／＼と坐る。

孝「殿様、とんでもない事をいたしました」

とばかりに泣なきいだ出す。

飯「静かにしろ、他ほかへ洩ようれては宜しくないぞ、宮野邊源次郎めを突こうとして、過あやまつて平左衛門を突いたか」

孝「大変な事をいたしました、実は召めしつかい仕さむのお國と宮野邊の次

男源次郎と疾より不義をしていて、先月廿一日お泊番の時、
 源次郎がお國の許へ忍び込み、お國と密々話して居る所へうつ
 かり私がお庭へ出て参り、様子を聞くと、殿様がいらつしやつて
 は邪魔になるゆえ、来月の四日中川にて殿様を釣舟から突落し
 て殺してしまい、体能くお頭に届けをしてしまい、源次郎を養子
 に直し、お國と末長く楽しもうとの悪工み、聞くに堪え兼ね、
 怒りに任せ、思わず呻る声を聞きつけ、お國が出て参り、彼此
 と言い合はしたものゝ、源次郎の方には殿様から釣道具の直しを
 頼みたいとの手紙を以て証拠といたし、一時は私云い籠められ、
 弓の折にしてしたゝか打たれ、いまだに残る額の疵、口惜くてたま
 り兼ね、表向にしようとは思つたなれど、此方は証拠のない

聞いた事、殊に向うは次男の勢い、無理でも圧え付けられて私は
 お暇いとまになるに相違ないと思い諦め、彼の事は胸にたゝんでしまつて置き、いよいよ明みょうにち日は釣にお出いでになるお約束日ゆえお止め申しましたが、お聞入れがないから、是非なく、今晚二人の不義者を殺し、其の場を去らず切腹なし、殿様の難儀をお救い申そうと思うた事は鶴いすかの嘴はしと喰くいちが違い、とんでもない間違をいたしました、主人の為に仇あだを討とうと思つたに、却かえつて主人を殺すとは神も仏もない事か、何んなんたる因果な事であるか、殿様御免遊ばせせ」

と飛石へ両手をつき孝助は泣き転がりました。飯島は苦痛くづらを堪たまえながら、

飯「あゝゝ不束ふつゝかなる此の飯島を主人と思えばこそ、それ程ま

でに思うてくれる志忝ない、なんぼ敵同士とは云いながら現在汝の槍先に命を果すとは輪廻応報りんねおうほう、あゝ実に殺生は出来んものだなア」

孝「殿様敵同士とは情ない、何で私は敵同志でございますの」

飯「其の方が当家へ奉公に参つたは三月廿一日、其の時某非番にて貴様の身の上を尋ねしに、父は小出の藩中にて名をば黒川孝藏と呼び、今を去る事十八年前、本郷三丁目藤村屋新兵衛という刀屋の前にて、何者とも知れず人手に罹り、非業の最期を遂げたゆえ、親の敵かたきを討ちたいと、若年の頃より武家奉公を心掛け、漸々よう々の思いで当家へ奉公住すみをしたから、どうか敵の討てるよう剣術を教えて下さいと手前の物語りをした時、恥りしたというは、

拙者がまだ平太郎と申し部屋住の折、彼の孝藏と聊の口論がもと、
なり、切捨てたるはかく云う飯島平左衛門であるぞ」

と云われて孝助は唯へい／＼とばかりに呆れ果て、張詰めた氣
もひよろぬけて腰が抜け、ペタ／＼と尻もちを突き、呆気に取ら
れて、飯島の顔を打眺め、茫然として居りましたが、暫くして、
孝「殿様そう云う訳なれば、なぜ其の時にそう云つては下さいま
せん、お情のうございます」

飯「現在親の敵と知らず、主人に取つて忠義を尽す汝の志、殊に
孝心深きに愛で、不便なものと心得、いつか敵と名告つて汝に討
たれたいと、さま／＼に心痛いたしたなれど、苟めにも一旦主
人とした者に刃向えれば主殺しの罪は遁れ難し、されば如何に
はむか しうごろ のが

もして汝をば罪に落さず、敵と名告り討たれたいと思ひし折から、相川より汝を養子にしたいとの所望に任せ、養子に遣わし、一人前の侍となして置いて仇と名告り討たれんものと心組んだる其の処へ、國と源次郎めが密通したを怒つて、二人の命を絶たんとの汝の心底、最前庭にて鎧槍を磨ぎし時より暁りしゆえ、機を外さず討たれんものと、態と源次郎の容をして見違えさせ、槍で突かして孝心の無念をこゝに晴せんと、かくは計らいたる事なり、今汝が鎧槍にて脾腹を突かれし苦痛より、先の日汝が手を合せ、親の敵の討てるよう剣術を教えてくだされど、頼まれた時のせつなさは百倍増ましであつたるぞ、定めて敵を討ちたいだろうが、我が首を切る時は忽ち主殺しの罪に落ちん、されば我鬚まげをば切取つて、

之にて胸をば晴し、其の方は一先こゝを立退いて、相川新五兵衛方へ行き密々に万事相談致せ、此の刀は先つ頃藤村屋新兵衛方にて買わんと思い、見ているうちに喧嘩となり、汝の父を討つたる刀、中身は天正助定なれば、是を汝に形見として遣わすぞ、又此の包の中には金子百両と悉しく跡方の事の頼み状、これを披いて読下せば、我が屋敷の始末のあらましは分る筈、汝いつまでも名残を惜しみて此所にいる時は、汝は主殺の罪に落るのみならず、飯島の家は改易となるは当然、此の道理を聞分けて疾く参れ」

孝「殿様、どんな事がございましようとも此の場は退きません、
仮令親父をお殺しなさりようが、それは親父が悪いから、かくま

で情ある御主人を見捨てゝ他へ立退けましようか、忠義の道を欠く時は矢張孝行は立たない道理、一旦主人と頼みしお方を、粗相とは云いながら槍先にかけたは私の過り、お詫の為に此の場にて切腹いたして相果てます」

飯「馬鹿な事を申すな、手前に切腹させる位なら飯島はかくまで心痛はいたさぬわ、左様な事を申さず早く往け、もし此の事が人の耳に入りなば飯島の家に係わる大事、悉しい事は書置に有るから早く行かぬか、これ孝助、一旦主従の因縁を結びし事なれば、仇は仇恩は恩、よいか一旦仇を討つたる後は三世も変らぬ主従と心得てくれ、敵同士でありながら汝の奉公に参りし時から、どう云う事か其の方が我が子のように可愛くてなア」

と云われ孝助は、おい／＼と泣きながら、

孝「へい／＼、これまで殿様の御丹誠を受けまして、剣術といい槍といい、なま兵法に覚えたが今日却かえつて仇となり、腕が鈍くば斯かくまでに深くは突かぬものであつたに、御勘弁なすつてくださいまし」

と泣き沈む。

飯「これ早く往け、往かぬと家は潰つぶれるぞ」

と急き立てられ、孝助は止むを得ず形見の一刃腰に打込み、包を片手に立上り、主人の命に随つて脇差抜いて主人の元結もとゆいをはじき、大地へ慟どうと泣伏なきふし、

孝「おさらばでございます」

と別れを告げてこそく門を出て、早足に水道端なる相川の屋敷に参り。

孝「お頼ん申しますく」

相「善藏や誰か門を叩くようだ、御廻状ごかいじょうが来たのかも知らん、一寸出ろ、善藏や」

善「へいく」

相「何だ、返事ばかりしていてはいかんよ」

善「只今明けます、只今、へい真暗まづくらでさつぱり訳がわからぬ、只今々々、へいく、どつちが出口だか忘れた」

コツリと柱で頭ぶ打ツつけ、アイタアイタヽヽヽと寝惚眼ねぼけまなこをこすりながら戸を開いて表へ立出ひらたちいで、

善「外の方がよっぽど明るいくらいだ、へい／＼どなた様でござ
います」

孝「飯島の家来孝助でございますが、宜しくお取次を願います」

善「御苦勞様でございます、只今明けます」

と石の吊してある門をがツたん／＼と明ける。

孝「夜中上りまして、おしづまりに成った処ところを御迷惑をかけま

した」

善「まだ殿様はおしづまりなされぬようで、まだ御本ごほんのお声が聞
えますくらい、先ずお這入りまはい」

と内へ入れ、善藏は奥へ参り、

善「殿様、只今飯島様の孝助様が入つしやいました」

相「それじゃアこれへ、アレ、コリヤ善藏寝惚てはいかん、これ蚊帳の釣手を取つて向うの方へやつて置け、これ馬鹿何を寝惚てるのだ、寝ろく、仕方のない奴」

と呑呑ながら玄関まで出迎え、

「これは孝助殿、さあくお上り、今では親子の中何も遠慮はない、ズツと上れ」

と座敷へ通し、

相「さて孝助殿、夜中やちゆうのお使つかい定めて火急の御用だろう、承りましよう、えゝ何う云う御用か、何だ泣いているな、男が泣くくらいではよくくな訳だろうが、どうしたんだ」

孝「夜中上り恐れ入りますが、不思議の御縁、御当家様の御所望

に任せ、主人得心の上私養子のお取極わたくしとりきめはいたしましたが、深い仔細がございまして、どうあつても遠国へ参らんければなりませんゆえ、此の縁談は破談と遊ばして、どうか外々ほかくから御養子をなされて下さいませ」

相「はいナア成程よろしい、お前が気に入らなければ仕方が無いねえ、高は少なし、娘は不束ふつつかなり、舅しゅうとうは此の通りの粗忽家そ、ツかしゃで一つとして取り所がない、だが娘がお前の忠義を見抜いて煩わずらうまでに思い込んだもんだから、殿様にも話し、お前の得心の上取極めた事であるのを、お前一人来て破縁わかれんをしてくれると云つてもそれは出来ないな、殿様が来てお取極めになつたのを、お前一人で破るには、何か趣意がなければ破れまい、左様じやござらんか、

どう云う訳だか次第を承わりましよう、娘が気に入らないのか、舅が悪いのか、高が不足なのか、何んだ」

孝「決してそういう訳ではございません」

相 「それじゃアお前は飯島様を失錯りでもしたか、どうも尋常の顔付ではない、お前は根が忠義の人だから、しくじつてハツといい、腹でも切ろうか、遠方へでも行こうと云うのだろうが、そんな事をしてはいかん、しくじつたなら私が一緒に行つて詫をしてやろう、もうお前は結納まで取交せをした事だから、内の者、云い付けて、孝助どのとは云わせず、孝助様と呼ばせるくらいで、云わば内の恵せがれを来年の二月婚礼を致すまで、先の主人へ預けて置くのだ、少し位ぐらいの粗相が有つたツてしくじらせる事があるものか、

と不理窟をいえばそんなものだが、マア一緒に行こう、行つてやろう」

孝「いえ、そう云う訳ではございません」

相「何だ、それじやアどう云う訳だ」

孝「申すに申し切れない程な深い訳がございまして」

相「はゝア分つた、宜しい、そう有るべき事だろう、どうもお前の
ような忠義もの故、飯島様が相川へ行つてやれ、ハイと主命を
背かず答はしたものゝ、お前の器量だから先に約束をした女でも

あるのだろう、所が今度の事を其の女が知つて私が先約だから是非とも女房にしてくれなければ主人に駆込んで此の事を告げるとか、何とか云い出したもんだから、お前はハツと思い、其の事が

主人へ知れては相済まん、それじやアお前を一緒に連れて遠国へ逃げようと云うのだろう、なに一人ぐらいの妾はあつても宜しい、
 お頭へ一寸届けて置けば仔細はない、尤もの事だ、娘は表向の御新造として、内々の処は其の女を御新造として置いてもいゝ、私が取る分米まいを其の女にやりますから宜しい、私が行つて其の女に逢つて頼みましよう、其の女は何者じや、芸者か何んだ」

孝「そんな事ではございません」

相「それじやア何んだよ、エイ何んだ」

孝「それではお話をいたしますが、殿様は負傷ておいでいます」

相「ナニ負傷で、何故早く云わん、それじやア狼藉ろうぜき者ものが忍び込み、飯島が流石手者さすがてしやでも多勢たぜいに無勢ぶぜい、切立きりたてられているのを、お

前が一方を切抜けて知らせに来たのだろう、宜しい、手前は剣術は知らないが、若い時分に学んで槍は少々心得ておる、参つてお助太刀をいたそう」

孝「さようではございません、実は召使の國と隣の源次郎が疾か
ら密通をして」

相「へい、やつて いますか、呆れたものだ、そういうばちらく
そんな噂もあるが、恩人の思いものをそんな事をして憎い奴だ、
人非人ですねえ、それからく」

孝「先月の廿一日、殿様お泊番の夜に、源次郎が密かにお國
の許もとへ忍び込み、明日中川にて殿様を舟から突落し殺そうと
の悪計わるだくみを、私が立聞わたくしたちぎをした所から、争いとなりましたが、

此方こちらは悲しいかな草履取の身の上、向うは二男の勢いきおいなれば喧嘩けんかは負まけとなつたのみならず、弓の折にて打ちよううちやく撲ぢゃくされ、額に残る此の疵きずも其の時打たれた疵きずでござります」

相あいだ「不届至極な奴だ、お前なぜ其の事を直すくに御主人に云わないの

だ」

孝こう「申そうとは思いましたが、わたくしの方は聞いたばかり、証拠にならず、向うには殿様から、暇ひまがあつたら夜よるにでも宅うちへ参つて釣道具の損じを直して呉れとの頼みの手紙がある事ゆえ、表沙汰うわさにいたしますれば、主人は必ず隣あとへ対し、義理にも私はお暇いとまに成るに違ちがいはありません、さすれば後あとにて二人の者が思うがまゝに殿様やしきを殺しますから、どうあつても彼あのお邸邸は出られんと今日まで胸

を摩さすつて居りましたが、明日は愈々中川へ釣にお出になる当日
ゆえ、それとなく今日殿様に明日の漁をお止め申しましたが、お
聞入れがありませんから、止むを得ず、今宵の内に二人の者を殺
し、其の場で私が切腹すれば、殿様のお命に別条はないと思い詰
め、槍を提げて庭先へ忍んで様子を窺いました」

相「誠に感心感服、アゝ恐れ入つたね、忠義な事だ、誠に何うも、
それだから娘より私が惚れたのだ、お前の志は天晴なものだ、
其の様な奴は突放つきっぱなしで宜いよ、腹は切らんでも宜いよ、私が
何のようにもお頭に届とゞけを出して置くよ、それから何うした」

孝「そういたしますると、廊下を通る寝衣姿ねまきすがたは慥たしかに源次郎と思
い、繰出す槍先あやまたず、脇腹深く突き込みましたところ間違

つて主人を突いたのでござります」

相「ヤレハヤ、それはなんたることか、併し疵は浅かろうか」

孝「いえ、深手でござります」

相「イヤハヤどうも、なぜ源次郎と声を掛けて突かないのだ、無闇に突くからだ、困つた事をやつたなア、だが過つて主人を突いたので、お前が不忠者でない悪人でない事は御主人は御存じだろうから、間違いだと云う事を御主人へ話したろうね」

孝「主人は疾くより得心にて、わざと源次郎の姿と見違えさせ、
私に突かせたのでござります」

相「これはマア何ゆえそんな馬鹿な事をしたんだ」

孝「私には深い事は分りませんが、此のお書置に委しい事がござ
わたくし

いますから」

と差出す包を、

相「拝見いたしましたよう、どれこれかえ、大きな包だ、前掛が入つてゐる、ナニ婆^{ばあ}やアのだ、なぜこんな所に置くのだ、そつちへ持つて行け、コレ本の間に眼鏡があるから取つてくれ」

と眼鏡を掛け、^{あんどん}行灯の明り搔き立て^{よみくだ}読下して相川も、ハツとばかりに溜^{ためいき}息をついて驚きました。

十四

伴藏は畠へ転がりましたが、両人の姿が見えなくなりましたか

ら、慄えながらようく起上り、泥だらけの儘家まうちへ駆け戻り、

伴「おみねや、出なよ」

みね「あいよ、どうしたえ、まあ私は熱かつたこと、
ビツシヨリ流れる程出たが、我慢をして居たよ」

膏あぶら 汗あせ が

伴「手前てめえは熱い汗をかいたろうが、己おらア冷つめてえ汗をかいた、幽靈ゆうれい
が裏窓はいから這入はいつて行つたから、萩原様とりこころは取殺とりこころされて仕舞仕舞うだ
ろうか」

みね「私の考えじやア殺すめえと思うよ、あれは悔しくつて出る
幽靈ではなく、恋しいくと思つていたのに、お札が有つて這入
れなかつたのだから、是が生きている人間ならば、お前さんは余
りな人だとか何なんとか云つて口説くぜつでも云う所だから殺す氣遣きづかいはある

まいよ、どんな事をしているか、お前見ておいでよ」

伴「馬鹿をいうな」

みね「表から廻つてそつと見ておいでヨウ／＼
といわれるから、伴藏は抜足して萩原の裏手へ廻り、暫らく
して立帰り、

みね「大層長かつたね、どうしたえ」

伴「おみね、成程手前の云う通り、何だかゴチャ／＼話し声がするようだから覗いて見ると、蚊帳が吊つて有つて何だか分らないから、裏手の方へ廻るうちに、話し声がパツタリとやんだようだ
みね「いやだよ、詰らない事をお云いでない」

という中に夜もしらくと明け離れましたから、

伴「おみね、夜が明けたから萩原様の所へ一緒に往つて見よう」
みね「いやだよ^{わたし}私や夜が明けても怖くつていやだよ」

というのを、

伴「マア往きねえよ」

と打連れだち。^{うちつ}

伴「おみねや、戸を明けねえ」

みね「いやだよ、何だか怖いもの」

伴「そんな事を云つたつて、手前^{てめえ}が毎朝戸を明けるじやアねえか、
ちよつと明けねえな」

みね「戸の間から手を入れてグツと押すと、栓張棒^{しんぱりぼう}が落ちるか

ら、お前お明けよ」

伴「手前^{てめえ}そんな事を云つたつて、毎朝来て御膳を炊いたりするじ
やアねえか、それじやア手前手を入れて栓張だけ外すがいゝ」

みね「私やいやだよ」

伴「それじやアいゝや」

と云いながら栓張を外し、戸を引き開けながら、

伴「御免ねえ、旦那えゝ夜が明けやしたよ、明るくなりやした
よ、旦那え、おみねや、音も沙汰もねえぜ」

みね「それだからいやだよ」

伴「手前^{てめえ}先へ入れ、手前はこゝの内の勝手をよく知つて
アねえか」

みね「怖い時は勝手も何もないよ」

伴「旦那えく、御免なせえ、夜が明けたのに何怖いことがあるものか、日の恐れがあるものを、なんで幽霊がいるものか、だがおみね世の中に何が怖いツて此の位怖いものア無えなア」

みね「あゝ、いやだ」

伴藏は呟きながら中仕切なかじきりの障子を明けると、真暗まづくらで、

伴「旦那えく、よく寝ていらツしやる、まだ生しよう體てなく能よく寝ていらツしやるから大丈夫だ」

みね「そうかえ、旦那、夜が明けましたから焚たきつけましょう」

伴「御免なせえ、わつち私が戸を明けやすよ、旦那えく」

と云いながら床の内を差覗さしのぞき、伴藏はキヤツと声を上げ、

「おみねや、己アもう此の位くれえな怖いもなア見た事はねえ」

とおみねは聞くよりアツと声をあげる。

伴「おゝ手前てめえの声でなお怖くなつた」

みね「何うなつているのだよ」

伴「何うなつたの斯こうなつたのと、実に何なんとも彼かれとも云いようの
ねえ怖こええことだが、これを手前てめえとおれと見たばかりじやア掛かゝりえ
合いにでもなつちゃア大變てえへんだから、白翁堂の爺さんを連れて來
て立合たちあいをさせよう」

と白翁堂の宅へ参り、

伴「先生く、伴藏でござえやす、ちよつとお明けなすつて」

白「そんなど叩かなくつてもいい、寝ちゃアいねえんだ、疾けうに

眼が覚めている、そんなに叩くと戸が毀こわれらア、どれく待つていろ、あゝ痛いたゝゝ戸を明けたのに己の頭をなぐる奴があるものか」

伴「急いだものだから、つい、御免なせえ、先生ちよつと萩原様の所へ往つて下せえ、何うかしましたよ、大變てえへんですよ」

白「何うしたんだ」

伴「何うにも斯うにも、私が今おみねと兩人でいつて見て驚いたんだから、お前さん一寸立合つて下さい」

と聞くより勇齋も驚いて、藜の杖あかざを曳ひき、ポク／＼と出掛け

参り、

白「伴藏お前先めえへ入んなよ」

伴「私は怖いからいやだ」
わっち

白「じゃアおみねお前先へ入れ」
めえ

みね「いやだよ、私だつて怖いやねえ」

白「じやアい」

と云いながら中へ這入つたけれども、真暗で訳が分らない。

白「おみね、ちよつと小窓の障子を明けろ、萩原氏、どうかなす
つたか、お加減でも悪いかえ」

と云いながら、床の内を差覗き、白翁堂はわな／＼と慄えな
がら思わず後へ下りました。
あとさが

相川新五兵衛は眼鏡を掛け、飯島の遺書かきおきをば取る手おそしと読み下しまするに、孝助とは一旦しゆうじゆう主従ちゆうぢゆうの契りを結びしなれども敵同士であつたること、孝助の忠実に愛めで、孝心の深きに感じ、主殺の罪に落さずして彼が本懐を遂げさせんがため、態わざと宮野邊源次郎と見違えさせ討たれしこと、孝助を急ぎ門外もんそとに出し遣り、自身に源次郎の寝室ねまに忍び入り、彼が刀の鬼となる覚悟、さすれば飯島の家は滅亡致すこと、彼等兩人我を打つて立退く先は必定お國の親元なる越後の村上ならん、就いては汝孝助時を移さず跡追掛け、我が仇なる両人の生首ひつさ提げて立帰り、主の敵しゆうかたきを以て我が飯島の家名再興の儀かしらを頭に届けくれ、其の時は相川廉かどもつを以て我が飯島の家名再興の儀かしらを頭に届けくれ、其の時は相川

様にもお心添えの程偏に願い度いのこと、又汝は相川へ養子に参る約束を結びたれば、娘お徳どとのと互いに睦ましく暮し、両人の間に出来た子供は男^{なんによ}女^かに拘わらず、孝助の血統^{ちすじ}を以て飯島の相続人と定めくれ、後^{あと}は斯々^{なき}云々^{こうくしか／＼}と、実に細かに届く飯島の家来思いの切なる情に、孝助は相川の遺書^{かきおき}を読む間^ま、息をもつかず聞いていながら、膝の上へぽたり／＼と大粒な熱い涙を零^{こぼ}していましたが、突然^{いきなり}剣幕^{けんまく}を変えて表の方へ飛出そうとするを、

相「これ孝助殿、血相^{どこ}變えて何處^ゆへ行きなさる」

と云われて孝助は泣声を震わせ、

孝「只今お遺書^{かきおき}の御様子にては、主人は私^{わたくし}を急いで出し、後^{あと}で

客間へ踏込んで源次郎と鬭うとの事ですが、如何に源次郎が剣術を知らないでも、殿様があんな深傷にてお立合なされでは、彼が無残の刃の下に果敢なくお成りなされるは知れた事、みすく敵を目の前に置きながら、恩あり義理ある御主人を彼等に酷く討たせますは実に残念でござりますから、直ぐに取つて返し、お助太刀を致す所存でございます」

相「分らない事を云わつしやるな、御主人様が是だけの遺書を遣わしなさるは何の為めだと思わツしやる、そんな事をしなさると、飯島の家が潰れるから、邸へ行く事は明朝までお待ち、此の遺書の事を心得てこれを反故にしてはならんぜ」

と亀の甲より年の功、流石老巧の親身の意見に孝助はかえす

言葉もありませんで、口惜がり、唯身を震わして泣伏しました。

話かわつて飯島平左衛門は孝助を門外に出し、急ぎ血潮滴たる槍を杖とし、蟹のように成つてようくに縁側に這い上がり、蹠めく足を踏みしめ踏みしめ、段々と廊下を伝い、そつと客間の障子を開き中へ入り、十二畳一杯に釣つてある蚊帳の釣手を切り払い、彼方へはねのけ、グウくとばかり高鼾で前後も知らず眠ている源次郎の頬の辺りを、血に染みた槍の穂先にてペタリくと叩きながら、

飯「起ろく」

と云われて源次郎頬が冷やりとしたに不図目を覚し、と見れば飯島が元結はじけて散し髪で、眼は血走り、顔色は土氣色にな

り、血の滴たる手槍をピタリツと付け立つてゐる有様を見るより、源次郎は早くも推し、アヽヽこりア流さすが石飯島は智慧者だけある、己と妾のお國と不義してゐる事を覺さとられたか、さなくば例の悪計を孝助奴めが告げ口したに相違なし、何しろ余程の腹はらだち立だ、飯島は真影流の奥儀おうぎを極きわめた剣術の名人で、旗下はたもと八万騎の其の中に、肩を並ぶるものなき達人の聞えある人に槍を付けられた事だから、源次郎はぎよつとして、枕まくら頭もとの一刃を手早く手元に引付けながら、慄ふるえる声を出して、

源「伯父様、何をなさいます」

と一生懸命めんしょく面めん色いろ土氣色に変わり、眼色血走りました。飯島も面色土氣色で目が血走りてゐるから、あいこでせえでございま

す。源次郎は一刀の鎧前^{つばまえ}に手を掛けてはいるものゝ、氣憶れがいたし刃向う事は出来ませんで竦んで仕舞いました。

源「伯父様、^{わたくし}私をどうなさるお積りで」

飯島は深傷^{ふかで}を負いたる事なれば、震^{ふる}える足を踏み止めながら、

飯「何事とは不埒^{ふらち}な奴だ、汝が疾^{とく}より我が召使國と不義姦^{いたずら}通し

てているのみならず、明日^{みょうにち}中川にて漁船^{りょうせん}より我を突き落し、

命を取つた曉に、うまく此の飯島の家を乗取らんとの悪だくみ、

恩を仇なる汝が不所存、云おう様なき人非人^{おひ}、此の場に於て槍

玉に揚げてくれるから左様心得ろ」

と云い放たれて、源次郎は、剣術はからつ下手^{ペタ}にて、放蕩^{ほうとう}を

働き、大塚の親類に預けられる程な未熟^{ふたんれん}不鍛錬^{ふたんれん}な者なれども、

飯島は此の深傷ふかでにては彼の刃に打たれて死するに相違なし、併し
 打たれて死ぬまでも此の槍にてしたゝかに足を突くか手を突いて、
亀手てんぽうか跛足びつこにでもして置かば、後日孝助ごにちが敵討かたきうちを為する時幾
 分かの助けになる事もあるだろうから、何処かを突かんと狙い詰
 められ、

源「伯父さま私は何も槍で突かれる様な覚えはございません」

飯「黙れ」

と怒りの声を振立てながら、一步進んで繰出くりだす槍鋒やりさき銳く突
 きかける。源次郎はアツと驚き身を交かわしたが受け損じ、太股へ掛け
 ブツツリと突き貫き、今一本突こうとしましたが、孝助に突か
 れた深傷ふかでに堪え兼ね、蹠々よろくとする所を、源次郎は一本突かれ死

物狂いになり、一刀を抜くより早く飛込みさま飯島目掛けて切り付ける。切付けられてアツと云つてひよろところへ、又、太刀深く肩まぐろ鮒でもこなす様に切つて仕舞いました。お國は中二階に寝てしましたが、此の物音を聞き附け、寝衣の儘にはしご下りて様子を窺うと、此の体裁に驚き、慌てゝ二階へ上つたり下へ下りたりしていると、源次郎が飯島に止めを刺したようだから、お國は側へ駆かけ付けて、

國 「源さま、貴方にお怪我はございませんか」

源次郎は肩息をつきフウ／＼とばかりで返事も致しません。

國 「あなた黙つていては分りませんよ、お怪我はありませんか」

といわれて源次郎はフウ／＼といいながら、

源 「怪我はないよ、誰だ、お國さんか」

國 「貴方あなたのお足から大層血ほかが出来ますよ」

源 「これは槍で突かれました、手強い奴てづよと思いの外ほかなアにわけはなかつた、併し此處に何時迄いつまでこうしては居いられないから、両人ふたりで一緒に何處いづくへなりとも落延おちのびようから、早く支度もちきたをしな」

と云われてお國は成程そうだと急ぎ奥へ駆戻り、手早く身支度めしものをなし、用意の金子や結構な品々を持さ來り、

國 「源さまこの印籠いんろうをお提げなさいよ、この召物めしものを召せ」

と勧められ、源次郎は着物を幾枚も着て、印籠を七つ提げて、大小を六本挿さし、帯を三本締めるなど大変な騒ぎで、漸々ようく支度

が整つたから、お國とともに手を取つて忍び出でようと/orする処を、仲働きの女中お竹が、先程より騒々しい物音を聞付け、来て見れば此の有様に驚いて、

「アレ人殺し」

という奴を、源次郎が驚いて、此の声人に聞かれてはと、一刀抜くより飛込んで、デツプリ肥ふとつて居る身体を、肩口から背びらへ掛けて斬付ける。きりつ斬られてお竹はキヤツと声をあげて其の儘、息は絶えました。他の女どもゝ驚いて下流しへ這込むやら、又は薪ま箱きばこの中へ潜もぐり込むやら騒いでいる中に、源次郎お國の両人は此処いざくを忍び出で、何処ともなく落ちて行く。あと後で源助は奥の騒ぎを聞きつけて、いきなり自分の部屋飛びだし、拳こぶしを振ふるつて隣家の

壙^{へい}を打ち叩き、破れるような声を出して、

源「狼藉ものが這入りました／＼」

と騒ぎ立てるに、隣家の宮野邊源之進はこれを聞附け思う様、

飯島のごとき手者^{てしや}の處へ押入る狼藉ものだから、大勢^{たいぜい}徒党^{ととう}した

に相違ないから、成るたけ遅くなつて、夜が明けて往く方がいゝ

と思ひ先ず一同^まを呼び起し、蔵へまいつて著込^{きざこみ}を持ってまいれの、

小手脛^{こてすねあて}當の用意のと云つてゐるうちに、夜はほの／＼／＼と明け

渡りたれば、もう狼藉者はいる氣遣^{きづかい}はなかろうと、源之進は家来

一二^{にん}人を召連れ来て見れば此の始末。如何^{いかゞ}したる事ならんと思う

ところへ、一人の女中^{ひと}が下流しから這^{はいあが}上り、源之進の前に両手

をつかえ、

「実は昨晩の狼藉者は、貴方様の御舎弟源次郎様とお國さんと、
疾うから密通してお出でになつて、昨夜殿様を殺し、金子衣類を
窃取り、何処ともなく逃げました」

と聞いて源之進は大いに驚き、早速に邸へ立帰り、急ぎお頭へ
向け源次郎が 出奔の趣の届を出す。飯島の方へはお目附が御
檢屍に到来して、段々死骸を檢め見るに、脇腹に槍の突傷がありま
したから、源次郎如き鈍き腕前にては兎ても飯島を討つ事は
叶うまじ、されば必ず飯島の寝室に忍び入り、熟睡の油断に附入
りて槍を以て欺し討ちにした其の後に、刀を以て斬殺したに相
違なしということで、源次郎はお尋ね者となりましたけれども、
飯島の家は改易と決り、飯島の死骸は谷中新幡隨院へおくり、

こつそりと野辺送りをしてしまいました。こちらは孝助、御主人
が私のために一命をお捨てなされた事なるかと思えば、いとゞ氣
もふさぎ、簪々としていますと、相川はお頭から帰つて、
相「婆アや、少し孝助殿と相談があるから此方へ来てはいかんよ、
首などを出すな」

婆「何か御用で」

相「用じやないのだよ、そつちへ引込んでいろ、これくひっこ茶を入れて來い、それから仏様へ線香を上げな、さて孝助殿少し話したい事もあるから、まアくこつち此方へく、誰にもいわれんが、先ますも以て御主人様のお遺書通りに成るから心配するには及ばん、
お前は親の敵かたきは討つたから、是からは御主人は御主人として、其

の敵を復かえし、飯島のお家再興だよ」

孝「仰せに及ばず、もとより敵討の覚悟でござります、此の後万事に付き宜しくお心添こころぞえの程を願います」

相「此の相川は年老いたれども、其の事は命に掛けて飯島様の御家の立つよう計ります、そこでお前は何日敵討に出立なさるえ」

孝「最早一刻も猶予致す時でございませんゆえ、明早みよそう天出立致す了簡です」

相「明日直あしたすぐに、左様かえ、余り早や過ぎるじやないか、宜しい此の事ばかりは留とめられない、もう一日々々と引き広ぐ事は出来ないが、お前の出立前に私が折入ぜんわしつて頼みたい事があるが、どう

か叶かな
えては下ださるまい
か」

孝「何どのような事でも宜しゆうございます」

相「お前の出立前に娘お徳と婚礼の盃だけをして下さい、外ほかに望みは何もない、どうか聞き濟すんで下さい」

孝「一旦お約束申した事ゆえ、婚礼を致しまして宜しいようなれど、主人よりのお約束申したは来年の二月、殊ことに目の前まへにて主人があの通りになられましたのに、只今婚礼を致しましては主人の位牌へ対して済みません、敵討の本懐を遂とげ立帰り、目出度めでたく婚礼を致しますれば、どうぞそれ迄お待ち下さるよう願います」
相「それはお前の事だから、遠からず本懐を遂げて御帰宅になるだろうが、敵の行方ゆくえが知れない時は、五年で帰るか十年でお帰り

になるか、幾年掛るか知れず、それに私はもう取る年、明日をも
 知れぬ身の上なれば、此の悦びを見ぬ内帰らぬ旅に赴く事があつ
 ては冥途よみじの障り、殊に娘も煩う程お前を思つていたのだから、ど
 うか家内だけで、盃さか事さかずきごとを済ませて置いて、安心させてください
 いな、それにお前も飯島の家来では真鍮卷の木刀を差して行かな
 ければならん、それより相川の養子となり、其の筋へ養子の届を
 して、一人前ひとりまえの立派な侍に出立いでたつて往来すれば、途中で人足な
 どに馬鹿にもされず宜かろうから、何うぞ家内だけの祝言を聞済
 んでください」

孝「至極ごもつと御尤いはいなる仰せです、家内だけなれば違背はございませ
 ん」

相「御承知くだすつたか、千万かたじ添けない、あゝ有難い、相川は貧乏なれども婚礼の入費の備えとして五六十両は掛ると見込んで、別にして置いたが、これはお前の餞別に上げるから持つて行つておくれ」

孝「金子は主人から貰いましたのが百両よございますから、もう入りません」

相「アレサいくら有つても宜いのは金、殊に長旅のことなれば、邪魔でもあろうがそう云わずに持つて行つてください、そこで私が細い金を選つて、襦袢じゅばんの中へ縫い込んで置く積りだから、肌身離さず身に著けて置きなさい、道中には胡麻の灰という奴があるから随分気をお付けなさい、それに此の矢立をさしてお出で、

又これなる一刀は予ねて約束して置いた藤四郎吉光の太刀、重く
もあろうが差してお呉れ、是と御主人のお形見天正助定を差して
行けば、舅と主人がお前の後影に付添つているも同様、勇ま
しき働きをなさいまし」

孝「有りがとうございます」

相「何うか今夜不束な娘だが婚礼をしてくだされ、これ婆、明日
日は孝助殿が目出度く御出立だ、そこで目出度い序でに今夜婚礼
をする積りだから、徳に髪でも取り上げさせ、お化粧でもさせて
置いてくれ、其の前に仕事がある、此の金を襦袢へ縫込んでくれ、
善藏や、手前は直に水道町の花屋へ行つて、目出度く何か頭付
きの魚を三枚ばかり取つて來い、序でに酒屋へ行つて酒を二升、

味淋みりんを一升ばかり、それから帰りに半紙じようを十帖ばかりに、煙草わらじを二玉に、草鞋わらじの良いのを取つて参れ」

「といい付け、そうこうするうちに支度も整いましたから、酒さけさ肴かなを座敷に取並べ、媒妁なこうどなり親なり兼帶けんたいにて、相川が四海浪静かにと謡うたい、三々九度の盃さかずきこと事、祝言の礼も果て、先まずお開きと云う事になる。」

相「あゝゝ婆ア、誠に目出度かつた」

婆「誠にお目出とう存じます、私はお嬢様のお少ちいさい時分からお附き申して御婚礼をなさるまで御奉公いたしましたかと存じますと、誠に嬉しゆうござります、あなた嚙御安心でございましよう相「婆ア宜いかえ、頼むよ、おいらは明日あしたの朝早く起るから、お前

飯を炊かして、孝助殿に尾頭付きでぽツぽツと湯気の立つ飯を食
 べさして立たせてやりたいから、いゝかえ、緩りとお休み、先ず
 お開ひらきと致しましよう、孝助殿どうか幾久しく願います、娘はまだ
 年もいかず、世間知らずの不束者だから何分宜しくお頼み申す、
 氷人なこうどは宵うちの中だから、婆アいゝかえ、頼んだぜ」

婆「貴方あなたは頼むくと仰しやつて何でござります」

相「分らない婆アだな、嬢の事をサ、あすこへちよつと屏風た
 遷てまわして、恥かしくないよう、宜しいか、それがサ誠に彼女あいつが
 恥かしがつて、もじくとしているだろうから旨くソレ」

婆「旦那様なんのお手付きでございますよ」

相「此奴こいっつわからぬ奴だナ、手前だつて亭主を持つたから子供が出

来たのだろう、子供が出来たのち乳が出て、乳母に出たのだろう、
ホレ娘は年がいかないからいゝ塩梅にホレ、いゝか」

婆「貴方は本当に何時までもお嬢様をお少さいように思召でいらっしゃいますよ、大丈夫でござりますよ」

相「成程目出たい、宜いかえ頼むよ」

婆「旦那様、お嬢様お休み遊ばせ」

と云つても、孝助はお國源次郎の跡を追い掛け、兎や斯うと種い々心配などして腕こまねき、床の上に坐り込んでいるから、お徳も寝るわけにもいかず坐つて いるから、

婆「左様なれば旦那様御機嫌様宜しく、お嬢様先程申しました事は宜しゆうござりますか」

徳 「貴方少しお静まり遊ばせな」

孝 「私は少し考え方がありますから、あなたお構いなくお先へお

休みなすつて下さいまし」

徳 「婆やア 一寸ちよつと来ておくれ」

婆 「ハイ、何なんでございます」

徳 「旦たん那様がお休みなさらなくつて」

と云いさして口くごもる。

婆 「貴方お静まりあそばせ、それではお嬢様がお休みなさる事が出来ませんよ」

孝 「只今寝ます、どうかお構いなく」

婆 「誠にどうもお堅かたすぎ過すぎでお気が詰りましょう、御機嫌様よろし

ゆう

徳「あなた少しお横におなり遊ばしまし」

孝「どうかお先へお休みなさい」

徳「婆やア」

婆「困りますねえ、あなた少しお休みあそばせ」

徳「婆やア」

とのべつに呼んでいるから孝助も氣の毒に思い、横になつて枕をつけ、玉椿たまつばき八千代までと思つた夫婦中なか、初めての語らい、誠にお目出たいお話でござります。あした翌日になると、暗いうちから孝助は支度をいたし、

相「これ／＼婆アや、支度は出来たかえ、御膳を上げたか、湯気

は立つたかえ、善藏に板橋まで送らせて遣る積りだから、荷物は

玄関の敷台まで出して置きな、孝助殿御膳を上れ

孝「お父様御機嫌よろしゅう、長い旅ですからつどく書面を
上の訳にも参りません、唯心配になるのはお父様のお身体、どう
か私が本懐を遂げ帰宅致すまで御丈夫にお出であそばせよ、敵の
首を提げてお目に掛け、お悦びのお顔が見とうございます」

相「お前も随分身体を大事にして下さい、どうか立派に出立して
下さい、種々と云いたい事もあるが、キヨト〜して云えない
から何も云いません、娘何んで袖を引張るのだ」

徳「お父様、旦那様は今日お立ちになりましたら、いつ頃お帰宅
になるのでござりますのでしよう」

相「まだ分らぬ事をいう、いつまでも少さい子供のよ^{ちい}な氣でい
ちやアいけないぜ、旦那さまは御主人の敵討に御出立なさるので、
伊勢参宮や物見遊山に往くのではない、敵を討ち遂げねばお帰り
にはならない、何だ泣^{なき}ツ面^{つら}をして」

徳「でも大概いつ頃お帰りになりましようか」

相「おれにも五年かかるか十年かかるか分らない」

徳「そんなら五年も十年もお帰りあそばさないの」

と云いながら 潜^{さめ} ハ と泣^{しお}萎^{しう}れる。

相「これ、何が悲しい、主の敵を討つなど、云う事は、侍の中に
も立派な事だ、かかる立派な亭主を持つたのは有難いと思え、目
出度い出立だ、何故笑^な_ぜい顔をして立たせない、手前が未練を残せ

ば少禄の娘だから未練だ、意氣地がないと孝助殿に愛想を尽かされたら何うする、孝助殿歳がいかない子供のような娘だから、気^{いくじ}_どにかけて下さるな、婆ア何を泣く」

婆「私だつてお名残りが惜しいから泣きます、貴方も泣いて入ら^{わたくし}_{なご}つしやるではございませんか」

相「己は年寄だから宜しい」

と言訳をしながら泣いていると、孝助は、

「さようならば御機嫌よろしゆう」

と玄関の敷台を下り草鞋を穿こうとする、其の側へお徳はすり寄り袂たもとを控え、涙に目もとをうるましながら、

「御機嫌様よろしく」

と縋り付くを孝助は慰め、善藏に送られ出立しました。

十六

白翁堂勇齋は萩原新三郎の寝所を捲きり、實にぞつと足の方から総毛立つほど怖く思つたのも道理、萩原新三郎は虚空を掴み、歯を喰いしばり、面色土氣色に変り、余程な苦しみをして死んだものゝ如く、其の脇へ觸體どくろがあつて、手とも覺しき骨が萩原の首玉びつたまにかじり付いており、あとは足の骨などがばらくになつて、床の中に取散らしてあるから、勇齋は見て洟りし、

白 「伴藏これは何だ、おれは今年六十九に成るが、斯んな怖ろし

いものは初めて見た、支那の小説なぞにはよく狐を女房にしたの、幽靈に出逢つたなぞと云うことも随分あるが、斯様な事にならないよう、新幡隨院の良石和尚に頼んで、有難い魔除の御守を借り受けて萩原の首を掛けさせて置いたのに、何うも因縁は免れられないもので仕方がないが、伴藏首に掛けて居る守を取つて呉れ」

伴「怖いから私やアいやだ」

白「おみね、こゝへ来な」

みね「私もいやですよ」

白「何しろ雨戸を明けろ」

と戸を明けさせ、白翁堂が自ら立つて萩原の首に掛けたる白木

綿の胴巻を取外し、グツとしごいてこき出せば、黒塗光沢消の御厨子にて、中を開けばこは如何に、金無垢の海音如来と思ひの外、いつしか誰か盗んですり替えたるものと見え、中は瓦に赤銅箔を置いた土の不動と化してあつたから、白翁堂はアツと呆れて茫然と致し、

白「伴藏これは誰が盗んだろう」

伴「なんだか私にやアさつぱり訳が分りません」

白「これは世にも尊き海音如来の立像にて、魔界も恐れて立去るという程な尊い品なれど、新幡隨院の良石和尚が厚い情の心より、萩原新三郎を不便に思い、貸して下され、新三郎は肌身放さず首にかけていたものを、何うして斯様にすり替えられたか、誠に不

思議な事だなア」

伴「成程なア、わっちどもにやア何なんだか訳が分らねえが、觀音様ですか」

白「伴藏手前を疑る訳じやアねえが、萩原の地面内うちに居る者は己と手前ばかりだ、よもや手前は盗みはしめえが、人の物を奪う時は必ず其の相に顕そうあらわれるものだ、伴藏ちよつと一寸手前の人相を見てやるから顔を出せ」

と懷中より天眼鏡を取出され、伴藏は大きに驚き、見られては大変と思い。

伴「旦那え、冗談いつちやアいけねえ、わっち私のような斯こんな面つらは、どうせ出世の出来ねえ面だから見ねえでもいゝ」

と断る様子を白翁堂は早くも推すいし、ハヽアこいつ伴藏がおかしいなど思いましたが、なまなかの事を云出して取逃がしてはいかぬと思い直し、

白「おみねや、事柄の済むまでは二人でよく気を付けて居て、成たけ人に云わないようにしてくれ、己は是から幡隨院へ行つて話ををして来る」

と藜の杖を曳きながら幡隨院へやつて来ると、良石和尚は浅葱あさぎ木綿の衣を着し、寂寞じやくまくとして坐布団の上に坐つている所へ勇齋入り來たり、

白「これは良石和尚いつも御機嫌よろしく、とかく今年は残暑の強い事でござります」

良「やア出て來たねえ、此方こつちへ來なさい、誠に萩原も飛んだことになつて、到頭とうとう死んだのう」

白「えゝあなたはよく御存じで」

良「側に悪い奴が附いて居て、又萩原も免のられられない悪因縁で仕方がない、定まるこツちや、いゝわ心配せんでもよいわ」

白「道徳高き名僧智識は百年先の事を看みやぶ破るとの事だが、貴僧あなたの御見識誠に恐れ入りました、就きまして私が済まない事が出来ました」

良「海音如来などを盗まれたと云うのだろうが、ありやア土の中に隠してあるが、あれは来年の八月には屹度きつと出るから心配するな、よいわ」

白 「私は陰陽を以つて世を渡り、未來の禍福を占つて人の志を定むる事は、私承知して居りますけれども、こればかりは気が付きませなんだ」

良 「どうでもよいわ、萩原の死骸は外に菩提所も有るだろうが、飯島の娘お露とは深い因縁がある事故、あれの墓に並べて埋めて石塔を建てゝやれ、お前も萩原に世話になつた事もあろうから施主に立つてやれ」

と云われ白翁堂は委細承知と請をして寺をたち出で、路々も何うして和尚があの事を早くも覚つたろうと不思議に思いながら帰つて来て、

白 「伴藏、貴様も萩原様には恩になつてゐるから、野辺の送りの

お供をしろ」

と跡の始末を取り片付け、萩原の死骸は谷中の新幡隨院へ葬つてしましました。伴藏は如何にもして自分の悪事を匿^{かく}そうため、今の住家^{すまい}を立退^{たちの}かんとは思いましたけれども、慌^{あわ}てた事をしたら人の疑いがかゝろう、あゝもしようか、こうもしようかとやつとの事で一策を案^{いだ}じ出し、自分から近所の人に、萩原様の所へ幽靈の来るのを己^{たし}が慥^{いたし}かに見たが、幽靈が二人でボン／＼をして通り、一人は島田^{しまだまげ}鬚^{しんぞ}の新造で、一人は年増で牡丹の花の付いた灯籠を提^さげていた、あれを見る者は三日を待たず死ぬから、己は怖くて彼處にいられないなぞと云^{いいふら}触^ふすと、聞く人々は尾に尾を付けて、萩原様の所へは幽靈が百人来るとか、根津の清水では女の泣声が

十七

伴藏は悪事の露顕を恐れ、女房おみねと栗橋へ引越し、幽靈から貰つた百両あれば先ずしめたと、懇意の馬方久藏ひつこを頼み、此の頃は諸式が安いから二十両で立派な家うちを買取り、五十両を資も

とで おろ あらものみせ
 本に下し 荒物見世を開きまして、関口屋伴藏と呼び、初めの程
 は夫婦とも一生懸命働いて、安く仕込んで安く売りましたから、
 急ち世間の評判を取り、関口屋の代物は値が安くて品がいゝと、
 方々から押掛けて買いに来るほどゆえ、大いに繁昌を極めま
 した。凡夫盛んに神祟りなし、人盛んなる時は天に勝つ、人定ま
 つて天人に勝つとは古人の金言、宜なるかな、素より水泡銭の事
 なれば身につく道理のあるべき訳はなく、翌年の四月頃から伴藏
 は以前の事も忘れ少し贅沢がしたくなり、紹の小紋の羽織が
 着たいとか、帯は献上博多を締めたいとか、雪駄が穿いて見たい
 とか云い出して、一日同宿の笹屋という料理屋へ上り込み、一盃
 やつている側に酌取女に出た別嬪は、年は二十七位だが、

どうしても廿三四位としか見えないという頗る代物を見るよりも、伴藏は心を動かし、二階を下りて此の家の亭主に其の女の身の上を聞けば、さる頃夫婦の旅人が此の家へ泊りしが、亭主は元は侍で、如何なる事が足の疵の痛み烈しく立つ事ならず、一日々々との長逗留、遂に旅用をも遣いはたし、そういうつ迄も宿屋の飯を食つてもいられぬ事なりとて、夫婦には土手下へ世帯を持たせ、女房は此方へ手伝い働き女として置いて、僅かな給金で亭主を見継いでいるとかの話を聞いて、伴藏は金さえ有れば何うにもなると、其の日は幾許か金を与え、綺麗に家に帰りしが、これよりせつゝと足近く笹屋に通い、金びら切つて口説きつけ、遂に彼のかの女と怪しい中になりました。一体此の女は飯島平

左衛門の妾お國にて、宮野邊源次郎と不義を働き、^{あまつ}剩さえ飯島を手に掛け、金銀衣類を奪い取り、江戸を立退き、越後の村上へ逃出しましたが、親元絶家して寄るべなきまゝ、段々と奥州路を経へ回りて下街道へ出て参り此の栗橋にて煩い付き、宿屋の亭主の情を受けて今の始末、素より悪性のお國ゆえ忽ち思う様、此の人は一代身上俄分限に相違なし、此の人の云う事を聞いたらなら悪い事もあるまいと得心したる故、伴藏は四十を越して此のような若い綺麗な別嬪にもたつかれた事なれば、有頂天界に飛上り、これより毎日こゝにばかり通い来て寝泊りを致しておりますと、伴藏の女房おみねは込上る格氣の角も奉公人の手前めんじ我慢はしていましたが、或日のこと馬を牽いて店先を通

る馬子を見付け、

みね「おや久藏さん、素通りかえ、余りひどいね」
あんま

久「ヤアお内儀かみさま、大きに無沙汰を致しやした、ちよつくり来るのだアけど今ア荷とい積んで幸手まで急いでゆくだから、寄つてさつている訳にはいきましねえが、此間こないだは小遣こづかいを下さつて有難うござえます」

みね「まアいゝじやアないか、お前は宅うちの親類ちやんるいじやないか、一寸ちよつお寄りよ、一ぱい上げたいから」

久「そうですかえ、それじやア御免ごめんなせい」

と馬を店の片端に結ゆわい付け、裏口から奥へ通り、

久「己おらア此家こちやの旦那の身寄りだというので、皆みんなに大きに可愛かわいがら

彼らア、この家の身上は去年から金持になつたから、おらも鼻が高い」

と話の中におみねは幾許か紙に包み、

みね「なんぞ上げたいが、余まり少しばかりだが小遣にでもして置いておくれよ」

久「これアどうも、毎度戴いてばかりいて済まねえよ、いつでも厄介になりつゞけだが、折角の思し召しから頂戴いたして置きますべい、おや触^{さわ}つて見た所じやアえらく金があるようだから單物^{ひとえもの}でも買うべいか、大きに有難うござります」

みね「何だよそんなにお礼を云われては却^{かえ}つて迷惑するよ、ちよいとお前に聞きたいのだが、宅^{うち}の旦那は、四月頃から笹屋へよく

お泊りなすつて、お前も一緒に行つて遊ぶそうだが、お前は何故
私に話をおしでない」

久「おれ知んねえよ」

みね「おとぼけで無いよ、ちゃんと種あがが上あがつて いるよ」

久「種さがが上あがるか下おるか己おらア知んねえものを」

みね「アレサ筐屋の女のことサ、ゆうべ宅うちの旦那うちが残らず白状し
てしまつたよ、私はお婆さんになつて嫉妬やきもちをやく訳ではないが
旦那うちの為いきを思うから云うので、あの通りな粹すつきな人だから、悉悉皆かり
と打明けて、私に話して、ゆうべは笑つてしまつたのだが、お前
が余りしらばつくれて、素通りをするから呼んだのさ、云つたツ
て宜いじやアないかえ」

久「旦那どんが云つたけえ、アレマアわれさえ云わなければ知れる氣遣えはねえ、われが心配だというもんだから、お前さまの前へ隠していたんだ、夫婦の情合だから、云つたらお前も余り心持もよくあんめえと思つたゞが、そうけえ旦那どんが云つたけえ、おれ困つたなア」

みね「旦那は私に云つて仕舞つたよ、お前と時々一緒に行くんだろう」

久「あの阿魔女あまつちよは屋敷者だとよ、亭主は源次郎さんとか云つて、足へ疵きずが出来て立つ事が出来ねえで、土手下しよたいへ世帯を持つていて、女房は笹屋へ働き女をしていて、亭主を過すこしているのを、旦那が聞いて氣の毒に思い、可愛相にと思つて、一番始め金え三分くれ

て、二度目の時二両あと後から三両それから五両、一ぺんに二十両やつた事もあつた、ありやお國さんとか云つて廿七だとか云うが、
お前さんなんぞより余程綺よつほど：ナニお前さまとは違ちがえ、屋敷まえもん
だから不意氣ぶいきだが、なかく美まいい女だよ」

みね「何かえ、あれは旦那が遊びはじめたのは何時いつだツけねえ、
ゆうべ聞いたがちよいと忘れて仕舞つた、お前知つているかえ」
久「四月の二日からかねえ」

みね「呆れるよ本当にマア四月から今まで私に打明けて話しもないで、呆れかえつた人だ、どんなに私が鎌を掛けて宅うちの人間に聞いても何だの彼かれだのとしらばつくれていて、ありがたいわ、それ
ですつかり分つた」

久「それじやア旦那は云わねえのかえ」

みね「あたりまえ当前サ、旦那が私に改まつてそんな馬鹿な事をいう奴があるものかね」

久「アレヘ工それじやアおらが困るべいじやアねえか、旦那どんが己おれにわれえ喋しゃべるなよと云うたに、困つたなア」

みね「ナニお前の名前は出さないから心配おしでないよ」

久「それじやア私の名前わしこなめえを出しちゃアいかねえよ、大きに有難うござりました」

と久藏は立帰る。おみねは込上こみあがる憤氣りんきを押おえ、夜延よなべをして伴

伴「文助ぶんすけや明けてくれ」

文「お帰り遊ばせ」

伴「店の者も早く寝てしまいな、奥ももう寝たかえ」

といいながら奥へ通る。

伴「おみね、まだ寝すか、もう夜なべはよしねえ、身体の毒だ、
大概にして置きな、今夜は一杯飲んで、そうして寝よう、何か肴さかな
は有あり合あいでいゝや」

みね「何もないわ」

伴「かくやでもこしらえて来てくんな」

みね「およしよ、お酒を宅うちで飲んだつて旨くもない、肴さかなはなし、
酌きづかをする者は私のようなお婆おばあさんだから、どうせ気に入る気遣きづかい
はない、それよりは筈屋あがへ行つてお上りよ」

伴「そりやア 笹屋は料理屋だから何んもあるが、寝酒を飲むん
だから一寸海苔ちょいとのりでも焼いて持つて来ねえな」

みね「肴はそれでも宜いとした所が、お酌が気に入らないだろう
から、 笹屋へ行つてお國さんにお酌をしてお貰いよ」

伴「氣障きざなことを云うな、お國どが何うしたんだ」

みね「おまえは何故そう隠すんだえ、隠さなくつてもいゝじやア
ないかえ、私が十九十九や廿はたちの事ならばお前の隠すも無理ではないが、
こうやつてお互おひがいにとる年だから、隠しだてをされては私が誠に
心持が悪いからお云いな」

伴「何をよう」

みね「お國さんの事をサ、美しい女だとね、年は廿七はつしちだそうだが、

ちよつと見ると廿二三にしか見えない位な美しい娘で、私も惚ほれ々ほれするくらいだから、ありやア惚れてもいゝよ」

伴「何だかさつぱり分らねえ、今日昼間馬方の久藏が来きやアしなかつたか」

みね「いゝえ来やアしないよ」

伴「おれも此の節は拠よんどろない用で時々宅うちを明けるものだから、お前めえがそう疑もつとぐのも尤もだが、そんな事を云わないでもいゝじやアねえか」

みね「そりやア男の働きだから何をしたつていゝが、お前のためだから云うのだよ、彼あの女の亭主は双刀りやんこさんで、其の亭主の為にあゝやつてているんだそうだから、亭主に知れると大変だから、

私も案じられらアね、お前は四月の二日から彼の女に係り合つて
いながら、これツばかりも私に云わないのは酷いよ、そいつてお
しまいなねえ」

伴「そう知つていぢやア本当に困るなア、あれは己が悪かつた、
面目ねえ、堪忍してくれ、おれだつてお前に何か序でがあつたら
云おうと思つていたが、改まつてさてこういう色が出来たとも云
いにくいものだから、つい黙つていた、おれも随分道楽をした人
間だから、そう欺だまされて金を奪とられるような心配はねえ大丈夫だ」
みね「そうサ初めての時三分やつて、其の次に二両、それから三
両と五両二度にやつて、二十両一ペんにやつた事があつたねえ」
伴「いろんな事を知つていやアがる、昼間久藏が来たんだろう」

みね「来やしないよ、それじやアお前こうおしな、向の女も亭主
があるのにお前に姦通くくらいだから、惚れているに違いないが、
亭主が有つちやア危険だから、貰い切つて妾にしてお前の側へ
お置きよ、そうして私は別になつて、私は関口屋の出店でござい
ますと云つて、別に家業をやつて見たいから、お前はお國さんと
二人で一緒に成つてお稼ぎよ」

伴「気障な事を云わねえがいゝ、別れるも何もねえじやアねえか、
あの女だつて双刀の妾、主があるものだから、そう何時までも
係り合つてゐる氣はねえのだが、ありやア酔つた紛れにツイ摘
食いをしたので、己がわるかつたから堪忍してくれろ、もう二
度と彼処へ往きさえしなければ宜いだろう」

みね「行つておやりよ、あの女は亭主があつてそんな事をする位だから、お前に惚れているんだからお出でよ」

伴「そんな気障な事ばかり云つて仕様がねえな……」
みね「いゝから私わたしやア別になりましようよ」

と、ぐどく云われて伴藏はグツと癪しゃくにさわり、

伴「なツてえく、これ四間間口の表けん店おもてだなを張つてゐる荒物屋の旦那たりめえだア、一人二人の色が有つたつてなんでえ、男の働きで当あ前まへだ、若えわけもんじやあるめえし、嫉妬やきもちを焼くなえ」

みね「それは誠に済みません、悪い事を申しました、四間間口の表店を張つた旦那様だから、妾狂あたりまえいをするのは当あたりまえ前まへだと、大層もない事をお云いでないよ、今では旦那だと云つて威張つてい

るが、去年まではお前はなんだい、萩原様の奉公人同様に追い使われ小さな孫店まごこだなを借りていて、萩原様から時々こづかい遣けしを戴いたり、
単物ひとえものの古いのを戴いたりして何うやら斯このうやらやつていたんじやアないか、今斯うなつたからと云つてそれを忘れて済むかえ」
伴「そんな大きな声で云わなくつてもいいじゃアねえか、店の者に聞えるといけねえやナ」

みね「云つたつていゝよ、四間間口の表店を張つている荒物屋の
旦那だから、妾狂いが当前だなんぞと云つて、先のことを忘れた
かい」

伴「喧やかましいやい、出て行きやアがれ」

みね「はい、出て行きますとも、出て行きますからお金を百両私

におくれ、これだけの身代になつたのは誰のお蔭だ、お互にこゝまでやつたのじやアないか』

伴「恵比須講の商いみたように大した事をいうな、静かにしろ」
 みね「云つたつていゝよ、本当にこれまで互に跣足はだしになつて一生懸命に働いて、萩原様の所にいる時も、私は煮焚掃除や針仕事をし、お前は使つかいはやまをして駆かけずりまわり、何うやら斯うやらやつていたが、旨い酒も飲めないというから、私が内職をして、偶には買つて飲ませたりなんどして、八年以來このかたお前のためには大層苦労をしているんだア、それを何なんだえ、荒物屋の旦那だとえ、御大層らしい、私やア今こう成つたツても、昔の事を忘れない為に、今でもこうやつて木綿物を着て夜延よなべをしている位なんだ、それに

まだ一昨年の暮だつけ、お前が鮭のせんばいでお酒を飲みてえものだというから……」

伴「静にしろ、外聞げえぶん」

がわりいや、奉公人に聞えてもいけねえ」

みね「いゝよ私やア云うよ、云いますよ、それから貧乏世帯を張つていた事だから、私も一生懸命に三晩寝みばんないで夜延をして、お酒を三合買つて、鮭のせんばいで飲ませてやつた時お前は嬉しがつて、其の時何と云つたい、持つべきものは女房だと云つて喜んだ事を忘れたかい」

伴「大きな声をするな、それだから己はもう彼処あすこへ行かないといふに」

みね「大きな声をしたつていゝよ、お前はお國さんの処ところへお出で

よ、行つてもいゝよ、お前の方で余り大きな事を云うじやアない
あんま

か

と尚々 大きな声を出すから、伴藏は
なおく

「オヤこの阿魔」

といいながら拳を上げて頭を打つ、打たれておみねは哮り立ち、
こぶし う

泣声を振り立て、

みね「何を打ちやアがるんだ、さア百両の金をおくれ、私やア出
て参りましょう、お前は此の栗橋から出た人だから身寄もあるだ
ろうが、私は江戸生れで、斯んな所へ引張られて来て、身寄親戚
がないと思つていゝ気に成つて、私が年を取つたもんだから女狂
いなんぞはじめ、今になつて見放されては喰方に困るから、こ
くいかた

れだけ金をおくれ、出て往いきますから」

伴「出て往ゆくなら出て往くがいゝが、何も貴様に百両の金を遣やる
という因縁がねいやア」

みね「大層なことをお云いでないよ、私が考え付いた事で、幽靈
から百両の金を貰つたのじやないか」

伴「こらくしづか静にしねえ」

みね「云つたつていゝよ、それから其の金で取りついて斯う成つ
たのじやアないかそればかりじやアねえ、萩原様を殺して海音如
来のお像を盗み取つて、清水の花壇の中へ埋めて置いたじやアな
いか」

伴「静にしねえ、本当に氣違きちがえだなア、人の耳へでも入つたら何ど

うする」

みね「私やア縛られて首を切られてもいゝよ、そうするとお前も其の儘まじやア置かないよ、百両おくれ、私やア別に成りましょう」
 伴「仕様が無ねえな、己が悪かつた、堪忍めえしてくれ、そんなら是迄
 お前めえと一緒になつてはいたが、おれに愛想あいそうが尽きたなら此の宅
 はすつかりとお前にやつてしまわア、と云うと、なにか己があの
 女でも一緒に連れて何處どこかへ逃げでもすると思うだろうが、段々
 様子を聞けば、あの女は何か筋の悪い女だそうちだから、もう好いいか
 加減げんに切りあげる積り、それともこの家うちを二百両にでも三百
 両にでもたゝき売つて仕舞つて、お前と一緒に連れて越後の新潟
 あたりへ身を隠し、もう一と花咲かせ巨でつかくやりてえと思うんだ

が、お前最も一度跣足^{はだし}になつて苦労をしてくれる気はねえか」

みね「私だつて無理に別れたいと云う訳でもなんでもありませんが、今に成つてお前が私を邪慳^{じやけん}にするものだから、そうは云つたものゝ、八年以來^{このかた}連添つていたものだから、お前が見捨てないと云う事なら、何処までも一緒に行こうじゃアないか」

伴「そんなら何も腹を立てる事はねえのだ、これから中直りに一杯飲んで、兩人で一緒に寝よう」

と云いながらおみねの手首を取つて引寄せる。

みね「およしよ、いやだよウ」

川柳^{せんりゆう}に「女房の角を□□□でたゝき折り」で忽ち中も直りました。それから翌日は伴藏がおみねに好きな衣類^{きもの}を買って遣る

からというので、幸手へまいり、呉服屋で反物たんものを買い、こゝの料理屋でも一杯やつて両人連れ立ち、もう帰ろうと幸手を出て土手へさしかゝると、伴藏が土手の下へ降りに掛るから、

みね「旦那、どこへ行くの」

伴「実は江戸へ仕入しあれに行つた時に、あの海音如来の金無垢きんむくのお守まもを持つて来て、此處こゝへ埋めて置いたのだから、掘出ほりだそうと思つて來たんだ」

みね「あらまアお前はそれまで隠して私に云わないのだよ、そん

なら早く人の目つまにかゝらないうちに掘つてお仕舞いよ」

伴「これは掘出して明日古河あしたこがの旦那なんに売るんだ、何だか雨がボツ／＼降つて來たようだな、向うの渡し口の所からなんだか人が二

人ばかり段々こつちの方へ来るような塩梅だから、見ていてくんねえ」

みね「誰も来やアしないよ、どこへさ」

伴「向うの方へ気を付けろ」

「という。向うは往来が三叉になつておりますて、側えは新利

根大利根の流にて、折しも空はどんよりと雨もよう、幽かに見ゆ

る田舎家の盆灯籠の火もはや消えなんとし、往来も途絶えて物

のすごく、おみねは何心なく向うの方へ目をつけている油断を

窺い、伴藏は腰に差したる胴金造りの脇差を音のせぬように引

こ抜き、物をも云わず背後から一生懸命力を入れて、おみねの肩

先目がけて切り込めば、キヤツとおみねは倒れながら伴藏の裾に

しがみ付き、

みね「それじやアお前は私を殺して、お國を女房に持つ氣だね」

伴「知れた事よ、惚れた女を女房に持つのだ、観念しろ」

と云いさま、刀を逆手に持直し、貝殻骨のあたりから乳の下へかけ、したゝかに突込んだれば、おみねは七顛八倒の苦しみをなし、おのれ其の儘にして置こうかと、又も裾へしがみつく。伴藏は乗掛つて止めを刺したから、おみねは息が絶えましたが、何うしてもしがみついた手を放しませんから、脇差にて一本々々指を切り落し、漸く刀を拭い、鞘に納め、跡をも見ず飛ぶが如くに我家に立帰り、慌しく拳をあげて門の戸を打叩き、

伴「文助、一寸こゝを明けてくれ」

文「旦那でござりますか、へいお帰り遊ばせ」

と表の戸を開く。伴藏ズツと中に入り、

伴「文助や、大変だ、今土手で五人の追剥おいはぎが出て己の胸ぐらを
掴つかまえたのを、払つて漸く逃げて來たが、おみねは土手下うちへ降り
たから、悪くすると怪我むなをしたかも知れない、何どうも案いじられる、
どうか皆みんな一緒に行つて見てくれ」

というので奉公人一同大いに驚き、手にくはんぱう半棒しんぱりぼう栓張棒しんぱりぼう
なぞ携え、伴藏を先に立て土手下へ来て見れば、無慙むざんやおみねは目
も當てられぬように切殺そらなみだされていたから、伴藏は空涙そらなみだを流し
ながら、

伴「あゝ可愛相こな事をした、今一ト足早かつたら、斯このんな非業な

死はとらせまいものを」

と嘘をつかい、人をはは走せて其の筋へ届け、御検屍もすんで家に引取り、何事もなく村方へ野辺の送りをしてしまいましたが、伴藏が殺したと気が付くものは有りません。段々日数ひかずも立つて七日目の事ゆえ、伴藏は寺参りをして帰つて来ると、召使のおますという三十一歳になる女中が俄にわかにがたくふると慄えはじめて、ウンと呻うなつて倒れ、何か諱うわこと言を云つて困ると番頭がいうから、伴藏が女の寝ている所へ来て、

伴「お前めえどんなあんべい、塩梅だ」

ます「伴藏さん貝殻骨から乳の下へ掛けてズブくつきと突とおされた時の痛かつたこと」

文「旦那様変な事を云いやす」

伴「おます、氣を慥かにしろ、風でも引いて熱でも出たのだろうから、蒲団を沢山かけて寝かしてしまえ」

と夜着を掛けるとおますは重い夜着や搔卷を一度にはね退け、蒲団の上にちよんと坐り、じいツと伴藏の顔を睨むから、

文「変な塩梅ですな」

伴「おます、確かりしろ、狐にでも憑かれたのじやアないか」

ます「伴藏さん、こんな苦しい事はありません、貝殻骨のところから乳のところまで脇差の先が出るほどまで、ズブ／＼と突かれた時の苦しさは、何とも彼とも云いようがありません」

と云われて伴藏も薄気味悪くなり、

伴「何を云うのだ、氣でも違ひはしないか」

ます「お互に斯こうして八年以來このかた貧乏世帯を張り、やツとの思いで今はこれ迄になつたのを、お前は私を殺してお國を女房めのわらわにしようと、マア余あんまり酷ひどいじやアないか」

伴「これは変な塩梅あんばいだ」

と云うものゝ、腹の内では大いに驚き、早く療治をして直したいと思う所へ、此の節幸手に江戸から来ている名人の医者があるというから、それを呼ぼうと、人を走はせて呼びに遣やりました。

伴藏は女房が死んで七日目に寺参りから帰つた其の晩より、下女のおますが訝しな譴言を云い、幽靈に頼まれて百両の金を貰い、是迄の身代に取付いたの、萩原新三郎様を殺したの、海音如來のお守を盗み出し、根津の清水の花壇の中へ埋めたなどゝ喋り立てるに、奉公人たちは何だか様子の分らぬ事ゆえ、只馬鹿な譴語をいうと思つておりますが、伴藏の腹の中では、女房のみねが己に取り付く事の出来ない所から、此の女に取付いて己の悪事を喋らせて、お上の耳に聞えさせ、おれを召捕り、お仕置にさせて怨みをはらす了簡に違ひなし、あの下女さえいなければ斯様な事もあるまいから、いつそ宿元へ下げて仕舞おうか、いや／＼待てよ、宿へ下げ、あの通りに喋られては大変だ、コリヤう

つかりした事は出来ないと思案にくれてゐる処へ、先程幸手へ使
に遣りました下男の仲助が、医者同道で帰つて来て、

男「旦那只今帰^{けえ}りやした、江戸からお出でなすつたお上手なお医
者様だそうちがやつと願いやして御一緒に来てもらいやした」

伴「これはく御苦勞さま、手前方は斯う云う商売柄店も散らか
つておりますから、先ず此方へお通り下さいまし」

と奥の間へ案内をして上座に請じ、伴藏は懇^{いんぎん}懃^{いんぎん}に両手をつか
え、

伴「初めましてお目通りを致します、私は関口屋伴藏と申します
者、今日は早速の御入で誠に御苦勞様に存じます」

医「はい／＼初めまして、何か急病人の御様子、ハヽアお熱で、

変な諧語などを云うと

と言いながら不図伴藏を見て、

「おや、これは誠に暫らく、これはどうも誠にどうも、どうなすつて伴藏さん、先ず一別以来相変らず御機嫌宜しく、どうもマニアらざるところでお目に懸りました、これは君の御新宅かえ、恐入つたねえ、併し君は斯くあるべき事だらうと、君が萩原新三郎様の所にいる時分から、あの伴藏さんおみねさんの夫婦は、どうも機転の利き方、才智の廻る所から、中々只の人ではない、今にあればえらい人になると云つていたが、十指の指さす処鑑定は違わず、実に君は大した表店を張り、立派な事におなりなすつたなア」

伴「いやこれは山本志丈さん、誠に思い掛けねえ所でお目にかかりやした」

志「実は私も人には云えねえが江戸を喰い詰め、医者もしていら
れねえから、猫の額のような家うちだが売つて、其の金子を路用とし
て日光辺しるべの知己うちを頼つて行く途中、幸手の宿屋で相宿あいやどの旅人りょじん
が熱病で悩むとて療治を頼まれ、其の脉とを取れば運よく全快した
が、実は僕が治したんじやアねえ、ひとりでに治つたんだが、運
に叶かなつて忽たちまちにあれは名人だ名医だと評ひが立ち、あつちこつち
から療治を頼まれ、実はいゝ加減にやつてはいるが、相應に薬礼
をよこすから、足を留とめていたものゝ実は己ア医者は出来ねえの
だ、尤も傷寒論もつと しようかんろんの一冊位は読んだ事は有るが、一体病人は嫌きれ

えだ、あの臭い寝床の側へ寄るのは厭だから、金さえあればツイ一杯呑む気になるようなものだから、江戸を喰い詰めて来たのだが、あの妻君さいくんはお達者かえ、イヤサおみねさんには久しく拝はいが顔ほんを得ないがお達者かえ」

伴「あれは」

と口ごもりしが、

「八日あとの晩土手下で盜賊どろぼうに切殺されましたよ、それから漸く引取つて葬式とむらいを出しました」

志「ヤレハヤこれはどうも、存外な、嘸さぞお愁しゆう傷しよう、お馴染なじみだけに猶更なおさらお察し申します、の方は誠に御貞節ない、お方であつたが、これが仏家ぶつかでいう因縁とでも申しますのか、嘸さぞまア殘念な

事でありましたろう、それでは御病人はお家内ではないね」

伴「えゝ内の女ですが、なんだか熱にうかされて妙な事を云つて困ります」

志「それじやア一寸ちよつと診みて上げて、後あとで又いろいろ昔の話をしながら緩ゆるりと一杯やろうじやアないか、知らない土地へ来て馴染の人に逢うと何だか懐かしいものだ、病人は熱なら造作ぞうさもないからねえ」

伴「文助や、先生は甘い物は召上がらねえが、お茶とお菓子と持つて来て置け、先生此方こっちへお出いでなせえ、こゝが女部屋で」

志「左様か、マア暑いから羽織を脱ごうよ」

伴「おますや、お医者様が入つしやつたからよく診みていたゞきな、

氣を確かりしていろ、変な事をいうな」

志「どう云う御様子、どんな塩梅で」

と云いながら側へ近寄ると、病人は重い搔卷^{かいまき}を反ね退けて布団の上にちやんと坐り志丈の顔をジツと見詰めている。

志「お前どう云う塩梅で、大方風がこうじて熱となつたのだろう、悪寒^{さむけ}でもするかえ」

ます「山本志丈さん、誠に久しくお目にかかりませんでした」

志「これは妙だ、僕の名を呼んだぜ」

伴「こいつは妙な諱語ばつかり云っていますよ」

志「だつて僕の名を知つているのが妙だ、フウンどういう様子だ

え」

ます「私はね、此の貝殻骨から乳の所までズブ／＼と伴藏さんに突かれた時の」

伴「これ／＼何を詰らねえ事をいうんだ」

志「宜しいよ、心配したもうな、それから何うしたえ」

ます「貴方あなたの御存じの通り、私共夫婦は萩原新三郎様の奉公人同様に追い使われ、跣足はだしになつて駆かけずり廻つていましたが、萩原様が幽靈に取付かれたものだから、幡隨院の和尚から魔除の御札を裏窓へ貼付けて置いて幽靈の這入はいれない様にした所から、伴藏さんが幽靈に百両の金を貰つて其の御札を剥はがし」

伴「何を云うんだなア」

志「宜しいよ、僕だから、これは妙だ／＼、へい、そこで」

ます「其の金から取付いて今はこれだけの身代となり、それのみならず萩原様のお首に掛けてる金無垢の海音如来の御守を盗み出し、根津の清水の花壇に埋め、あまつさ剥え萩原様を蹴殺して体よく跡をけころていてい取とり繕つくろい」

伴「何を、とんでもない事を云うのだ」

志「よろしいよ僕だから、妙だくへイそれから」

ます「そうしてお前、そんなあぶく銭ざにで是までになつたのに、お前は女狂いを始め、私を邪魔にして殺すとは余り酷あんまひどい」

伴「どうも仕様がないの、何をいうのだ」

志「よろしいよ、妙だ、心配したもうな、これは早速宿へ下げたまえ、と云うと、宿で又こんな諧謔を云うと思し召そうが、下げる

れば屹度きつと云わない、此の家うちに居るから云うのだ、僕も壯年のおり折こ
ういう病人を二度ほど先生の代だい脉みやくで手掛けた事があるが、宿
へ下げれば屹度云わないから下げべし！」

と云われて、伴藏は小氣味が悪いけれども、山本の勧めに任せ
早速に宿を呼寄せ引渡し、表へ出るやいなや正気に復かえつた様子な
れば、伴藏も安心していると今度は番頭の文助がウンと呻うなつて夜
着をかむり、寝たかと思うと起上り、幽靈に貰つた百両の金でこ
れだけの身代になり上り、といい出したれば、又宿を呼んで下げる
てしまうと、今度は小僧が呻り出したれば又宿へ下げてしまい、
奉公人残らずを帰し、あとには伴藏と志丈と二人ぎりになりまし
た。

志「伴藏さん、今度申ればおいらの番だが、妙だつたね、だが伴
 藏さん打明けて話をしてくんせえ、萩原さんが幽靈に魅られ、
 骨と一緒に死んでいたとの評判もあり、又首に掛けた大事の守り
 が掏代すりかわつていたと云うが、其の鑑定はどうも分らなかつた、尤
 も白翁堂と云う人相見の老爺おやじが少しばかり覺つて新幡隨院の和尚に話
 すと、和尚は疾とうより覺つていて、盜んだ奴どらぬが土中どちゅうへ埋め隠して
 あると云つたそつだが、今日初めて此の病人の話によれば、僕の
 鑑定では慥たしかにお前と見て取つたが、もう斯こうなつたらば隠さず云
 つてお仕舞い、そうすれば僕もお前と一つになつて事を計はからおうじ
 やないか、善惡共に相談をしようから打明け給え、それから君は
 おかみさんが邪魔になるものだから殺して置いて、盜賊どろぼうが斬きりこ

殺ころ

したというのだろう、そうでしよう／＼

といわれて伴藏最早隠し遂せる事にもいかず、

伴「実は幽靈に頼まれたと云うのも、萩原様のあゝ云う怪しい姿で死んだというのも、いろ／＼訳があつて皆私が拵えた事、というのは私が萩原様の肋あばらを蹴けつて殺して置いて、こつそりと新幡隨院の墓場へ忍び、新塚を掘起し、骸しゃり骨こつを取り出し、持帰つて萩原の床の中へ並べて置き、怪しい死しにざまに見せかけて白翁堂の老爺おやじをば一ぺい欺はめこ込み、又海音如来の御守もまんまと首尾好く盗み出し、根津の清水の花壇の中へ埋めて置き、それから己が色々と法螺らを吹いて近所の者を怖がらせ、皆あちこちへ引越ひっこしたを好いしおにして、己も亦またおみねを連れ、百両の金を掴つかんで此の土地へ引ひ

込^{つこ}んで今の身の上、ところが己^{おの}が他の女に掛け合つた所から、嘆^か
 アが憤氣^{りんき}を起し、以前の悪事をア^くと呶鳴^{どな}り立てられ仕方^どな
 く、旨^りく賺^{だま}して土手下へ連出して、己^{おの}が手に掛け殺して置いて、
 追剥^{だま}に殺されたと空涙^{うつしづめ}で人を騙^{だま}かし、弔^{とむら}いをも済^{すま}して仕舞^{すま}つた訳
 なんだ」

志「よく云つた、誠に感服^{すみやか}、大概の者ならそう打明けては云えぬ
 ものだに、己^{おの}が殺したと速^{すみやか}に云うなどは是^{これ}は惡党アヽ惡党、お前
 にそう打明けられて見れば、私はお喋りな人間だが、こればツか
 りは口外^{こうがい}はしないよ、其の代り少しこの好みがあるが何うか叶えてお
 くれ、と云うと何か君の身代^{みしろ}でも當てにするようだが、そんな訳
 ではない」

伴「あゝゝそれはいゝとも、どんな事でも聞きやしようから、どうか口外はして下さるな」

と云いながら懷中より廿五両包を取り出し、志丈の前に差置いて、
伴「少ねえが切餅きりもちをたつた一つ取つて置いてくんねえ」

志「これは云わない賃かえ薬礼ではないね、宜しい心得た、何だ
かこう金が入ると浮気になつたようだから、一杯ペイ飲みながら、緩ゆる
りと昔むかしがたり語ごがしてえのだが、こゝの家うちア陰氣だから、これから
何処かへ行つて一杯やろうじやアねえか」

伴「そいつは宜かろう、そんなら己おのらの馴染ゆきの笹屋へ行きやしよ
う」

と打連立うちつれだつて家うち立たち出だで、 笹屋へ上り込み、差向さむけいにて酒を

酌くみかわ
交し、

伴「男ばかりじやア旨くねえから、女を呼びにやろう」

とお國を呼寄せる。

國「おや旦那、御無沙汰を、よく入いらつしやつて、伺うかざりますればお内儀さんは不慮の事がございましたと、定めて御愁傷な事で、私も旦那にちよいとお目に懸りたいと思つておりましたは、内の人の傷も漸ようやく治り、近きん々のうち越後へ向けて今一度ひとたび行きたいと云つておりますから、行つた日には貴方にはお目に懸ることが出来ないと思つている所へお使つかいで、余あんまり嬉しいから飛んで来たんですよ」

伴「お國お連つれの方に何故御挨拶をしないのだ」

國 「これはあなた御免遊ばせ」

と云いながら志丈の顔を見て、

國 「おや／＼山本志丈さん、誠に暫く^{しばら}」

志 「これは妙、何うも不思議、お國さんがこゝにお出でとは計ら
ざる事で、これは妙、内々^{ないへ}御様子を聞けば、思うお方と一緒に
ら深山の奥までと云うようなる意氣事筋^{いきじことすじ}で、誠に不思議、これは
希代^{きたい}だ、妙々々」

と云われてお國はギックリ驚いたは、志丈はお國の身の上をば
精しく知つた者ゆえ、若し伴藏に喋べられてはならぬと思い、

國 「志丈さんちよつと御免あそばせ」

と次の間へ立ち。

國「旦那ちよつと入つしやい」

伴「あいよ、志丈さん、ちよいと待つてお呉れよ」

志「あゝ宜しい、緩^{ゆつ}くり話をして來たまえ、僕はさようなことに
は慣れて居るから苦しくない、お構いなく、緩くりと話をして入
つしやい」

國「旦那どう云うわけであの志丈さんを連れて來たの」

伴「あれは内に病人があつたから呼んだのよ」

國「旦那あの医者の云う事をなんでも本当にしちゃアいけません
よ、あんな嘘つきの奴はありません、あいつの云う事を本当にす
るとどんでもない間違いが出来ますよ、人の合^{あいなか}中^{つっ}を突つく酷^{ひど}
い奴ですから、今夜はあの医者を何処かへやつて、貴方^{あなた}獨りこゝに

泊つていて下さいな、そうすれば内の人を寝かして置いて、貴方の所へ来て、いろいろお話もしたい事がありますから宜うござりますか」

伴「よし〜、それじやア内の方をいゝ塩梅にして屹度來ねえよ」

國「屹度来ますから待つておいでよ」

とお國は伴藏に別れ帰り行く。

伴「やア志丈さん、誠にお待ちどう」

志「誠にどうも、アハ、あの女はもう四十に近いだろうが若いねえ、君もなか〜お腕うで^{めえ}前だね、大方君はあの婦人を喰つているのだろうが、これからはもう君と善惡を一つにしようと約束をした以上は、君のためにならねえ事は僕は云うよ、一体君はあの女

の身の上を知つて世話をするのか知らないのか」

伴「おらア知らねえが、お前さんは心安いのか」

志「あの婦人には男が附いて居る、宮野邊源次郎と云つて旗下はたもと
の次男だが、其奴そいっつが悪人で、萩原新三郎さんを恋慕こいしたった娘の親
御飯島平左衛門という旗下の奥様附づきで來た女中で、奥様が亡くな
つた所から手がついて妾と成つたが今のお國で、源次郎と不義を
はたらき、恩ある主人の飯島を斬殺きりころし、有金二百六十両に、
大小を三腰とか印籠を幾つとかを盗み取り逐ちくでん電した人殺しの盜
賊ろぼうだ、すると後から忠義の家来藤助とうすけとか孝助とか云う男が、
主人の敵かたきを討ちたいと追かけて出たそうだ、私の思うのは、あれ
は君に惚れたのではなく、源次郎が可愛いからお前の云う事を聞

いたなら、亭主のためになるだろうと心得、身を任せ、相対間男とこではないかと僕は鑑定するが、今聞けば急に越後へ立つと云い、僕をはいて君独り寝ている処へ源次郎が踏込んでゆすり掛け、二百両位の手切れは取る目算に違ちがえねえが、君は承知かえ、だから君は今夜こゝに泊つていてはいけねえから、僕と一緒に何処かへ女郎買に行つてしまい、あいつ等二人に素股すまたらを喰わせるとはどうだえ」

伴「むゝ成程、そうか、それじやアそうしよう」

と連立つれだつてこゝを立たち出で、鶴屋つるやという女郎屋へ上あがり込む。後あとへお國と源次郎が笹屋へ来て様子を聞けば、先刻帰さつきつたと云うことには二人は萎しおれて立帰り、

源 「お國もうこうなれば仕方がないから、明日は己が関口屋へ掛
合ゆに行ゆき、若もに向むかうでしらをきつた其の時は」

國 「私が行つて喋りつけ口を明かさずたんまりとゆすつてやろう」
と其の晩は寝ねてしましました。翌よくちよう朝あさになり伴藏は志丈を連
れて我家わがやへ帰り、種いろく々ゆうべ昨夜のよけの惚氣のろけなど云つている店みせ前さきへ、

源 「お頼ん申すく」

伴 「商人あきんど」の店先へお頼ん申すと云うのは訝おかしいが、誰だろう

志 「大方ゆうべ話した源次郎が来たのかも知れねえ」

伴 「そんならお前めえそつち其方そそへ隠れていてくれ」

志 「弥々いよく難かしくなつたら飛出ひっこそうか」

伴 「いゝから引込ひっこんでいなよ……へいゝ、少々宅うちに取とりこみ込こみが有

りまして店を閉めて居りますが、何か御用ならば店を明けてから
願いとうございます」

源「いや買物ではござらん、御亭主に少々御面談いたしたく参つ
たのだ、一寸明けてください」

伴「左様でござりますか、先ずお上り」

源「早朝より罷り出でまして御迷惑、貴方が御主人か」

伴「へい、関口屋伴藏は私でございます、こゝは店先どうぞ奥へ
お通りくださいまし」

源「然らば御免を蒙る」

と 蟬色鞆茶柄の刀を右の手に下げた儘に、亭主に構わぬず
つと通り上座に座す。

伴「どなた様でござりますか」

源「これは始めてお目に懸りました、手前は土手下に世帯を持つ
ている宮野邊源次郎と申す粗忽の浪人、家内國事、 笹屋方にて 働は
たらきおんな 女わづかをなし、僅な給金にてようく其の日を送りいる処、且
那より深く御聟廻そくつうを戴くよし、毎度國より承わりおりますれど、
何分足痛そくつうにて歩行も成り兼ねますれば、存じながら御無沙汰、
重々御無礼をいたした」

伴「これはお初にお目通りをいたしました、伴藏と申す不調法も
の幾久しく御懇意を願います、お前様の 塩梅あんばいの悪いと云う事は
聞いていましたが、よくマア御全快、私もお國さんを聟廻わづちにする
というものゝ、聟廻の引倒して何の役にも立ちません、旦那の御ごなん

新造しんぞうがねえ、どうも恐れ入つた、勿体もつていねえ、馬士まごや私のようなものゝ機嫌氣きげいづまを取りなさるかと思えば氣の毒だ、それがために失礼も度たびく々致しやした」

源「どう致しまして、伴藏さんちと折入つて願いたい事がありますが、私わたくしども共夫婦は最早旅費りゆひを遣つかいなくし、殊ことには病中の入費藥礼や何やかやで全く財布さいふの底を払はたき、漸ようやく全快しましたれば、越後路へ出立したくも如何いかにも旅費が乏しく、何うしたら宜かるうと思案の側から、女房めいぼうが関口屋の旦那は御親切のお方よゆえ、泣附いてお話をしたらお見繼みつぎくださる事もあろうとの勧めに任せ参りましたが、どうか路金ろきんを少々拝借ほあくが出来ますれば有り難う存じます」

伴「これはどうも、そう貴方のように手を下げて頼まれては面白
がありませんが」

と中は幾許いくらかしら紙に包んで源次郎の前にさし置き、

伴「ほんの草鞋錢わらじせんでございますが、お請取りうけと下せえ」

と云われて源次郎は取上げて見れば金千疋びき。

源「これは二両二分、イヤサ御主人、二両二分で越後まで足弱あしよわ
を連れて行かれると思いなさるか、御親切序ついでにもそつとお恵み
が願いたい」

伴「千疋では少ないと仰しやるなら、幾許いくら上げたら宜いのでござ
います」

源「どうか百金お恵みを願いたい」

伴「一本え、冗談言つちやアいけねえ、薪まきかなんぞじやアあるめえし、一本の二本のと転がつちやアいねえよ、旦那え、こういう事こたア一体此方こちで上げる心持次第しどいのもので、幾許いくらかくらと限られるものじやアねえと思いやす、百両くれると云われちやア上げられねえ、又道中もしようで限きりのないもの、千両も持つて出て足りず内うちへ取りによこす者もあり、四百の錢せにで伊勢参宮いせさんぐうをする者もあり、二分の金を持つて金毘羅こんpirā参まいりをしたと云う話もあるから、旅はどうとも仕様によるものだから、そんな事を云つたつて出来はしません、誠に商人あきんどなぞは遊んだ金は無いもので、表おもて店だなを立派に張つて居ても内ないく々は一両の錢に困る事もあるものだ、百両くれると云つても、そんなに私はお前わつちさんにお恵みをする縁めえが

ねえ」

源「國が別段御贔屓になつてゐるから、兎やかく面倒云わず、錢

別として百金貰おうじやアねえか、何も云わずにサ」

伴「お前さんめえはおつう訝おかしな事を云わつしやる、何かお國さんと
私と姦わつちく通ついてでもいるというのか」

源「おゝサ姦夫まおとこの廉かどで手切てぎれの百両を取りに來たんだ」

伴「ムヽ私が不義わづちをしたが何うした」

源「黙れ、やい不義をしたとはなんだ、捨て置き難がたい奴だ」

と云いながら刀を側へ引寄せ、親指にて鯉こい口ぐちをツツリと切り、
「此の間から何かと胡散うさんの事もあつたれど、堪こらえくて是迄穩便おんび

沙汰んぎたに致し置き、昨晩それとなく國を責めた所、國の申すには、

実は済まない事だが貧に迫つて止むを得ずあの人人に身を任せたと申したから、其の場において手打にしようとは思つたれども、斯う云う身の上だから勘弁いたし、事穩かに話をしたに、手前の口から不義したと口外されでは捨置きがてえ、表向きに致さん」

と哮り立つて呶鳴ると、

伴

「静

におしなせえ、隣はないが名主のない村じやアないよ、お

前

さんが

そう哮り立つて鯉口を切り、私の鬢たを打切る剣幕を恐

れて、ハイさようならとお金を出すような人間と思うのは間違えだ、私なんぞは首が三ツあつても足りねえ身体だ、十一の時から狂い出して、脱け参りから江戸へ流れ、悪いといふ悪い事は二三の水出し、遣らずの最中、野天丁半の鼻ツ張り、ヤアの賭場

まで遂おつて來たのだ、今は脇牌ひあかぎれを白足袋しろたびで隠し、なまぞらをつかつているものゝ、悪い事はお前より上だよ、それに又姦夫々々というが、あの女は飯島平左衛門様の妾で、それとお前がくツついて殿様を殺し、大小や有金ありがねを引攫ひっさらい高飛たかとびをしたのだから、云わばお前も盗みもの、それにお國も己なんぞに惚れたはれたのじやなく、お前が可愛いばかりで、病氣の薬やく代だいにでもする積りで此方に持ち掛けたのを幸いに、己もそうとは知りながら、ツイ男のいじきたな、手を出したのは此方の過あやまりだから、何も云わずに千疋せんぱを出し、別段餞はなむけ別にしようと思い、これ此の通り廿五両をやろうと思つてゐる處、一本よこせと云われちやア、どうせ細ほそつた首だから、素首そつくびが飛んでも一文もやれねえ、それにお前よ

く聞きねえ、江戸近のこんな所にまごくしていると危ねえぜ、孝助とかゞ主人の敵だと云つてお前を狙つてはいるから、お前の首が先へ飛ぶよ、冗談じやアねえ」

と云われて源次郎は途胸とむねを突いて大いに驚き、

源「さような御苦労人とも知らず、只の堅氣かたぎの旦那と心得、威おどして金を取ろうとしたのは誠に恐縮の至り、然らば相済みませんが、これを拝借願います」

伴「早く行きなせえ、危険けんのんだよ」

源「さようならお暇いとま申します」

伴「跡をしめて行つてくんna」

志丈は戸棚より潜もぐり出し、

志「旨かつたなア、感服だ、實に感服、君の二三の水出し、やらずの最中もなかとは感服、あゝ何うもそこが悪党、あゝ悪党」

これより伴藏は志丈と二人連れ立つて江戸へ参り、根津の清水の花壇より海音如来の像を掘出す処から、悪事露顕の一埒らつはこの次までお預りに致しましょう。

十九

引続きまする怪談牡丹灯籠のお話は、飯島平左衛門の家来孝助は、主人の仇なる宮野邊源次郎お國の両人が、越後の村上へ逃げ去りましたのことゆえ、跡を追つて村上へまいり、諸方を詮議

致しましたが、とんと両人の行方が分りませんで、又我が母おりゑと申す者は、内藤紀伊守ないとうきいのかみの家来にて、澤田右衛門さわだうゑもんの妹にて、十八年以前に別れたが、今も無事でいられる事か、一目お目に懸りたい事と、段々御城中の様子を聞き、あわせまする処、澤田右衛門夫婦は疾とくに相果て、今は養子の代に相成つて居る事ゆえ母の行方さえどんと分らず、止むを得ず此處こゝに十日ばかり、彼処あそこに五日逗留いたし、彼方あちこち此方と心当りの処ところを尋ね、深く踏込んで探つて見ましたけれども更に分らず、空むなしく其の年も果て、翌年に相成つて孝助は越後路から信濃路へかけ、美濃路へかゝり探しましたが一向に分らず、早や主人の年回ねんかいにも当る事ゆえ、一度江戸へ立帰らんと思い立ち、日数ひかずを経て、八月三日江戸表ちやくへ着いたし、先ま

ず谷中の三崎村なる新幡隨院へ参り、主人の墓へ香花を手向け水を上げ、墓原の前に両手を突きまして、

孝「旦那様私は身不肖にして、未だ仇たるお國源次郎にり逢わず、未だ本懐は遂げませんが、丁度旦那様の一周年忌の御年回に当りまする事ゆえ、此の度江戸表へ立帰り、御法事御供養をいたしました上、早速又敵の行方を捜しに参りましよう、此の度は方角を違え、是非とも穿鑿を遂げまする心得、何卒草葉の蔭からお守りくださつて、一時も早く仇の行方の知れまするようにお守り下されまし」

と生きたる主人に物云う如く恭しく拝を遂げましてから、新幡隨院の玄関に掛りまして、

「お頼み申します／＼」

取次「どウれ、はア何方どちらからお出いでだな」

孝「手前は元牛込の飯島平左衛門の家来孝助と申す者でございま
すが、此の度主人の年回を致したき心得で墓参りを致しましたが、
方丈様御在寺ございじなればお目通りを願いとう存じます」

取「さようですか、暫くしばらくお控えなさい」

とはから奥へ取次ぎますと、此方こちらへお通し申せという事ゆえ、
孝助は案内に連れ奥へ通りますと、良石和尚は年五十五歳、
道心堅固の智識にて大悟徹底致し、寂寞じやくまくと坐蒲団の上に坐つ
ておりますが、道力どうりょく自然に表に現われ、孝助は頭がひとり
でに下がるような事で、

孝助「これは方丈様には初めてお目にかかります、手前事は相川
忌の年回に当る事ゆえ、一度江戸表へ立帰りましたが、爰に金子
五両ござりまするが、これにて宜しく御法事御供養を願いとう存
じます」

良「はい、初めまして、まアこつちへ来なさい、これはまア感心
な事で…コレ茶を進ぜい：お前さんが飯島の御家来孝助殿か、立
派なお人でよい心懸け、長旅を致した身の上なれば定めて沢山の
施主せしゅもあるまい、一人か二人位の事であろうから、内の坊主こども
に云い付けて何か精進物こしらを拵えさせ、成るたけ金のいらんように、
手は掛るが皆此方こちらでやつて置くが、一ヶ寺じの住職を頼んで置きま

すが、お前ナア余り早く来ると此方で困るから、昼飯ひるはんでも喰つてからそろそろ出掛け、夕飯ゆうはんは此方で喰う氣で来なさい、そしてお前は是から水道端の方へ行きなさろうが、お前を待つている人がたんとある、又お前は悦び事か何か目出度めでたい事があるから早う行つて顔を見せてやんなさい」

孝「へい、私は水道端へ参りますが、貴僧あなたはどうしてそれを御存じ、不思議な事でござります」

と云いながら、

「左様ならば明日飯あしたを仕舞いまして又出ますから、何分宜しくお願ひ申します、御機嫌よろしゅう」

と寺を出ましたが、心の内に思うよう、何うも不思議な和尚様

だ、何うして私が水道端へ行く事を知つてゐるだらうか、本当に
占うらないしゃ者 のような人だと云いながら、水道端なる相川新五兵衛方
へ参りましたが、孝助は養子に成つて間もなく旅へ出立し、一年

ぶりにて立帰りました事ゆえ、少しほは遠慮いたし、台所口から、

孝「御免下さいまし、只今帰りましたよ、これ／＼善藏どん／＼

善「なんだよ、掃除屋が来たのかえ」

孝「ナニ私だよ」

善「おやこれはどうも、誠に失礼を申上げました、いつも今時分
掃除屋が参りまするものですから、粗相を申しましたが、よくマ
ア早くお帰りになりました、旦那様々々孝助様がお帰りになりま
した」

相「なに孝助殿が帰られたとか、何処どこにお出いでになる」

善「へい、お台所にいらつしやいます」

相「どれく、これはママア、何んで台所などから来るのだ、そう云えれば水は汲んで廻すものを、善藏コレ善藏何をぐるく廻つて居おるのだ、コレ婆ばア孝助ぱどのがお帰りだよ」

婆「若旦那とつさまがお帰りでござりますか、これはママア嘸さざお疲れでござりますだらう、先ず御機嫌宜しゆう」

孝「お父おとう様にも御機嫌宜しゆう、私も都度わたくしつど日々書面を差上げたき心得ではござりますが、何分旅先の事ゆえ思うようにはお便たよりも致し難がたく、お父様は何うなされたかと日々お案じ申しまするのみでございましたが、先ずはお健すこやかなる御おんかお顔おほを拝しまして誠

に大悦たいえつに存じまする」

相「誠にお前も日出たく御帰宅なされ、新五兵衛至極満足いたしました、はい実にねえ鳥からすの鳴かぬ日はあるがと云う譬たとえの通りで、お前のことは少しも忘れたことはない、雪の降る日は今日あたりはどんな山を越すか、風の吹く日はどんな野原を通るかと、雨につけ風につけお前の事ばかり少しも忘れた事はござらん、ところへ思いがけなくお帰りになり、誠に喜ばしく思いまする、娘もお前のことばかり案じ暮らし、お前の立つた当座は只ただ泣いてばかりおりましたから私がそんなにくよくわざらして煩わずらいでもしてはいかないから、気を取り直せよとい聞かせて置きましたが、お前もマア健かでお早くお帰りだ」

孝 わたくし「私は今日江戸へ着き、すぐに谷中の幡隨院へ参詣をいたして来ましたが、明日は丁度主人の一一周忌の年回にあたりまするゆえ、法事供養をいたしたく立帰りました」

相「そうか、如何にも明日は飯島様の年回に当るからと思つたが、お前がお留守だから私でも代参に行こうかと話をしていたのだこれ婆ア、こゝへ来な、孝助様がお帰りになつた」

婆「あら若旦那様お帰り遊ばしませ、御機嫌様よろしゆう、貴方あなたがお立ちになつてからというものは、毎日お噂ばかり致しておりますが、少しもお寝やつれもなく、お色は少しお黒くおなり遊ばしましたが、相変らずよくまアねえ」

相「婆ア、あれを連れて来なよ」

婆「でも只今よく寝んねしていらツしやいますから、おめんめが
覚めてから、お笑い顔を御覧に入れる方が宜しゆうございましょ
う」

相「ウンそうだ、初めて逢うのに無理にめんめを覚さして泣顔で
はいかんから、だが大概にしてこゝへ連れて抱いて來い」

娘お徳は次の間に乳児ちのみごを抱いて居りましたが、孝助の帰るを
聞き、飛立つばかり、嬉し涙を拭いながら出て来て、

徳「旦那様御機嫌様よろしゆう、よくマアお早くお帰り遊ばしま
した、毎日々々貴方のお噂ばかり致しておりますが、お寝れも
有りませんでお嬉しゆう存じます」

孝「はい、お前も達者で目出たい、私が留守中はお父様の事何か

と世話に成りました、旅先の事ゆえ都度々々便りも出来ず、どうなされたかと毎日案じるのみであつたが、誠に皆の達者な顔を見るというは此の様な嬉しいことはない」

徳「私は昨晚旦那様の御出立になる処を夢に見ましたが、よく人が旅立たびだちの夢を見ると其の人にお目にかかる事が出来ると申しますから、お近いうち旦那様にお目にかかるかと楽しんで居りましたが、今日お帰りとは思いませんでした」

相「おれも同じような夢を見たよ、婆アや抱いてお出で、最もうおきたろう」

婆々は奥より乳児ちのみごを抱いて参る。

相「孝助殿これを御覧、いゝ児こだねえ」

孝「どちらのお子様で」

相「ナニサお前の子だアね」

孝「御冗談ばかり云つていらっしゃいます、私は昨年の八月旅へ出ましたもので、子供なぞはございません」

相「只たつた一ぺんでも子供は出来ますよ、お前は娘と一つ寝をしたろう、だから只一度でも子は出来ます、只一度で子供が出来るといふのは余程縁の深い訳で、娘も初はじめのうちはくよくよつぱどしてゐるから、私が懷姪をしてゐるからそれではいかん、身体に障さわるからよくせんが宜しいと云つてゐるうちに産み落したから、私が名付け親で、お前の孝の字を貰つて孝太郎こうたろうと付けてやりましたよ、マアよく似ておる事を、御覧よ」

孝「へい誠に不思議な事で、主人平左衛門様が遺言に、其の方養子となりて、若し子供もが出来たなら、男女に拘らなんによらず其の子を以て家督と致し家の再興を頼むと御遺言書にありましたが、事によると殿様の生れがわ変りかも知れません」

相「おゝ至極左様かも知れん、娘も子供が出来てからねえ、嬉しきれにお父様私は旦那様の事はお案じ申しますが、此の子が出来ましてから誠によく旦那様に似ておりますから、少しほ紛れて、
旦那様と一つ所にあるように思われますというたから、私が又余り酷く抱締めて、坊の腕でも折るといけないなんぞと、馬鹿を云つてゐる位な事で、善藏や」

善「へい／＼」

相 「善藏や」

善 「参つています、何でござります」

相 「何だ、お前も板橋まで若旦那を送つて行つたツけな」

善 「へい参りました、これは若旦那様誠に御機嫌よろしゅう、あの折は実にお別れが惜しくて、泣きながら戻つて参りましたが、よくマアお健かでいらつしやいます」

孝 「あの折は大きにお世話様であつたのう」

相 「それは兎も角も肝腎の仇の手掛けりが知れましたか」

孝 「まだ仇には廻り逢いませんが、主人の法事をしたく一先ず江

戸表へ立帰りましたが、法事を致しまして直に又出立致します」

相 「フウ成程、明日法事に行くのだねえ」

孝「左ようでござります、お父様と私と参りますする積りでござります、それに良石和尚の智識なる事は予て聞きましたが、応験解道窮りなく、百年先の事を見抜くという程だと承わつておりますが、今日和尚の云う言葉に其の方は水道端へ参るだろう、参る時は必ず待つてある者があり、且慶び事があると申しましたが、私の考えは、斯か子供の出来た事まで良石和尚は知つておるに違ひ有りません」

相「はてねえ、そんな所まで見抜きましたかえ、智識なぞという者は、ふかりようけんち 跌跏量見智ゆうけんち で、あの和尚は谷中の何とか云う智識の弟子と成り、禅学を打破つたと云う事を承わりおるが、えらいものだねえ、善藏や、大急ぎで水道町の花屋へ行つて、おめでたいのだか

ら、何かお頭付かしらつきの魚を三品ばかりに、それからよいお菓子を少し取つてくるように、道中には余り旨いお菓子はないから、それから鮭ますしも道中では良いのは食べられないから、鮭も少し取つてくる。よう、それから孝助殿は酒はあがらんから五合ばかりにして、味淋みりんのごく良いのを飲むのだから二合ばかり、それから蕎麦そばも道中にはあるが、醤油しょうゆが悪いから良い蕎麦の御膳の蒸籠せいろうを取つて参れ、それからお汁粉も誂あつらえてまいれ』

と種々な物を取寄せ、其の晩はめでたく祝しまして床に就きましたが、其の夜は話も尽きやらず、長き夜も忽ち明ける事になりましたが、翌日刻限を計り、孝助は新五兵衛と同道にて水道端を立出でり、丹坂から小石川にかかり、白山から団子坂だんござかを下りて谷切支丹坂きりしたんざかから

中の新幡隨院へ参り、玄関へかゝると、お寺には疾うより孝助の来るのを待つていて、

良「施主が遅くつて誠に困るなア、坊主は皆本堂に詰懸けているから、さア～早く」

と急き立てられ、急ぎ本堂へ直りますると、かれこれ坊主の四五十人も押並び、いと懇なる法事供養をいたし、施餓鬼をいたしまする内に、もはや日は西山に傾く事になりましたゆえ、坊様達には馳走なぞして帰してしまい、あとぼほ後で又孝助、新五兵衛、

良石和尚の三人へは別に膳がなおり、和尚の居間で一口飲むことになりました。

相「方丈様には初めてお目にかかります、わたくし私は相川新五兵衛と申

す粗忽な者でござります、今日又御懇な法事供養を成しくだされ、仏も嘸かし草葉の蔭から満足な事でございましょう」

良「はいお前は孝助殿の舅御かえ、初めまして、孝助殿は器量と云い人柄と云い立派な正しい人じや、中々正直な人間で余程怜憐じやが、お前はそゝつかしそうな人じや」

相「方丈様はよく御存じ、氣味のわるいようなお方だ」

良「就いては、孝助殿は旅へ行かれる事を承わつたが、未だ急には立ちはせまいのう、私が少し思う事があるから、明日昼飯を喰つて、それから八ツ前後に神田の旅籠町へ行きなさい、其処に白翁堂勇齋という人相を見る親爺がいるが、今年はもう七十だが達者な老人でなア、人相は余程名人だよ、是れに頼めばお前の望

みの事は分ろうから往つて見なさい」

孝「はい、有り難う存じます、神田の旅籠町でござりますか、畏
りました」

良「お前旅へ行くなれば私が餞別を進ぜよう、お前が折角呉れた
布施は此方こちらへ貰つて置くが、又私が五両餞別に進ぜよう、それか
ら此の線香は外から貰つてあるから一箱進ぜよう仏壇へ線香や花
の絶えんように上げて置きなさい、是れだけは私が志じや」
相「方丈様恐れ入りまする、何うも御出家様からお線香なぞ戴い
ては誠にあべこべな事で」

良「そんな事を云わずに取つて置きなさい」
孝「誠に有り難う存じます」

良「孝助殿氣の毒だが、お前はどうも危い身の上でナア、剣の上を渡るようなれども、それを恐れて後へ退あとさがるような事ではまさかの時の役には立たん、何なんでも進むより外はない、進むに利あり退くに利あらずと云うところだから、何でも憶してはならん、ずつと精神を凝こらして、仮令向うに鉄門があろうとも、それを突切つっさきつて通り越す心がなければなりませんぞ」

孝「有難うござりまする」

良「お舅御さん、これはねえ精進物だが、一体内こしらで拵そなえると云うたは嘘だが、仕出し屋へ頼んだのじや、甘うもうもあるまいが此の重箱へ詰めて置いたから、二重とも土産に持つて帰り、内の奉公人にでも喰わしてやつてください」

相「これは又お土産まで戴き、実に何ともお礼の申そうようはございません」

良「孝助殿、お前帰りがけに屹度剣難きつとが見えるが、どうも遁れ難のがいから其の積りで行きなさい」

相「誰に剣難がございますと」

良「孝助殿はどうも遁れ難い剣難じや、なに軽くて輕傷うすで、それで済めば宜しいが、何うも深傷ふかでじやろう、間が悪いと斬り殺されるという訳じや、どうもこれは遁れられん因縁じや」

相「私は最早五十五歳になりますから、どう成つても宜しいが、貴僧孝助は大事な身の上、殊ことに大事を抱えて居りまする故、どうか一つあなたお助け下さいませんか」

良「お助け申すと云つても、これはどうも助けるわけにはいかん
なア、因縁じやから何うしても遁るゝ事はない」

相手前だけ^{てまい}帰りましようか」

良「そんな弱い事では何うもこうもならんわえ、武士の一大事な
ものは剣術であろう、其の剣術の極意といふものには、頭の上へ
晃めくばがねがあつても、電光^{いなづま}の如く斬込んで来た時は何うし
て之^{これ}を受けるという事は知つてゐるだろう、仏説^{ぶつせつ}にも利劍頭面^{りけんずめん}
に触るゝ時如何^{いかん}といふ事があつて其の時が大切の事じや、其の位
な心得はあるだろう、仮令火^{たとえ}の中でも水の中でも突切つて行きな
さい、其の代りこれを突切れば後は誠に楽になるから、さつく

と行きなさい、其のような事で氣怯きおくれがするような事ではいかん、ズツ／＼と突切つて行くようでなければいかん、それを恐れるような事ではなりませんぞ、火に入つて焼けず水に入つて溺おぼれず、精神を極きよめて進んで行きなさい」

相「さようなれば此のお重箱は置いて参りましょう」

良「いや折角だからマア持つて行きなさい」

相「何方へか遁路にげみちはございませんか」

良「そんな事を云わズン／＼と行きなさい」

相「さようならば提灯ちょうちんを拝借して参りとうございます」

良「提灯を持たん方が却て宜しい」

と云われて相川は意地の悪い和尚だと呴つぶきながら、挨拶もそわ

＼孝助と共に幡隨院の門を立たち出だきました。

二十

孝助は新幡隨院にて主人の法事を仕舞い、其の帰り道に遁のがれ難き剣難あり、浅傷あさでか深傷ふかでか、運がわるければ斬り殺される程の剣難ありと、新幡隨院の良石和尚という名僧智識の教えに相川新五兵衛も大いに驚き、孝助はまだ漸ようやく廿二歳、殊ことに可愛いゝ娘の養子といい、御おしゆう主かたきの敵を打つまでは大事な身の上と、種いろく々心配をしながら打ち連れ立ちて帰る。孝助は仮令たとえいか如何なる災わざわいがあつても、それを恐れて一歩でも退しりぞくようでは大事を仕遂げげる事は出来

ぬと思い、刀に反^{そり}を打ち、目釘を湿し、鯉口^{こいぐち}を切り、用心堅固に身を固め、四方に心を配りて参り、相川は重箱を提げて、孝助殿氣を付けて行けと云いながら参りますると、向うより薄だゝみを押分けて、血刀^{ちがたな}を提げ飛出して、物をも云わず孝助に斬り掛けました。此の者は栗橋無宿の伴藏にて、栗橋の世帯を代物付にて売払い、多分の金子^{かね}をもつて山本志丈と二人にて江戸へ立退き、神田佐久間町の医師何某^{なにがし}は志丈の懇意ですから、二人はこゝに身を寄せて二三日逗留し、八月三日の夜二人は更けるを待ちまして忍び來り、根津の清水に埋めて置いた金無垢の海音如来の尊^そ像^{んぞう}を掘出し、伴藏は手早く懷中へ入れましたが、伴藏の思うには、我が悪事を知つたは志丈ばかり、此の儘^{まゝ}に生け置かば後の恐

れど、伴藏は差したる刀抜くより早く飛びかゝつて、出し抜けに力に任して志丈に斬り付けますれば、アツと倒れる所を乗^のし掛り、一刀逆手^{さかて}に持直し、肋^{あばら}へ突込みこじり廻せば、山本志丈は其の儘にウンと云つて身を顫^{ふる}わせて、忽ち息は絶えましたが、此の志丈も伴藏に^{くみ}与し、悪事をした天罰のがれ難く斯^かる非業を遂げました、死骸を見て伴藏は後^{あと}へきがり、逃げ出さんとする所、御用と声掛け、八方より取巻かれたに、伴藏も慌てふためき必死となり、捕りかた方^{あわ}へ手向いなし、死物狂いに斬り廻り、漸^{ようや}く一方を切抜けて薄だゝみへ飛込んで、往来の広い所へ飛出す出合がしら、伴藏は眼も眩み、是れも同じ捕方^こと思いましたゆえ、ふいに孝助に斬掛けましたが、大概の者なれば真^{まつぶた}一つにもなるべき所なれども、流^さ

石は飯島平左衛門の仕込で真影流に達した腕前、殊に用意をした事ゆえ、それと見るより孝助は一歩退きしが、拔合す間もなき事ゆえ、刀の鎧元にてパチリと受流し、身を引く途端に伴藏がズルリと前へのめる所を、腕を取つて逆に捻倒し。

孝「やい／＼曲者何と致す」

曲「へい真平御免下さえまし」

相「そら出たかえ、孝助怪我は無いか

孝「へい怪我はございません、こりや狼藉者め何等の遺恨で我に斬付けたか、次第を申せ」

曲「へい／＼全く人違いでござえやす」

と小声にて、

「今この先で友達と間違まちがひいをした所が、皆みんなが徒党みやげをして、大勢おおぜいで私わたくしちころを打殺うち殺すと云つて追掛けたものだから、一生懸命こゝに此処こゝまでは逃げて來たが、目が眩まぶんでいますから、殿様どのさまとも心付きませんで、とんだ粗相そじょうを致しました、何どううかお見逃しを願います、其奴そのやつらに見付けられると殺されますから、早くお逃しなすつて下されませ」

孝「全くそれに違ちがいないか」

曲「へい、全く違ちがえござえやせん」

相「あゝ驚いた、これ人違いにも事によるぞ、斬きつてしまつてから人違まちがひいで済むか、べらぼうめ、實に驚いた、良石和尚りょうせきこうそうのお告げは不思議ふしきぎだなアおや今の騒ぎで重箱どこを何處どこかへ落してしまつた」と四辺あたりを見みしている所へ、依田豊前守よだぶぜんのかみの組下いしこばんさにて石子伴いしこばんさ

作、金谷藤太郎かなやとうたろう という両人の御用ごようき聞きが駆けて来て、孝助に向い懇いんぎん懃いんに、

捕「へい申し殿様、誠に有難う存じます、此の者はお尋ね者にて、旧惡のある重罪な奴でござります、わたくしども私は彼処あすこに待受けていまして、つい取逃とらはしがそうとした処を、旦那様のお蔭で漸ようやくお取押とらはしえなされ、有難うございます、どうかお引渡しを願いとう存じます」

相「そうかえ、あれは賊かい」

捕「大盜賊おおどろぼうでござります」

孝「お父様とうさま呆れた奴でございます、此の不埒者め」

相「なんだ、人違たがいだなぞと嘘うそをついて、嘘うそをつく者は盜賊どろぼうの

始りナニ疾うに盜賊にもう成つてゐるのだから仕方がない、直ぐに繩を掛けてお引きなさい」

捕「殿様のお蔭で漸く取抑え、誠に有り難う存じます、何うかお名前を承わりとう存じます」

相「不淨人を取押えたとて姓名なぞを申すには及ばん、これ／＼重箱を落したから搜してくれ、あゝこれだ／＼、危なかつたのう」

孝「然しお父様、何分悪人とは申しながら、主人の法事の帰るさに繩を掛けて引渡すは何うも忍びない事でござります」

相「なれども左様申してはいられない、渡してしまいなさい、早く引きなされ」

捕方は伴藏を受取り、繩打つて引立て行き、其の筋にて吟味の末、相当の刑に行われましたことはあとにて分ります。さて相川は孝助を連れて我屋敷に帰り、互に無事を悦び、其の夜は過ぎて翌日の朝、孝助は旅支度の用意の為め、小網町辺へ行つて種々買物をしようと家を立ち出で、神田旅籠町へ差懸る、向うに白き幟に人相墨色白翁堂勇齋とあるを見て、孝助は

「はゝアこれが、昨日良石和尚が教えたには今日の八ツ頃には必ず逢いたいものに逢う事が出来ると仰せあつた占者だな敵の手掛りが分り、源次郎お國に廻り逢う事もやあろうか、何にしろ判断して貰おう」

と思い、勇齋の門辺に立つて見ると、名人のようではござりま

せん。竹の打ち付け窓に煤だらけの障子を建て、脇に櫻の板に人相墨色白翁堂勇齋と記して有りますが、家の前などは掃除などしあた事はないと見え、塵だらけゆえ、孝助は足を爪立つまだてながら中に入り、

孝「おたのみ申します／＼」

白「なんだナ、誰だ、明けてお入り、履物はきものを其処そこへ置くと盗ま
れると云ひながら持つてお上り」

孝「はい、御免下さいまし」

と云いながら障子を明けて中うちへ通ると、六畳ばかりの狭い所に、
眞黒になつた今戸焼いまどやきの火鉢の上に口のかけた土瓶どびんをかけ、茶碗が転がつてゐる。脇の方に小さい机を前に置き、其の上に易えきし

書よを五六冊積上げ、傍かたえの筆立てには短かき筆ふでたて竹を立て、其の前に丸い小さな硯すだりを置き、勇齋はぼんやりと机の前に座しました。態さまは、名人かは知らないが、少しも山も飾りもない。じゞむさくしている故、名人らしい事は更になけれども、孝助は予ねて良石和尚の教えもあればと思つて両手を突き、

孝「白翁堂勇齋先生は貴あなたさま方様でございますか」

白「はい、始めましてお目にかかります、勇齋は私だよ、今年はもう七十だ」

孝「それは誠に御壯健な事で」

白「まア／＼達者でござります、お前は見て貰いにでも来たのか」

孝「へい手前は谷中新幡隨院の良石和尚よりのお指図さしづで参りました

たものでございますが、先生に身の上の判断をしていただきどうございます」

白「はゝア、お前は良石和尚と心安いか、あれは名僧だよ、智識だよ、実に生いき仏ぼとけだ、茶は其處そこにあるから一人で勝手に汲んでお上り、ハゝアお前は侍さんだね、何歳いくつだえ」

孝「へい、二十二歳でございます」

白「ハア顔をお出し」

と天眼鏡を取出し、暫しばらくのあいだ相を見ておりましたが、大道の易者のように高慢は云わづ

白「ハゝアお前さんはマアヽヽ家柄の人だ、して是まで目上に縁なくして誠にどうも一々苦労ばかり重なつて来るような訳に成つ

たの

孝「はい、仰せの通り、どうも目上に縁がございません」

白「其処でどうも是迄の身の上では、薄氷を踏むが如く、剣の上を渡るような境界で、大いに千辛万苦をした事が顕われているが、そうだろうの」

孝「誠に不思議、実によく当りました、私の身の上には危い事ばかりでございました」

白「それでお前には望みがあるであろう」

孝「へい、ございますが、其の望みは本意が遂げられましようか如何でございましょう」

白「望み事は近く遂げられるが、其処の所がちと危ない事で、

これと云う場合に向いたなら、水の中でも火の中でも向うへ突切る勢いがなければ、必ず大望たいもうは遂こげられぬが、まず退しりぞくに利あらず進むに利あり、斯こういう所で、悪くすると斬殺きりころされるよ、どうも剣難が見えるが、旨く火の中水の中を突切つて仕舞えれば、広々とした所へ出て、何事もお前の思う様になるが、それは難かしいから気を注つけなけりやいけない、もう是切り見る事はないからお帰り／＼

孝「へい、それに就つきまして、私疾わたくしうより尋ねる者がござりますが、是は何うしても逢えない事とは存じて居りますが、其の者の生死しょうしは如何いかゞでございましよう、御覽下さいませ」

白「ハヽア見せなさい」

と又相そうして、

白「むゝ、是は目上だね」

孝「はい、左様さようでございます」

白「これは逢つているぜ」

孝「いゝえ、逢いません」

白「いや逢つています」

孝「尤ももつと今年こんねんより十九年以前に別れましたるゆえ、途中で逢つても顔も分らぬ位でありますから、一緒に居りましても互いに知らずに居りましたか」

白「いや／＼何でも逢つて居ます」

孝「少ちいさい時分に別れましたから、事に寄つたら往来で摩すれ違つ

た事もございましょうが、逢つた事はございません」

白「いや／＼そうじやない、慥かに逢つている」

孝「それは少さい時分の事故」

白「あゝ煩さい、いや逢つていると云うのに、外には何も云う事はない、人相に出ているから仕方がない、屹度^{きつと}逢つている」

孝「それは間違いでございましょう」

白「間違いではない、極めた所を云つたのだ、それより外に見る所はない、昼寝をするんだから帰つておくれ」

とそつけなく云われ、孝助は後^{あと}を細かく聞きたいからもじ／＼していると、また門口より入り来るは女連れの二人にて、

女「はい御免下さいませ」

白 「あゝ又來たか、昼寝が出来ねえ、おゝ二人か何一人は供だと、
そんなら其處そこに待たして此方こっちへお上り」

女 「はい御免ごめんくだされませ、先生のお名を承わりまして参りまし
た、どうか當用とうようの身の上を御覽を願います」

白 「はい此方こっちへお出で」

と又此の女の相をよくく見て、

「これは悪い相だなア、お前はいくつだえ」

女 「はい四十四歳でござります」

白 「これはいかん、もう見るがものはない、ひどい相だ、一体お
前は目の下に極縁ごく縁のない相だ、それに近々きんくの内屹度死ぬよ、死
ぬのだから外に何にも見る事はない」

と云われて驚き暫く思案を致しまして、

女「命數は限りのあるもので、長い短かいは致し方がございます
んが、わたくし私は一人尋ねるもののがございますが、其の者に逢われない
で死にます事でございましょうか」

白「フウム是は逢つて いる訳だ」

女「いえ逢いません、尤も幼年の折に別れましたから、先でも私
の顔を知らず、私も忘れたくらいな事で、すれ違つたくらいでは
知れません」

白「何なんでも逢っています、もうそれで外に見る所も何なにもない」

女「其の者は男の子で、四つの時に別れた者でございますが」

という側から、孝助は若しやそれかと彼の女の側に膝をすりよ

せ、

孝「もし、お内室様へ少々伺いますが、何れの方かは存じませんが、只今四つの時に別れたと仰しやいます、その人は本郷丸山辺りで別れたのではございませんか、そしてあなたは越後村上の内藤紀伊守様の御家来澤田右衛門様のお妹御ではございませんか」

女「おやまアよく知つてお出でゞす、誠に、はい／＼」

孝「そして貴方あなたのお名前はおりゑ様とおつしやつて、小出信濃守様の御家来黒川孝藏様へお縁かたづき附ごになり、其の後御離縁になつたお方ではございませんか」

女「おやまア貴方は私の名前までお当てなすつて、大そうお上手様、これは先生のお弟子でござりますか」

と云うに、孝助は思わず側により、

孝「オ、お母様お見忘れでございましょうが、十九年以前、手前四歳の折お別れ申した伴の孝助めでございます」

りゑ「おやまアどうもマア、お前がアノ伴の孝助かえ」

白「それだから先刻から逢つてている」と云うのだ

おりゑは嬉涙を拭い、

りゑ「何うもマア思い掛けない、誠に夢の様な事でござります、そうして大層立派にお成りだ、斯う云う姿になつてゐるのだものを、表で逢つたつて知れる事じやアありません」

孝「誠に神の引合せでございます、お母様お懐かしゆうございました、私は昨年越後の村上へ参り、段々御様子を伺いますれば、

澤田右衛門様の代も替り、お母様のいらっしゃいます所も知れませんから、何うがなしてお目に懸りたいと存じていましたに、図はからずこゝでお目に懸り、先ずお壯健でいらツしやいまして、斯このんな嬉しい事はございません」

りゑ「よくマア、嘸さぞお前は私を怨んでおいでだらう」

白「そんな話をこゝでしては困るわな、併しがし十九年ぶりで親子の対面、嘸話があるうが、いらざる事だが、供に知れても宜くない事もあろうから、何処どこか待まちあい合まつあいか何かへ行つてするがいゝ」

孝「はいゝ、先生お蔭様で誠に有難うございました、良石様のお言葉といい、貴方様の人相のお名人と申し、実に驚き入りました」

白「人相が名人というわけでもあるまいが、皆こうなつてゐる因縁だから見 料はいらねえから帰りな、ナニ些ちつとばかり置いて行くか、それも宜かろう」

りゑ「種々お世話様、有り難う存じました、孝助や種々話もしたい事があるから斯うしよう、私は今馬喰町三丁目下野屋といふ宿屋に泊つてゐるから、お前よ一ト足先へ帰り、供を買物に出すから、其の後へ供に知れないように上あがつておいで」

白「囁嬉さざぞしかろうのう」

孝「さようならば、これから直見すぐえ隠がくれにお母様のお跡に付いて参りましょう、それはそうと」

と云いつゝも懷中より何程か紙に包んで見料を置き、厚く札を

述べ白翁堂の家を立たち出だしで、見え隠れに跡をつけ、馬喰町へまいり、下野屋の門辺かどべに佇たゞみ待つて居おるうちに、供の者が買ものに出て行ゆきましたから、孝助は宿屋はいに入りり、下女おんなに案内を頼んで奥へ通る。りゑ「サア／＼此處こゝへ来な、本当にマアどうもねえ」と云いながら孝助をつく／＼見て、

「見忘れはしませぬ 幼おさなながお顔がお、お前の親御孝藏殿によく似ておいでだよ、そうして大層立派におなりだねえ、お前がお父とう様さまの跡とつさまを継いで、今でもお父様はお存ぞん生しようでいらツしやるかえ」

孝「はい、お母様此の両隣の座敷には誰も居りは致しませんか」
りゑ「いゝえ、私も来て間もないことだが、昼うちの中みんなは皆買物や見物に出かけてしまうから誰もいないよ、日暮方は大勢帰つて来る

が、今は留守居が昼寝でもしている位だろうよ」

わたくし

孝「フウ、左様なら申上げますが、お母様は私の四つの時の二月にお離縁になりましたのも、お父様があの通りの酒乱からで、それからお父様は其の年の四月十一日、本郷三丁目の藤村屋新兵衛と申す刀屋の前で斬殺きりころされ、無慙むざんな死をお遂げなされました」

りゑ「おやまア矢張御酒やつぱりごしゆゆえで、それだから私アもうお前のお

父さんとうつでは本当に苦労を仕抜いたよ、あの時もお前と云う可愛い子があることだから、別れたいのではないが、兄が物堅い気性だから、あんな者へ付けては置かれん、酒ゆえに主家しゆかをお暇いとまに成るような者には添わせて置かんと、無理無体に離縁を取つたが、お行方の事は此の年月としつき忘れた事はありませんぬ、そうしてお父様が

亡くなつては、跡で誰もお前の世話をする者がなかつたろう」
孝「さアお父様の店受彌兵衛と申しまする者が育てゝ呉れわたくし
が十一の時に、お前のお父さんはこれくで死んだと話して呉れ
ました故、私も仮令今は町人に成つてはいますものゝ、元は武家
の子ですから、成人の後は必ずお父様の仇を報いたいと思ひ詰め、
屋敷奉公をして剣術を覚えたいと思つていましたに、縁有つて昨
年の三月五日、牛込軽子坂に住む飯島平左衛門とおつしやる、お
広敷番ひろしきばんの頭をお勤めになる旗下屋敷に奉公住すみを致した所、其の
主人が私をば我子わがこのように可愛がつてくれましたゆえ、私も身の
上を明し、親の敵かたきが討ちたいから、何うか剣術を教えて下さいと
頼みましたれば、殿様は御番疲れのお厭いもなく、夜までかけて

御剣術を仕込んで下されました故、思いがけなく免許を取るまでになりました

りゑ「おやそう、フウンー」

孝「すると其の家うちにお國と申す召使がありました、これは水道端の三宅のお嬢様が殿様へ御縁組になる時に、奥様に附いて來た女でございますが、其の後奥様がお逝れかくになりました所、隣家の旗はたもと下の次此のお國にお手がつき、お妾となりになりました所、内々ないく主人を殺そうと謀たくみました男宮野邊源次郎と不義を働き、主人を殺そうと謀たくみましたが、主人は素より手者の事故ゆえ、容易に殺することは出来ないから、中川へ網船あみぶねに誘い出し、船の上から突落つきおとして殺そうという事を私が立聞しましたゆえ、源次郎お國をひそかに殺し、自分は割わたくし

腹しても何うか恩ある御主人を助けたいと思い、昨年の八月三日の晩に私が槍を持つて庭先へ忍び込み、源次郎と心得突懸けたは間違いで、主人平左衛門の脇あばらを深く突きました」
りゑ「おやまアとんだ事をおしだねえ」

孝「サア私も驚いて気が狂うばかりに成りますと、主人は庭へ下りて来て、ひそくと私への懺悔話ざんげばなしに、今より十八年前の事、貴様の親父おやじを手に掛けたは此の平左衛門が未だ部屋住まにて、平太郎と申した昔の事、どうか其の方の親の敵なと名告り、貴様の手に掛りて討たれたいとは思えども、主殺しゆうころしの罪に落すを不便に思い、今日までは打過ぎたが、今日こそ好よい折からなれば、斯くわざと源次郎の態なりをして貴様の手にかかり、猶委細なおの事は此の書置したに認

め置いたれば、跡の始末は養父相川新五兵衛と共に相談せよ、貴様はこれにて怨を晴してくれ、然る上は仇は仇恩は恩、三世も変らぬ主従と心得、飯島の家を再興してくれろ、急いで行けと急き立てられ、養家先なる水道端の相川新五兵衛の宅へ参り、舅と共に書置を開いて見れば、主人は私を出した後にて直ぐに客間のまへ忍び入り源次郎と槍試合をして、源次郎の手に掛り、最後をすると認めてありました書置の通りに、遂に主人は其の晩果敢なくおなりなされました、又源次郎お國は必ず越後の村上へ立越すべしとの遺書にありますから、主の仇を報わん為め、養父相川とも申し合せ、跡を追いかけて出立致し、越後へ参り、諸方を尋ねましたが一向に見当らず、又あなたの事もお尋ね申しましたが、

これも分りません故、余儀なく此の度主人の年回をせん為めに当地へ帰りました所、不図ふと今日御面会を致しますとは不思議な事でございます」

と聞いて驚き小声に成り、

りゑ「おやマア不思議な事じやアないか、あの源次郎とお國は私の宅にかくまつてありますよ、どうもまア何なんたる悪縁だろう、不思議だねえ、私が廿六の時黒川の家うちを離縁になつて国へ帰り、村上に居ると、兄が頻りに再縁しろとすゝめ、不思議な縁でお出入の町人で荒物の御用を達す樋口屋五兵衛と云うものゝ所へ縁付くと、そこに十三になる五郎三郎ごろうさぶろうという男の子と、八ツになるお國という女の子がありまして、其のお國は年は行かぬが意地の悪

いとも性の悪い奴で、夫婦の合中を突ついて仕様がないから、十一の歳江戸の屋敷奉公にやつた先は、水道端の三宅という旗下でな、其の後奥様附で牛込の方へ行つたとばかりで後は手紙一本も寄越さぬくらい、實に酷い奴で、夫五兵衛が亡くなつた時も訃音を出したに帰りもせず、返事もよこさぬ不孝もの、兄の五郎三郎も大層に腹を立つていましたが、其の後私共は仔細有つて越後を引払い、宇都宮の杉原町すぎはらまちに来て、五郎三郎の名前で荒物屋の店を開いて、最早七年居ますが、つい先達せんだつてお國が源次郎と云う人を連れて來ていうのには、私が牛込の或るお屋敷へ奥様附で行つた所が、若氣の至りに源次郎様と不義私いたずら通ゆえに此のお方は御勘当となり、わたくし故に今は路頭に迷う身の上だから、誠に済ま

ない事だが匿かくまつてくれると云つて、そんな人を殺した事なんぞは何とも云わないから、源次郎への義理に今は宇都宮の私の内にいるよ、私は此の間五郎三郎から小遣こづかいを貰い、江戸見物に出掛けて来て、未だこちらへ着いて間も無くお前に巡り逢つて、此の事が知れるとは何たら事だねえ」

孝「ではお國源次郎は宇都宮に居りますか、つい鼻の先に居ることも知らないで、越後の方から能登へかけ尋ねあぐんで帰つたとは、誠に残念な事でござりますから、どうぞお母様がお手引をして下すつて、仇を討ち、主人の家の立行たちゆくように致したいものでござります」

りゑ「それは手引をして上げようともサ、そんなら私は直すぐにこれ

から宇都宮へ帰るから、お前は一緒に^いお出で、だがこゝに一つ困つた事があると云うものは、あの供がいるから、是れを聞き付け喋られると、お國源次郎を取逃がすような事になろうも知れぬから、こうと……」

思案して、

「私は明日の朝供を連れて出立するから、今日のようにお前が見え隠れに跡を追つて来て、休む所も泊る所も一つ所にして、互に口をきかず、知らない者の様にして置いて、宇都宮の杉原町へ往つたら供を先へ遣つて置いて、そうして両人で相図^{あいづ}を譲し合したら宜かろうね^よ」

孝「お母様有り難う存じます、それでは何うかそういう手筈^{てはず}に願

いとう存じます、私はこれより直に宅へ帰つて、舅へ此の事を聞かせたなら何のように悦びましよう、左様なら明朝早く参つて、此の家の門口に立つて居りましよう、それからお母様先刻つい申上げ残しましたが、私は相川新五兵衛と申す者の方へ主人の媒妁で養子にまいり、男の子が出来ました、貴方様には初孫の事故お見せ申したいが、此の度はお取急ぎでござりますから、何れ本懐を遂げた後の事にいたしましょう」

りゑ「おやそうかえ、それは何にしても目出度い事です、私も早く初孫の顔が見たいよ、それに就いても、何うか首尾よくお國と源次郎をお前に討たせたいものだのう、これから宇都宮へ行けば私がよき手引をして、屹度兩人を討たせるから」

と互に言葉を誓い孝助は暇を告げて急いで水道端へ立帰りました。

相「おや孝助殿、大層早くお帰りだ、いろいろお買物が有つたろうね」

孝「いえ何も買いません」

相「なんの事だ、何も買わずに来た、そんなら何か用でも出来たかえ」

孝「お父様とうさまどうも不思議な事がありました」

相「ハヽ随分世間には不思議な事も有るものでねえ、何か両国のか川の上に黒氣くろきでも立つたのか」

孝「左ようではございませんが、昨日良石和尚が教えて下さいま

した人相見の所へ参りました」

相「成程行つたかえ、そうかえ、名人だとなア、お前の身の上の
判断は旨く当つたかえ／＼」

孝「へい、良石和尚が申した通り、わたくし私の身の上は剣の上を渡る様
なもので、進むに利あり退くに利あらずと申しまして、良石和尚
の言葉と聊か違ひはござりません」

相「違いませんか、成程智識と同じ事だ、それから、へえそれか
ら何の事を見て貰つたか」

孝「それから私が本意を遂げられましようかと聞くと、本意を遂
げるは遠からぬうちだが、のがれ難い剣難が有ると申しました」

相「へえ剣難が有ると云いましたか、それは極ごく心配になる、又昨

日のような事があると大変だからねえ、其の剣難は何うかして遁れるような御祈祷でもしてやると云つたか」

孝「いえ左ような事は申しませんが、貴方も御存じの通り私が四歳の時別れました母に逢えましようか、逢えますまいかと聞くと、白翁堂は逢っていると申しますから、幼年の時に別れたる故、途中で逢つても知れない位だと申しても、何^{なん}でも逢っていると申し遂^{つい}に争いになりました」

相「ハアその所は少し下手糞だ、併し当るも八卦^{はツケ}当らぬも八卦、そう身の上も何もかも当りはしまいが、強情を張つてごまかそうと思つたのだろうが、其所^{そこ}の所は下手糞だ、なんとか云つてやりましたか、下手糞とか何とか」

孝「すると後あとから一人四十三四の女が参りまして、これも尋ねる者に逢えるか逢えないかと尋ねると、白翁堂は同じく逢っているというものだから、其の女はなに逢いませんといえ巴、急度逢つていると又争いになりました」

相「あゝ、こりやからツペた誠に下手だが、そう当る訳のものではない、それには白翁堂も恥をかいだろう、お前と其の女と二人で取つて押えてやつたか、それから何うした」

孝「さア余り不思議な事で、わたし私も心にそれと思い当る事もありますから、其の女にはおりゑ様と仰しやいませんかと尋ねました所が、それが全くわたくし私の母でございまして、先でも驚きました」相「ハゝア其の占うらないは名人だね、驚いたねえ、成程、フム」

是より孝助はお國源次郎両人の手懸りが知れた事から、母と諜めし合わせた。一伍一什を物語りますると、相川も驚きもいたし、又悦び、誠に天から授かつた事なれば、速に明日の朝遅れぬように出立して、日出度く本懐を遂げて参れという事になりました。翌朝早天に仇討に出立を致し、是より仇討は次に申上げます。

二十一

孝助は國らずも十九年ぶりにて実母おりゑに廻り逢いまして、馬喰町の下野屋と申す宿屋へ参り、互に過ぎ身の上の物語を致して見ると、思いがけなき事にて、母方にお國源次郎がかくまわれ

てある事を知り、誠に不思議の思いをなしました処、母が手引をして仇あだを討たせてやろうとの言葉に、孝助は飛立つばかり急ぎ立道端を出立し、馬喰町なる下野屋方へ参り様子を見ておりますると、母も予ねて約したる事なれば、身支度を整え、下男を供に連れ立ち出でましたれば、孝助は見え隠れに跡を尾つけて参りましたが、女の足の拶はかどらず、幸手、栗橋、古河、真間田まゝだ、雀すずめの宮みやを後あとになし、宇都宮へ着きましたは、丁度九日の日の暮くれ／＼に相成りましたが、宇都宮の杉原町の手前まで参りますと、母おりゑは先ず下男を先へ帰し、五郎三郎に我が帰りし事を知らせてくれると云い付けやり、孝助を近く招ぎ寄せまして小声になり、

母「孝助や、私の家は向うに見える紺の暖簾に越後屋と書き、山形に五の字をしるしたのが私の家だよ、あの先に板塀があり、付いて曲ると細い新道のような横町よこちょうがあるから、それへ曲り三四軒行くと左側の板塀に三尺の開きが付いてあるが、それから這入れば庭伝い、右の方ほうの四畳半の小座敷にお國源次郎が隠れいる事ゆえ、今晚私が開きの栓せんを開け置くから、九つの鐘を合図に忍び込めば、袋の中の鼠同様、覚られぬよう致すがよい」

孝「はい誠に有り難うぞんじます、団らズも母様はくさまのお蔭にて本懐を遂げ、江戸へ立帰り、主家再興の上わたくし私は相川の家を相続致しますれば、お母様をお引取申して、必ず孝行を尽す心得、さすれば忠孝の道も全うする事が出来、誠に嬉しゆう存じます、さよ

うなれば私は何方へ参つて待受けて居ましょどちら

母「そうさ、池上町いけがみまちの角屋すみやは堅い」という評判だから、あれへ参

り宿を取つておいで、九ツの鐘を忘れまいぞ」

孝「決して忘れません、さようならば」

と孝助は母に別れて角屋へまいり、九ツの鐘の鳴るのを待受け居ました。母は孝助に別れ、越後屋五郎三郎方へ帰りますと、五郎三郎は大きに驚き、

五「大層お早くお帰りになりました、まだめつたにはお帰りにならないと思つていましたのに、存じの外ほかにお早うござりました、それでは逆とても御見物は出来ませんでございましたらう」

母「はい、私は少し思う事があつて、急に国へ帰る事になりました

たから、奉公人共への土産物も取つてゐる暇もない位で」

五「アレサなに左様御心配がいるものでございましょう、お母さまは芝居でも御見物なすつてお帰りになる事だらうから、中々一ト月や二タ月は故郷こきょう忘ぼうじ難がたしで、あつちこつちをお廻りなさるから、急にはお帰りになるまいと存じましたに」

母「さアお前に貰つた旅用の残りだから、むやみに遣つかつては済まないが、どうか皆に遣つておくれよ」

と奉公人銘めい々に包んで遣わしまして、其の外着古しの小袖半纏ほんてんなどを取分け。

五「そんなに遣らなくつても宜しゆうござります」

母「ハテこれは私の少々心あつての事で、詰らん物だが着古しの半纏は、女中にも色々世話に成りますからやつておくれ、シテお國や源次郎さんは矢張奥の四畳半に居りますか」

五「誠にあれはお母様かゝさまに対しても置かれた義理ではございません、憎い奴でございますが、強しいて縋すがり付いて参り、私故にお隣屋敷の源次郎さんが勘当をされたと申しますから、義理でよんどころなく置きましたものゝ、嘸さぞあなたはお厭いやでございましよう」

母「私はお國に逢つて緩ゆつくり話がしたいから、用もあるだろうが、いつもより少々店を早くひけにして、寝かしておくれ、私は四畳半へ行つて國や源さんに話があるのだが、是でお酒やお肴を」

五「およし遊ばせ」

母「いや、そうでない、何も買って来ないから是非上げておくれよ」

五 「はい／＼」

と氣の毒そうに承知して、五郎三郎は母の云付けなれば 酒肴さけさか
肴かなを誂あつらえ、四畳半の小間へ入れ、店の奉公人も早く寝かしてし

まい、母は四畳半の小座敷に来たりて内にはいれば、

國「おや、お母様は、さま、大層早くお帰り遊ばしました、私は未だめ
つたにお帰りにはなりますまいと思い、屹度きつと一ト月位は大丈夫お
帰りにはならないとお噂ばかりして居りました、大層お早く、本
当に悔り致びつくしました」

源「只今はお土産として御酒肴ごしゅこうを沢山に有り難うぞんじます」

母「いえく、なんぞ買つて来ようと思いましたが、誠に急ぎましたゆえ何も取つて居る暇もありませんでした、誰も外に聞いている人もないようだから、打解けて話をしなければならない事があるが、お國やお前が江戸のお屋敷を出た時の始末を隠さずに云つておくんなさい」

國「誠にお恥かしい事でございますが、若気の過り、此の源さまと馴染めた所から、源さまは御勘当になりまして、行き所のないようには皆な私ゆえと思い、悪いこととは知りながらお屋敷を逃出し、源さまと手を取り合い、日頃無沙汰を致した兄の所に頼り、今ではこうやつて厄介になつて居ります」

母「不義淫奔いたずらは若い内には随分ありがちの事だが、お國お前は

飯島様のお屋敷へ奥様付になつて來たが、奥様がおかれになつてから、殿様のお召使になつてゐるうちに、お隣の御二男源次郎さまと、隣りずかの心安さに折々おりくお出になる所から、お前は此の源さまと不義密通いたずらを働いた末、お前方が申し合せ、殿様を殺し、有金大小衣類きゆういを盗み取り、お屋敷を逃げておいでだらうがな」と云われて二人は顔色変え、

國「おやまア悔りびつくします、お母様かあさま何をおつしやいます、誰が其の様な事を云いましたか、少しも身に覚えのない事を云いかけられ、本当に悔り致しますわ」

母「いえくいくら隠してもいけないよ、私の方にはちゃんと証拠がある事だから、隠さずに云つておしまい」

國 「そんな事を誰が申しましたろうねえ源さま」

と云え巴、源次郎おちつき落着ながら、

源「誠に怪しからん事です。お母様もし外の事とは違います、手

前も宮野邊源次郎、何ゆえお隣の伯父を殺し、有金衣類ほかいよいを盗みし
など、何者がさような事を申しました、毛頭覚えはございません」

母「いや／＼そうおっしゃいますが、私は江戸へ参り、不思議と
久し振りで逢いました者が有つて、其の者から承わりました」

源「フウ、シテ何者でござりますか」

母「はい、飯島様のお屋敷でお草履取を勤めて居りました、孝助
と申す者でなア」

源「ムヽ孝助、彼奴あいつは不届至極な奴で」

國「アラ彼奴はマア憎い奴で、御主人様のお金を百両盗みました位の者ですから、どんな拵え事をしたか知れません、あんな者の云う事をあなた取上げてはいけません、何うして草履取が奥の事を知つている訳はございません」

母「いえ／＼お國や、その孝助は私の為には実の悴でございます」と云われて兩人は驚き顔して、後へもじ／＼とさがり、

母「さア、私が此の家へ縁付いて来たのは、今年で丁度十七年前の事、元私の良人つれあいは小出様の御家来で、お馬廻り役を勤め、百五十石頂戴致した黒川孝藏と云う者でありましたが、乱酒らんしゆ故に屋敷は追放、本郷丸山の本妙寺長屋へ浪人していました処、私の兄澤田右衛門が物堅い氣質で、左様な酒癖さけくせあしき者に連添う

て いるよりは、離縁を取つて国へ帰れと押^{おし}て迫られ、兄の云うに是非もなく、其の時四つになる伴を後に残し、離縁を取つて越後の村上へ引込み、二年程過ぎて此の家に再縁して参りましたが、此の度江戸で囮^{ひきこ}らずも十九年ぶりにて伴の孝助に逢いましたが、実の親子でありますゆえ、段々様子を聞いて見ると、お前達は飯島様を殺した上、有金大小衣類まで盗み取り、お屋敷を逐電したと聞き、私は悔りしましたよ、それが為飯島様のお家は改易になりましたから、伴の孝助が主人の敵^{かたき}のお前方を討たなければ、飯島の家名を興^{おこ}す事が出来ないから、敵を捜す身の上と、涙ながらの物語に、私も十九年ぶりで実の子に逢いました嬉し紛れに、敵のお国源次郎は私の家に匿^{かく}まつてあるから、手引をして敵を打た

せてやろうと、サうつかり云つたは私の過り、孝助は血を分けた
 実子なれども、一旦離縁を取つたれば黒川の家の子、此の家に再
 縁する上からは、今はお前は私の為に猶更義理ある大切の娘な
 りや、縁の切れた恵の情に引かされて、手引をしてお前達を討た
 せては、亡くなられたお前の親御樋口屋五兵衛殿の御位牌へ対し
 て、何うも義理が立ちませんから、悪い事を云うた、何うしたら
 宜かろうかと道々も考えて来ましたが、孝助は後になり先になり
 私に附きて此の地に参り、実は今晚九時こゝのつどきの鐘を合図に庭口か
 ら此家に忍んで来る約束、討たせては済まないから、お前達も隠
 さず実はこれくと云いさえすれば、五郎三郎から小遣こづかいに貰つ
 た三十両の内、少し遣つて未だ二十六七両は残つてありますから、

これをお前達に路銀として餞別に上げようから、少しも早く逃げ
のびなさい、立退く道は宇都宮の明神様の後山を越え、慈光
寺の門前から付いて曲り、八幡山を抜けてなだれに下りると日
光街道、それより鹿沼道へ一里半行けば、十郎ヶ峰という所、
それよりまた一里半あまり行けば鹿沼へ出ます、それより先は田
沼道奈良村へ出る間道、人の目つまにかゝらぬ抜道、少し
も早く逃げのびて、何処の果なりとも身を隠し、悪い事をしたと
気がつきましたら、髪を剃つて二人とも袈裟と衣に身を裹し、殺
した御主人飯島様の追善供養致したなら、命の助かる事もあろう
が、只不便なのは悴の孝助、敵の行方の知れぬ時は一生旅寝の艱
難困苦、御主のお家も立ちません、気の毒な事と気がついた

ら心を入れかえ善人に成つておくれよ、さア／＼早く」

と路銀まで出しまして、義理を立てぬく母の眞心まごころ、流石さすがの二人も面目めんぼくなく眼と眼を見合せ、

國「はい／＼誠にどうも、左様とは存じませんでお隠し申したのは済みません」

源「實に御信ごしんじつ実まことなお言葉、恐れ入りました、拙者も飯島を殺す氣ではござらんが、不義が顯あらわれ平左衛門が手槍にて突いてかかる故、止むを得ず斯かくの如きの仕合しあわせでござります、仰せに従い早々逃げのび、改心致して再びお札に参りますするでござります、これお國や、お錢別として路銀まで、あだに心得ては済みませんよ」

國「お母は、さま様、どうぞ堪忍してくださいましよ」

母「さア早く早く行かぬか、かれこれ最早もやはや九ツになります」

と云われて二人は支度をしていると、後の障子を開けて這入りましたはお國の兄五郎三郎にて、突然いきなりお國の側へより、

五「お母様少しお待ちなすつてください、これ國これへ出ろく、本当にマア呆れはてゝ物が云われねえ奴だ、内へ尋ねて來た時なんと云つた、お隣の次男と不義をしたゆえ、源さんは御勘当になりました、身の置所がないようにしたも私ゆえ、お氣の毒でならねえから一緒に連れて來ましたなどと、生噓なまざらを遣つて我をだましたな、内に斯うやつて置く奴じやアねえぞ、お父様が御死去に成った時、幾度いくたび手紙を出しても一通の返事も遺さぬくらいな人でなし、只一人の妹だが死んだと思ってな諦めていたのだ、それにのめり

＼と尋ねて來やアがつて、置いてくれろというから、よもや人を殺し、泥坊をして來たとは思わねえから置いてやれば、今聞けば實に呆れて物が云われねえ奴だ、お母様誠に有り難うございまするが、あなたが親父へ義理を立てゝ、此奴等を逃がして下さいまして天命は遁(のが)れられませんから、逆(とて)も助かる氣遣いはございません、いつそ黙つておいでなすつて、孝助様に切られてしまふ方が宜しゆうござりますのに、やいお國、お母様は義理堅(かゝさま)いお方ゆえ、親父の位牌へ対して路銀まで下すつて、そのうえ逃(にげみち)路まで教えて下さると云うはな實に有り難い事ではないか、何とも申そう様はございません、コレお國、この罰(ばちあた)當りめえ、お母様が此の家へ嫁にいらツしやつた時は、手前(てめえ)がな十一の時だが、意地

がわるくてお父様とお母様と己との合^{あいなか}中をつゝき、何分家が揉めて困るから、己がお父^{やじ}さんに勧めて他人の中を見せなければいけませんが、近い所だと駆出して帰つて来ますから、いつそ江戸へ奉公に出した方が宜かろうと云つて、江戸の屋敷奉公に出した所が、善^{いゝこと}事は覚えねえで、密^{いろ}夫^{おとこ}をこしらえてお屋敷を遁げ出すのみならず、御主人様を殺し、金を盗みしというは呆れ果てゝ物が云われぬ、お母様が並の人ならば、知らぬふりをしておいでなすツたら、今夜孝助様に斬^{きりころ}殺^さされるのも心がら、天罰で手前達^{たち}は当然^{あたりまえ}だが、坊主が憎けりや袈裟まで^{しでか}の譬^{たとえ}で、此奴^{こいつ}も敵^{かたき}の片^{かたわれ}割^わと己までも殺される事を仕出来^{でか}すというは、不孝不義の犬畜生め、只一人の兄妹^{きょうだい}なり、殊にやア女の事だから、此

の兄の死水も手前が取るのが當前だのに、何の因果で此様悪婦が出来たろう、お父様も正直なお方、私も是までさのみ悪い事をした覚えはないのに、此の様な悪人が出来るとは實になさけない事でござります、此の畜生めくサツサと早く出て行け」と云われて、二人とも這々の体にて荷拵えをなし、暇乞いもそこくに越後屋方を逃出しましたが、宇都宮明神の後道にかかりますと、昼さえ暗き八幡山、況て真夜中の事でござりますから、二人は気味わるく路の中ばまで参ると、一叢茂る杉林の蔭より出てまいる者を透して見れば、面部を包みたる二人の男、いきなり源次郎の前へ立塞がり、

○「やい、神妙にしろ、身ぐるみ脱いて置いて行け、手前

達ちは大方宇都宮の女郎を連出した駆落者かげおちものだろう

× 「やい金を出さないか」

と云われ源次郎は忍び姿の事なれば、大小を落し差にして居りましたが、此の様子にハツと驚き、拇指にて鯉口を切り、慄え声を振立つて、

源「手前達は何だ、狼藉者」

と云いながら、透して九日夜の月影に見れば、一人は田中の中間喧嘩の龜藏、見紛う方なき面部の古疵、一人は元召使いの相助なれば、源次郎は二度恟り、

源「これ、相助ではないか」

相「これは御次男様、誠に暫くしばら

源 「まあ安心した、本当に恵りした」

國 「私も恵りして腰が抜けた様だつたが、相助どんかえ」

相 「誠にヘイ面目ありません」

源 「手前は未だ斯様な悪い事をしているか」

相 「実はお屋敷をお暇に成つて、藤田の時藏と田中の龜藏と私と三人揃つて出やしたが、何処へも行く所はなし、何うしたら宜かろうかと考験ながら、ぶらくと宇都宮へ参りやして、雲助になり、何うやら斯うやらやつているうち、時藏は傷しようかんを煩わざらつて死んでしまい、金はなくなつて來た処から、ついふらくと出来心で泥坊をやつたが病付やみつきとなり、此の間道かんどうはよく宇都宮の女郎を連れて、鹿沼の方へ駆落するものが時々あるので、こゝに待

伏せして、サア出せと一言いえば、私は剣術を知らねえでも、怖がつて直^じきに置いて行くような弱い奴ばっかりですから、今日もうつかり源様と知らず掛かりましたが、貴方に抜かれりやアおツ切られてしまう処、誠になんともはや」

源「これ龜藏、手前も泥坊をするのか」

龜「へい雲助をしていやしたが、ろくな酒も飲めねえから太く短くやツつけろと、今では斯^{こん}な事をしておりやす」

と云われ、源次郎は暫^{しば}し小首を傾^{かた}げて居りましたが、

「好^いい所で手前達に逢うた、手前達も飯島の孝助には遺恨があろうな」

龜「えゝ、ある所じやアありやせん、川の中へ放り込まれ、石で

頭を打裂き、相助と二人ながら大曲りでは酷い目に逢い、這々の体で逃げ返つた処が、此方はお暇、孝助はぬくぬくと奉公しているというのだ、今でも口惜しくつて堪りませんが、彼奴はどうしました」

源「誰も外に聞いている者はなかろうな」

相「へい誰がいるのですか」

源「此の國の兄の宅は杉原町の越後屋五郎三郎だから、暫く彼処に匿まっていたところ、母というのは義理ある後妻だが、不思議な事でそれが孝助の実母であるとよ、此の間母が江戸見物に行つた時孝助に廻り逢い、悉しい様子を孝助から残らず母が聞取り、手引をして我を打たせんと宇都宮へ連れては來たが、義理堅い女

だから、亡父五兵衛の位牌へ対してお國を討たしては済まないと
 いう所で、路銀まで貰い、斯うやつて立たせてはくれたものゝ、
 其処は血肉を分けた親子の間、事によると後から追掛けさせ、や
 つて来まいものでもないが、何うしてか手前らが加勢して孝助を
 殺してくれゝば、多分の礼は出来ないが、二十金やろうじやない
 か」

龜 「宜しゆうございやす、随分やツつけましよう」

相 「龜藏 安受^{やすうけ}合いするなよ、彼奴^{あいつ}と大曲で喧嘩した時、大溝の
 中へ放り込まれ、水を喰^{くら}つてよう／＼逃帰つたくらい、彼奴ア途
 方もなく剣術が旨いから、迂闊^{うつか}たり打^たき合うと叶^{かな}やアしない」

龜 「それは又工夫がある、鉄砲じやア仕様があるめえ、十郎ケ峰

あたりへ待受け、源さまは清水流れの石橋の下へ隠れて居て、己お
 達らたちやア林の間に身を隠している所へ、孝助がやつて來りやア、
 橋を渡り切つた所で、己が鉄砲を鼻ツ先へ突付けるのだ、孝助が
 驚いて後へさがれば、源さまが飛出して斬付けりやア挟み打ち、
 わきアねえ、遁げるも引くも出来アしねえ」

源「じやアどうか工夫してくれろ、何分頼む」

と是から龜藏は何處からか三挺の鉄砲を持ってまいり、皆々連
 立ち十郎ヶ峰に孝助の来るを待受けました。

さて相川孝助は宇都宮池上町の角屋へ泊り、其の晩九ツの鐘の鳴るのを待ち掛けました処、もう今にも九ツだろうと思うから、刀の下緒さげおを取りまして檣たすきといたし、裏と表の目釘めくぎを湿しめし、養父相川新五兵衛から譲り受けた藤四郎吉光の刀をさし、主人飯島平左衛門より形見に譲られた天正助定を差添さしおそえといたしまして、橋を渡りて板塀の横へ忍んで這入りますと、三尺の開き戸が明いていますから、ハ、アこれは母が明けて置いてくれたのだなど忍んで行きますと、母の云う通り四畳半の小座敷がありますから、雨戸の側わきへ立寄り、耳を寄せて内の様子を窺うかゞいますと、家内は一体に寝静まつたと見え、奉公人の鼾いびきの声のみしんといたしまして、池上町と杉原町の境に橋がありまして、其の下を流れます水の音の

みいたしております。孝助はもう家内が寝たかと耳を寄せて聞きますと、内では小声で念仏を唱えている声がいたしますから、ハテ誰か念仏を唱えているものがあるそุดなと思ひながら、雨戸へ手を掛け細目に明けると、母のおりゑが念珠ねんじゆを爪繰りまして念佛を唱えているから、孝助は不審に思ひ小声になり。

孝「お母つかさま、これはお母様のお寝間でござりますか、ひよつと場所を取違えましたか」

母「はい、源次郎お國は私が手引をいたしまして疾とくに逃がしましたよ」

と云われて孝助は惱りし、

孝「えゝ、お逃し遊ばしましたと」

母「はい十九年ぶりでお前に逢い、懐かしさのあまり、源次郎お國は私の家へ匿うちかくまつてあるから手引きをして、私が討たせると云つたのは女の浅慮あさはか、お前と道々来ながらも、お前に手引きをして両人を討たしては、私が再縁した樋口屋五兵衛ひぐちやごひょうえどのに済まないと考えながら來ました、今こゝの家の主人五郎三郎は、十三の時お國が十一の時から世話になりましたから実の子も同じ事、お前は離縁をして黒川の家いえへ置いて来た縁のない孝助だから、両人を手引をして逃かたきがしました、それは全く私がしたに違ふたりないから、お前は敵の縁に繫つながる私を殺し、お國源次郎の後あとを追掛けて勝手に敵をお討ちなさい」

と云われ孝助は呆れて、

孝「え、お母様、それは何ゆえ縁が切れたと仰しやいます、成程親は乱酒でござりますから、あなたも愛想^{あいそ}が尽きて、私の四ツの時に置いてお出になつた位ですから、よくくの事で、お怨み申しませんが、私は縁は切れても血統^{ちすじ}は切れない実のお母さま、私は物心が付きましてお母様はお達者か、御無事でおいでかと案じてばかりおりました所、此度^{こんど}國^{ほか}らずお目にかかりましたのは日頃神^{かみ}信心^{しんじん}をしたお蔭だ、殊にあなたがお手引をなすつて、お國源次郎を討たせて下さると仰しやつたから、此の上もない有難いことと喜んでおりました、それを今晚になつてお前には縁がない、越後屋に縁がある、あかの他人に手引をする縁がないと仰しやるはお情ない、左様なお心なら、江戸表にいる内に何故^{なぜ}これくと

明かしては下さいません、私も敵の行方を知らなければ知らないなりに、又外々ほかくを捜し、仮令草たとえを分けてもお國源次郎を討たずには置きません、それをお逃がし遊ばしては、仮令今から跡を追かけて行きましても、両人ふたりは姿を変えて逃げますから、私には討てませんから、主人の家を立てる事は出来ません、縁は切れても血統ちすじは切れません、縁が切れても血統が切れても宜しゆうございますが、余りの事でござります」

と怨みつ泣きつ口説き立て、思わず母の膝の上に手をついて揺すぶりました。母は中々落着おちつきものですから、

母「成程お前は屋敷奉公をしただけに理窟をいう、縁が切れても血統ちすじは切れない、それを私が手引きをして敵を討たなければ、お

前は主人飯島様の家を立てる事が出来ないから、其の言訳は斯うしてする」

と膝の下にある懐剣を抜くより早く、咽喉へガバリッと突き立てましたから、孝助は悔りし、慌てゝ縋り付き、

孝「お母様何故御自害なさいました、お母様ア／＼」

と力に任せて叫びます。気丈な母ですから、懐剣を抜いて溢れ落る血を拭つて、ホツ／＼とつく息も絶え／＼になり、面色く土氣色に変じ、息を絶つばかり、

母「孝助々々、縁は切れても、ホツ／＼血統は切れんという道理に迫り、素より私は兩人を逃がせば死ぬ覚悟、ホツ／＼江戸で白翁堂に相て貰つた時、お前は死相が出たから死ぬと云われたが、

實に人相の名人という先生の云われた事が今思い当りました、ホ
 ツく再縁した家の娘がお前の主人を殺すと云うは實に何たる惡
 縁か、さア死んで行く身、今息を留めれば此の世にない身体、ホ
 ツく幽靈が云うと思えば五郎三郎に義理はありますまい、お國
 源次郎の逃げて行つた道だけを教えてやるからよく聞けよ」

と云いながら孝助の手を取つて膝に引寄せる。孝助は思わずも
 大声を出して

「情ない」

と云う声が聞えたから、五郎三郎は何事かと来て障子を明けて
 見れば此の始末、五郎三郎は素より正直者だから母の側に繰り付
 き、

五 「お母様おつかさま」、それだから私が申さない事ではありません、孝助様あと後で御挨拶を致します、私はお國の兄で、十三の時から御恩になり、暖簾のれんを分けて戴いたもお母様のお蔭、悪人のお國に義理を立て、何故御自害をなさいました」

と云う声が耳に通じたか、母は五郎三郎の顔をじつと見詰め、苦しい息をつきながら、

母「五郎三郎、お前はちいさい時から 正當しょうとうな人で、お前には似合わない彼あのお國なれども、義理に対しお位牌に対し、私が逃がしました、又孝助へ義理の立たんというは、血統ちすじのものが恩義を受けた主人の家が立たないという義理を思い、自害をいたしたので、何うかお國源次郎の逃げ道を教えてやりたいが、ハツハツ

必ずお前怨んでお呉れでないよ」

五「いゝえ、怨む所ではありません、あなたおせつないから私が申しましよう、孝助様お聞き下さい、宇都の宮の宿しゆくはず外はずれに慈光寺という寺がありますから、其の寺を抜けて右へ往ゆくと八幡山、それから十郎ヶ峯から鹿沼へ出ますから、貴方あなたお早くおいでなさい、ナアニ女の足ですから沢山は行ゆきますまいから、早くお國と源次郎の首を二つ取つて、お母様つかさまのお目の見える内に御覽にお入れなさい、早く！」

と云うから孝助は泣きながら、

孝「はい／＼お母様、五郎三郎さんがお國と源次郎の逃げた道を教えて呉れましたから、遠く逃げんうちに跡追つかけ、両人ふたりの首

を討つてお目にかけます」

という声漸く耳に通じ、

母「ホツ／＼勇ましい其の言葉何うか早く敵を討つて御主人様の
お家いえをたてゝ、立派な人に成つて呉れホツ／＼、五郎三郎殿此の
孝助は外ほかに兄弟もない身の上、また五郎三郎殿も一粒種だから、
これで敵は敵として、これからは何うか実の兄弟と思い、互に力
になり合つて私の菩提を頼みますヨウ／＼」

と云いながら、孝助と五郎三郎の手を取つて引き寄せますから、
兩人ふたりは泣く／＼介抱するうちに次第々々に声も細り、苦しき声で、
母「ホツ／＼早く行かんか／＼」

と云つて血のある懷剣を引き抜いて、

「さア源次郎お國は此の懷剣で止めを刺せ」

と云いたいがもう云えない。孝助は懷剣を受取り、血を拭い、敵を討つて立帰り、お母様に御覧に入れたいが、此の分では之れがお顔の見納めだろうと、心の中うちで念佛を唱え、

孝「五郎三郎さん、どうか何分願います」

と出掛けたは見たが、今母上が最後の際きわだから行き切れないので、又帰つて来ますと、氣丈な母ですから血だらけで這出しながら、虫の息で、

母「早く行ゆかんかく」

と云うから、孝助は

「へい往ゆきます」

と後に心は残りますが、敵を逃がしては一大事と思い、跡を追つて行きました。先刻からこれを立聞きして居た龜藏は、ソリヤこそと思い、孝助より先きへ駆けぬけて、トツくと駆けて行きまして、

龜「源さま、私が今立聞きをしていたら、孝助の母親が咽喉を突いて、お前さん方の逃げた道を孝助に教えたから、こゝへ追掛け来るに違えねえから、お前さんは此の石橋の下へ抜身の姿で隠れていて、孝助が石橋を一つ渡つた所で、私共が孝助に鉄砲を向けますから、そうすると後へ下る所を後から突然に斬つておしまいなさい」

源「ウム宜しい、ぬかつちやアいけないよ」

と源次郎は石橋の下へ忍び、抜身を持つて待ち構え、他の者は十郎ヶ峰のむこうの向の雜木山へ登つて、鉄砲を持つて待つている所へ、かくとは知らず孝助は、息をもつかず追掛けて来て、石橋まで来て渡りかけると、

龜 「待て孝助」

と云うから、孝助が見ると鉄砲を持つている様だから、

孝 「火繩を持つて何者だ」

と向うを見ますと喧嘩の龜藏が、

龜 「やい孝助己を忘れたか、牛込にいた龜藏だ、よく己を酷い目にあわせたな、手前てめえが源様の跡を追つかけて来たら殺そうと思つて待つているのだ」

相「いえー孝助手前のお蔭で屋敷を追出されて 盜賊をするよう
に成つた、今此處で鉄砲で打ち殺すんだからそう思え」

と云えばお國も鉄砲を向けて、

國「孝助、サア逆も逃げられねえから打たれて死んでしまやアが
れ」

孝助は後へ下つて刀を引き抜きながら声張り上げて。

孝「卑怯だ、源次郎、下人や女をこゝへ出して雑木山に隠れて
いるか、手前も立派な侍じやアないか、卑怯だ」

という声が真夜中だからビーンと響きます。源次郎は孝助の後
から逃げたら討とうと思つていますから、孝助は進めば鉄砲で討
たれる、退けば源次郎がいて進退此に谷りて、一生懸命に成つた

から、額と総身から油汗が出来ます。此の時孝助が図らず胸に浮んだのは、予て良石和尚も云われたが、退ひくに利あらず進むに利あり、仮令火の中水の中でも突切つっきつて往ゆかなければ本ほんもう望もうを遂げる事は出来ない、憶おくして後あとへ下さがる時は討たれると云うのは此の時なり、仮令一発二発の鉄砲丸だまに当つても何程の事あるべき、踏込んかたきで敵を討たずに置くべきやと、ふいに切込み、卑怯ひきだと云いながら喧嘩さが龜藏の腕を切り落しました。龜藏は孝助が鉄砲に恐れて後あとへ下さがるように、わざと鼻の先へ出していた所へ、ふいに切込まれたのだから、アツと云つて後あとへ下さがつたが間に合わない、手を切つて落すと鉄砲もドツサリと切落して仕舞いました。昔から随分腕の利いた者は瓶かめを切り、妙珍みょうちん鍛きたえの兜かぶとを割きつた例ためしもあります

が、孝助はそれほど腕が利いておりませんが、鉄砲を切り落せる訳で、あの辺は芋畑が沢山あるから、其の芋茎へ火縄を巻き付けて、それを持つて追剥おいはぎがよく旅人りょじんを威おどして金を取るという事を、予て龜藏かねが聞いて知つてゐるから、そいつを持つて孝助を威かした。芋茎だから誰にでも切れます。是れなら圓朝ごにでも切れます。龜藏が

「アツ」

と云つて倒れたから、相助は驚いて逃出す所を、後ろから切きりか掛けのを見て、お國は

「アレ人殺し」

と云いながら鉄砲を放り出して雑木山へ逃げ込んだが、木の中

だから帯が木の枝に纏からまつてよろける所を一ひとつち刀あびせると、

「アツ」

と云つて倒れる。源次郎は此の有様を見て、おのれお國を斬つた憎い奴と孝助を斬ろうとしたが、雑木山で木が邪魔に成つて斬れない所を、孝助は後うしろから来る奴があると思つて、いきなり振返りながら源次郎もとどりの脇あばらへ掛けて斬りましたが、殺しませんでお國と源次郎の髪かみを取つて栗の根株に突き付けまして、

孝「やい悪人わりやア恩義を忘却して、昨年七月廿一日に主人飯島平左衛門の留守を窺うかゞい、奥庭へ忍び込んでお國と密通している所へ、此の孝助が参つて手前と争つた所が、手前は主人の手紙を出し、それを証拠だと云つて、よくも孝助を弓の折おれで打ぶつたな、

それのみならず主人を殺し、兩人^{ふたり}乗込んで飯島の家を自儘^{じまゝ}にしよ
うと云う人^{にんび}非人^{にんび}、今こそ思^いい知^{つたか}

と云いながら栗の根株へ両人^{ふたり}の顔を擦付^{すりつけ}ますから、兩人とも
泣きながら、

「免^{ゆる}せえ、堪忍しておくんなさいよう」

というのを耳にも掛けず、

孝^{こう}「これお國、手前はお母様^{つかさま}が義理をもつて逃がして下すつたのは、樋口屋の位牌へ対して済まんと道まで教えて下すつたなれども、自害をなすつたも手前故だ、唯一人の母親をよくも殺しあつたな、主人の敵親の敵、なぶり殺しにするから左様心得ろ」と、これから差添^{さしそえ}を抜きまして、

孝「手前のような悪人に旦那様が欺だまされておいでなすつたかと思
うと」

といいながら顔を縦横たてよこに切りまして、又源次郎に向
い、

孝「やい源次郎、此の口で 悪口あつこうを云つたか」

これも同じくズタとざくに切りまして、又母の懐剣で止めをさ
して、両人ふたりの首を切り髷たぶさを持つたが、首という物は重いもので、
孝助は敵を討つて、もうこれでよいと思うと心に緩みゆるみが出て尻も
ちをついて、

孝「あゝ有難い、日頃信心する八幡築土明神まんづくどみようじんのお蔭をもちま
して、首尾よく敵を討ちおおせました」

と拝みをして、どれ行こうと立上ると、

「人殺々々」
ひとごろし
人々々々

という声がするからふり向くと、龜藏と相助の二人が眼が眩ん
でるから、知らずに孝助の方へ逃げて来るから、此奴も敵の片わ
れと二人とも切殺して二つの首を下げて、ひよろくと宇都宮へ
帰つて来ますと、往来の者は驚きました。生首を二つ持て通るの
だから驚きます。中には殿様へ訴える者もありました。孝助はす
ぐに五郎三郎の所へ行つて敵を討つた次第をのべ、殊に

「母がまだ目が見えますか」

と云われ、五郎三郎は妹の首を見て胸塞がり、物も云えない。

母上様は先程息がきれましたというから、この儘では置けない
おつかさま

というので、御領主様へ届けると、敵討の事だからというので、孝助は人を付けて江戸表へ送り届ける。孝助は相川の所へ帰り、首尾よく敵を討つた始末を述べ、それよりお頭かしら小林へ届ける。小林から其の筋へ申立て、孝助が主人の敵を討つた廉かどを以て飯島平左衛門の遺言に任せ、孝助の一子孝太郎しを以て飯島の家を立てまして、孝助は後見となり、芽出度く本領安堵いたしますと、其の翌日伴藏がお仕置になり、其の捨て札すてふだをよんでも見ますと、不思議な事で、飯島のお嬢さまと萩原新三郎と私通くつづいた所から、伴藏の悪事を働いたことが解りましたから、孝助は主人の為め娘の為め、萩原新三郎の為めに、濡れ仏ぬぼとけを建立こんりついたしたといふ。これ新幡隨院濡れ仏の縁起えんぎで、此の物語も少しは勸善懲惡かんぜんちょう

悪の道を助くる事もやと、かく長々とお聴きにいれました。

（拠若林珊瑚筆記）

青空文庫情報

底本：「圓朝全集 卷の1」近代文芸資料複刻叢書、世界文庫

1963（昭和38）年7月10日発行

底本の親本：「圓朝全集 卷の1」春陽堂

1927（昭和2）年12月25日発行

※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の
作業指針」に基づいて、底本の表記をあらためました。

ただし、話芸の速記を元にした底本の特徴を残すために、繰り返
し記号はそのまま用いました。

また、総ルビの底本から、振り仮名の一部を省きました。

底本中ではばらばらに用いられている、「其の」と「其」、「此の」と「此」、
「彼《あ》」と「彼《あの》」は、それぞれ
「其の」「此の」「彼の」に統一しました。

また、底本中では改行されていませんが、会話文の前後で段落を
あらため、会話文の終わりを示す句読点は、受けのかぎ括弧にか
えました。

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-
86）を、大振りにつくっています。

入力：小林繁雄

校正：仙酔ゑびす

2010年2月8日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたつたのは、ボランティアの皆さんです。

怪談牡丹灯籠

怪談牡丹灯籠

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 三遊亭圓朝

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>